

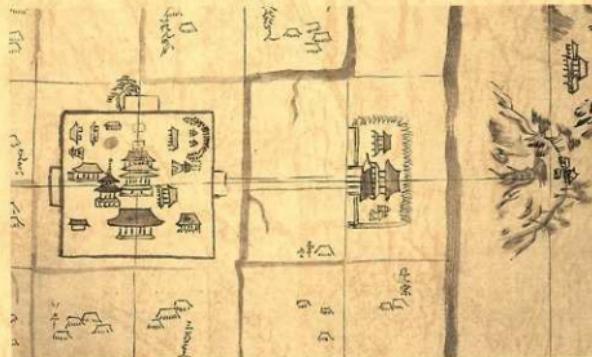
善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9

菊塚古墳

善通寺旧境内

善通寺陣所跡

旧練兵場遺跡



平成16（2004）年3月

善通寺市教育委員会

善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 9

菊塚古墳
善通寺旧境内
善通寺陣所跡
旧練兵場遺跡

平成16（2004）年3月

善通寺市教育委員会

例　　言

1. 本書は普通寺市教育委員会が平成15年度国庫補助事業として実施した、埋蔵文化財調査事業(普通寺市内遺跡発掘調査事業)の発掘調査報告書である。
2. 本事業は普通寺市普通寺町字大池東(菊塚古墳・H15KD)において平成15年8月3日から8月23日まで(第1次調査)、平成16年2月3日から2月27日(第2次調査)、同普通寺町3-5(普通寺旧境内・H15ZKK)において平成15年7月17日から7月24日(第1次調査)、平成15年9月22日・23日(第2次調査)、平成16年2月20日(第3次調査)、平成16年3月15・16日(第4次調査)、平成16年3月22日から3月26日(第5次調査)、同普通寺町3-3-1(普通寺陣所跡・H15ZZA)において、平成15年9月4日から9月14日(第1次調査)、平成15年11月11日から11月15日(第2次調査)、同仙遊町2-8-25・26(旧練兵場遺跡・H15KRP)において平成15年12月17日から12月26日に発掘調査を実施し、現地での調査中および調査終了後に各遺跡の調査資料と出土遺物の整理作業を実施した。普通寺市教育委員会文化振興室 室長補佐 笹川龍一の指導・協力のもと、現地調査は、同主事 海邊博史が、整理作業は海邊および 同主事 渡邊淳子が担当した。現地調査および整理作業に参加した調査補助員は下記に記す。
3. 本書の執筆は海邊・渡邊および、関西大学大学院生 細川晋太郎が行った。執筆分担は3章第2節②【遺物・丸瓦平瓦】、第4章第3節②【遺物】、第5章第2節②【遺物】を渡邊が、第2章第4節【調査の概要】、同第5節①【遺構】、同第6節①【各トレーナーの検討】、同付章【平成14年度出土十遺物】を細川が、その他を海邊が行った。編集は渡邊の協力のもと海邊が行った。各遺跡の実測は、海邊および調査補助員が行った。写真撮影は菊塚古墳遺構を海邊・細川が、遺物を細川が、普通寺旧境内・普通寺陣所跡・旧練兵場遺跡遺物を笹川が、他を海邊が行った。また本書に掲載した挿図の実測・製図は、菊塚古墳遺構を長江真和・西川英志・森田浩史が、平成14年度出土遺物を細川が、普通寺旧境内遺物を田村隆明が行った。その他は海邊・渡邊および調査補助員が行ったほか、片桐節子・加藤恵子・海邊麻理子各氏のご協力を得た。遺物の接合検討、復元作業は菊塚古墳出土遺物は、細川・長江・西川・森田・梅崎由梨・米田裕貴子・松村祐香・宮本 舞・北 実生・寺田麻子が、その他を田村が行った。なお、遺物実測図中、土器の断面は黒塗りが須恵質、白抜きが土師質、網掛けが瓦・瓦質土器・陶磁器を表す。
4. 菊塚古墳の調査および整理作業には、関西大学文学部考古学研究室(代表 米田文孝教授)の全面的なご指導、ご援助を賜った。また、事業実施および本書の編集にあたっては、次の方々・機関より多大なご指導、ご協力を得た。記して謝意を表します。
香川県教育委員会・財團法人香川県埋蔵文化財調査センター・四国学院大学考古学研究部・独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所・総本山善通寺・鹿島建設株式会社・株式会社菅組・普通寺市役所建築課・安藤文良・入江秀信・植野浩三・大久保徹也・大平哲世・太田宏明・大

平国丸・大森信宏・小野秀幸・柿沼菜穂・片桐孝浩・加納弘之・川畑 聰・菊池芳朗・菊間崇史・北山峰生・木許 守・藤本晋司・高妻洋成・肥塚隆保・小林謙一・佐藤竜馬・白川雄一・白澤 崇・中里伸明・中原幹彦・信重芳紀・乗松真也・橋本正春・藤好史郎・松田朝由・松本和彦・宮脇武一・森下英治・山田哲也・渡部明夫(順不同・敬称略)

調査補助員(現地調査および整理作業)：細川晋太郎(関西大学大学院生)・長江真和・西川英志・森山浩史・北 実生・寺田麻子・西川千尋・前田順子(関西大学文学部考古学研究室)・細川大介・上井辰宣・山村隆明(四国学院大学考古学研究部)・吉田 線・吉岡優孝・横山正幸

(整理作業)：梅崎由梨・米田裕貴子・松村祐香・宮本 舞(関西大学文学部考古学研究室)

目 次

例 言

第1章 遺跡周辺の位置と環境	1
第2章 菊塚古墳	6
第1節 調査の経緯と経過	6
第2節 調査の方法	7
調査日誌	8
第3節 古墳の立地	11
第4節 調査の概要	12
第5節 調査の成果	12
①遺構	12
②遺物	19
第6節 まとめ	20
①各トレンチの検討	20
②墳丘復元案	21
付 章 平成14年度出土遺物	24
第1節 鉄製品	24
第2節 まとめ	38
第3章 善通寺旧境内	40
第1節 調査の経緯と経過	40
調査日誌	41
第2節 調査の成果	43
①遺構	43
②遺物	45
第3節 まとめ	58
第4章 善通寺陣所跡	60
第1節 調査の経緯と経過	60
調査日誌	61
第2節 第1次調査の成果	63
①遺構	63
②遺物	65
第3節 第1次調査のまとめ	66

第4節 第2次調査の成果	67
①遺構	67
②遺物	69
第5節 第2次調査のまとめ	70
 第5章 旧練兵場遺跡	71
第1節 調査の経緯と経過	71
調査日誌	72
第2節 調査の成果	72
①遺構	72
②遺物	75
第3節 まとめ	78
 主要参考文献一覧	79
 写真図版	83

挿図目次

第1図 普通寺市遠景	1
第2図 調査地と周辺の主要遺跡	2

菊塚古墳

第3図 調査区位置図	6
第4図 第1・2トレンチ平面・土層断面図	14
第5図 第3~6トレンチ平面・上層断面図	15
第6図 第7~10トレンチ平面・土層断面図	16
第7図 出上遺物実測図	20
第8図 墳形復元案	22
第9図 鉄製品出上状況図	25
第10図 鉄鉗・鉄刀・鉄製刀子実測図	27
第11図 平根系鉄鎌実測図①	29
第12図 平根系鉄鎌実測図②	30
第13図 尖根系鉄鎌実測図①	32
第14図 尖根系鉄鎌実測図②	33
第15図 尖根系鉄鎌実測図③	34
第16図 尖根系鉄鎌実測図④	35
第17図 尖根系鉄鎌実測図⑤	36

第18図 尖根系鉄鎌実測図⑥	37
----------------	----

普通寺旧境内

第19図 調査区位置図	40
第20図 トレンチ配置図	41
第21図 第1・2次調査 各トレンチ土層断面図	44
第22図 第3・4次調査 各トレンチ土層断面図	45
第23図 第5次調査 各トレンチ土層断面図	46
第24図 第1次調査 出土遺物実測図①	47
第25図 第1次調査 出土遺物実測図②	48
第26図 第1次調査 出土遺物実測図③	49
第27図 第1次調査 出土遺物実測図④	50
第28図 第1次調査 出土遺物実測図⑤	51
第29図 第1次調査 出土遺物実測図⑥	52
第30図 第1次調査 出土遺物実測図⑦	53
第31図 第1次調査 出土遺物実測図⑧	54
第32図 第1次調査 出土遺物実測図⑨	55
第33図 第1次調査 出土遺物実測図⑩	56
第34図 第2次調査 出土遺物実測図	58

普通寺陣所跡

第35図 調査区位置図	60
第36図 第1次調査 調査区配置図	61
第37図 第1次調査 第1・2トレンチ土層断面図	63
第38図 第1次調査 第3～5トレンチ平面・土層断面図	64
第39図 第1次調査 出土遺物実測図	66
第40図 第2次調査 調査区配置図	67
第41図 第2次調査 調査区平面・土層断面図 深掘りトレンチ土層断面図	68
第42図 第2次調査 出土遺物実測図	69

旧練兵場遺跡

第43図 調査区位置図	71
第44図 調査区平面・土層断面図	73
第45図 各構造土層断面図	75
第46図 出土遺物実測図	77

付 図

菊塚古墳墳丘測量図

写真図版目次

菊塚古墳

図版1-1	古墳遠景（南から）	83
図版1-2	調査地遠景①（北から）	83
図版1-3	調査地遠景②（北西から）	83
図版2-1	第1トレンチ完掘状況（北から）	84
図版2-2	第1トレンチ平面拡大（北から）	84
図版2-3	第1トレンチ東壁拡大（西から）	84
図版3-1	第2トレンチ完掘状況（西から）	85
図版3-2	第2トレンチ平面拡大（東から）	85
図版3-3	第2トレンチ断面拡大（北から）	85
図版4-1	第3トレンチ全景（北から）	86
図版4-2	第3トレンチ東壁（西から）	86
図版4-3	第4トレンチ全景（東から）	86
図版5-1	第4トレンチ西壁拡大（東から）	87
図版5-2	第5トレンチ全景（北から）	87
図版5-3	第5トレンチ南壁（北から）	87
図版6-1	第5トレンチ西壁（東から）	88
図版6-2	第6トレンチ全景①（西から）	88
図版6-3	第6トレンチ全景②（北から）	88
図版7-1	第6トレンチ東壁（北西から）	89
図版7-2	第6トレンチ東壁拡大（北西から）	89
図版7-3	第6トレンチ南壁（北から）	89
図版8-1	第7トレンチ検出状況（北から）	90
図版8-2	第7トレンチ完掘状況（北から）	90
図版8-3	第7トレンチ南壁拡大（北から）	90
図版9-1	第8トレンチ検出状況（西から）	91
図版9-2	第8トレンチ完掘状況（西から）	91
図版9-3	第8トレンチ北壁（南から）	91
図版10-1	第9トレンチ完掘状況（東から）	92
図版10-2	第9トレンチ東側立ち上り（南西から）	92
図版10-3	第9トレンチ北壁拡大（南から）	92
図版11-1	第9トレンチ西側立ち上り（南東から）	93
図版11-2	第10トレンチ完掘状況（南西から）	93
図版11-3	第10トレンチ北壁（南から）	93
図版12	平成14年度出土鉄製品集合	94
図版13	平成14年度出土鉄矛・鉄刀・鉄製刀子	95

図版14	平成14年度出土鉄鎌①	96
図版15	平成14年度出土鉄鎌②	97
図版16	平成14年度出土鉄鎌③	98
図版17	平成14年度出土鉄鎌④	99

善通寺旧境内

図版18-1	第1次調査 調査前状況（南東から）	100
図版18-2	第1次調査 第1トレンチ（北から）	100
図版18-3	第1次調査 第2トレンチ土手状遺構拡大（南から）	100
図版19-1	第2次調査 調査前状況（南から）	101
図版19-2	第2次調査 第3トレンチ完掘状況（南から）	101
図版19-3	第2次調査 第3トレンチ土手状遺構拡大（南から）	101
図版20-1	第2次調査 第4トレンチ完掘状況（南東から）	102
図版20-2	第2次調査 第4トレンチ北壁（南から）	102
図版20-3	第2次調査 第4トレンチ北壁拡大（南から）	102
図版21-1	第3次調査 トレンチ完掘状況（南西から）	103
図版21-2	第3次調査 トレンチ北壁（南から）	103
図版21-3	第3次調査 トレンチ北壁拡大（南から）	103
図版22-1	第4次調査 調査前状況（北西から）	104
図版22-2	第4次調査 トレンチ完掘状況（東から）	104
図版22-3	第4次調査 トレンチ土手状遺構拡大（東から）	104
図版23-1	第5次調査 Aトレンチ完掘状況（北東から）	105
図版23-2	第5次調査 Aトレンチ深掘り状況（北東から）	105
図版23-3	第5次調査 調査風景	105
図版24-1	第5次調査 Bトレンチ完掘状況（北東から）	106
図版24-2	第5次調査 Cトレンチ完掘状況（北東から）	106
図版24-3	第5次調査 Cトレンチ深掘り状況（北から）	106
図版25	第1次調査 出土遺物①	107
図版26	第1次調査 出土遺物②	108

善通寺陣所跡

図版27-1	第1次調査 調査前状況（南東から）	109
図版27-2	第1次調査 第1トレンチ完掘状況（南西から）	109
図版27-3	第1次調査 第2トレンチ完掘状況（南から）	109
図版28-1	第1次調査 第3トレンチ検出状況（北から）	110
図版28-2	第1次調査 第3トレンチ遺構検出状況拡大（西から）	110
図版29-1	第1次調査 第3トレンチSK-01断面（南から）	111
図版29-2	第1次調査 第3トレンチSP-38断面（南から）	111
図版29-3	第1次調査 第3トレンチ完掘状況（南から）	111

図版30-1	第1次調査 第4トレンチ検出状況①（北西から）	112
図版30-2	第1次調査 第4トレンチ検出状況②（南西から）	112
図版30-3	第1次調査 第4トレンチSP-03検出状況（南から）	112
図版31-1	第1次調査 第4トレンチSP-12断面（南から）	113
図版31-2	第1次調査 第4トレンチSD-02断面（西から）	113
図版31-3	第1次調査 第4トレンチ完掘状況（南から）	113
図版32-1	第1次調査 第5トレンチ検出状況①（北から）	114
図版32-2	第1次調査 第5トレンチ検出状況②（北西から）	114
図版33-1	第1次調査 第5トレンチ完掘状況（北から）	115
図版33-2	第1次調査 第5トレンチ完掘状況拡大（北西から）	115
図版34-1	第2次調査 調査前状況（北西から）	116
図版34-2	第2次調査 完掘状況（東から）	116
図版34-3	第2次調査 深掘りトレンチ掘削状況①（北東から）	116
図版35-1	第2次調査 深掘りトレンチ掘削状況②（北西から）	117
図版35-2	第2次調査 深掘りトレンチ南壁（北から）	117
図版35-3	第2次調査 出土遺物①	117
図版35-4	第2次調査 出土遺物②	117

旧練兵場遺跡

図版36-1	調査前状況（北東から）	118
図版36-2	遺構面検出状況（西から）	118
図版36-3	遺構面検出状況拡大（北から）	118
図版37-1	調査区南壁（北から）	119
図版37-2	調査区南壁際深堀トレンチ遺構検出状況（東から）	119
図版38-1	SH-01第1トレンチ（南から）	120
図版38-2	SH-01第1トレンチ壁溝断面（南から）	120
図版38-3	SH-01第2トレンチ（南から）	120
図版39-1	SP-01断面（南から）	121
図版39-2	SP-03断面（北から）	121
図版39-3	出土遺物①	121
図版39-4	出土遺物②	121

第1章 遺跡周辺の位置と環境

普通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、真言宗開祖の弘法大師(空海)が誕生した土地として有名な田園都市であり、総本山普通寺の門前町として発達している。

東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

普通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層には希に縄文土器片が含まれていることが知られていたが、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、普通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

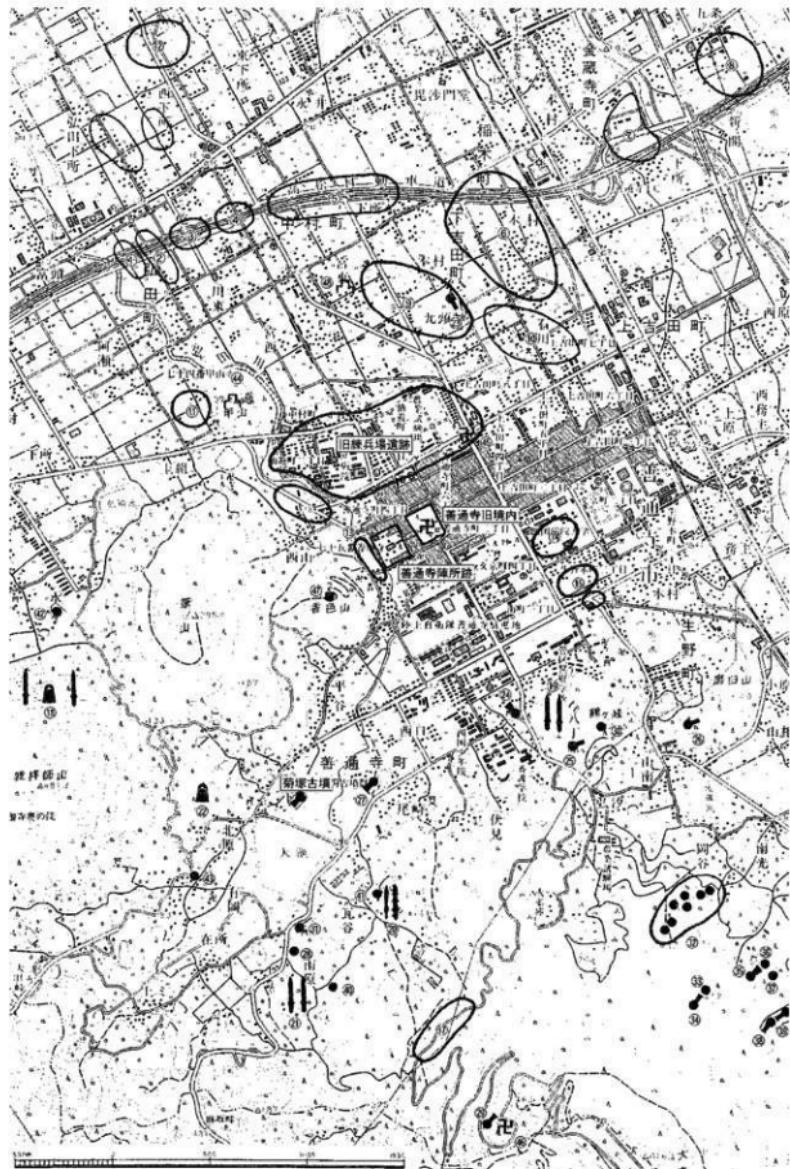
瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・普通寺市の五条遺跡・普通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も全く不明の状態であるが、出土した土器片については、畿内第1様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は自然堤防上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2~3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在の標高5mあたりと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸部に形成された集落であることがわかる。さらにこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土



第1図 普通寺市遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我拝師山（この手前の小丘が甲山）・中山・火上山



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

層とこの下の洪積層の間には、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によって、吉原町から旧石器も確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約2~3万年前まで遡ることができるようである。

善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中軸的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここが旧陸軍第11師団の練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。そして、ここから東には九頭神遺跡・稻木遺跡・石川遺跡と続いているが、いずれの遺跡も近年までは本格的な調査は実施されておらずその詳細は明らかにされていなかった。

しかしながら、昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが確認されている。

旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及ぶ可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる、県下でも例のない存在であることが知られている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解り、旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと考えられる。

この遺跡群でこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。總本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村庵寺（伝尊寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳時代にかけての造構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500m²の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の堅穴住居・小児壺棺墓15基・無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘達柱建物跡2棟とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部など、夥しい生活の痕跡が確認されている。特に弥生時代終末期の堅穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目

- 1：阿弥陀堂遺跡 2：高熊遺跡 3：乾遺跡 4：中村遺跡 5：永井遺跡 6：稻木遺跡群 7：金藏寺下所遺跡 8：五条遺跡 9：九頭神遺跡群 10：石川遺跡 11：甲山北遺跡 12：三井遺跡 13：香色山遺跡群 14：四国学院大学構内遺跡 15：生野本町遺跡 16：生野南口遺跡 17：御恩林遺跡 18：我拝師山遺跡群 19：鶴が峰西麓遺跡 20：瓦谷遺跡 21：南原麻坂遺跡 22：北原シンネバエ工遺跡 23：下吉田八幡古墳 24：丸山古墳 25：鶴が峰4号墳 26：廢白山古墳 27：王墓山古墳 28：宮尾尾古墳 29：野田院古墳（24~29：国指定史跡・有岡古墳群）30：鶴が峰山頂古墳 31：御館神社古墳 32：向（南光）古墳群 33：丸山1号墳 34：丸山2号墳 35：寺田1号墳 36：寺田2号墳 37：熊の巣古墳 38：大麻山橈貸塚古墳 39：大麻山経塚古墳 40：宮尾2号墳 41：瓦谷1号墳 42：大塚池（吉原梅賀塚）古墳 43：北原古墳 44：甲山城跡 45：仲村庵寺 46：野田院跡 47：香色山経塚 48：仲村城跡

第2図 凡例

されている。昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

そして、国立病院や四国農業試験場などではこれまで頻繁に発掘調査が行われているが、いずれの調査でも住居跡が複合し密集した状態で遺存しており、正確な集落の規模は今も把握できていない。

また、ここから北方に広がる善通寺平野には、旧練兵場遺跡と同様に弥生時代の古い時期から古墳時代にかけての大規模な集落遺跡が幾つか知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方500mあたりには弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多層に散布することで知られる石川遺跡が広がるが、未調査のため詳細は不明である。

九頭神遺跡から北方に隣接する稻木遺跡では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果からいずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には、“大集落”というよりはむしろ“小国”が誕生していたと考えた方が良いかも知れない。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅劍3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅劍2口、細形銅劍5口、中細形銅鉢1口の計8口、我押師山遺跡では計3カ所から平形銅劍5口、銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、弥生時代の青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に、独自の技術を持った特定の有力者が灌漑治水事業などを行い耕作面積を増大させ、地域を代表する権力者となり有岡地区を中心に数多くの墳墓を築くようになるが、古墳時代を迎えるこの地の勢力は更に発展を続けている。旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺跡群に古墳時代の集落遺跡群が幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられる。

この頃の集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地の南西部の丘陵部が墓域と推定されている。この地区の古墳は確認されているだけでも400基を超えており、中でも香色山・筆ノ山・我押師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名である。

まず古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的の高所を中心の大麻山楕円墳、大麻山経塚、野田院古墳、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林古墳と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。中でも野田院古墳は大麻山北西麓(標高405m)のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸亀平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛上、後円部は積石で構築されている。

また、有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野辻子塚古墳(消滅)・磨白山古墳・鶴が峰2号墳(消滅)・鶴が峰4号墳・丸山古墳・土墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた玉巣山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には、周辺の装飾古墳と共通したモチーフの他、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸亀平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっており、有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯氏の氏寺である伝導寺(仲村庵寺)が旧練兵場遺跡の一角に建立される。しかしながらこの寺は短期間で消滅してしまい、後に500m程南に移転されたものが現在の善通寺伽藍ではないかと考えられている。

奈良時代末、宝亀五(774)年この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師が誕生する。平安初期、大同二(807)年に唐から帰朝した大師が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した。創建当時は四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地に活動の基盤とした豪族(佐伯)や善通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために経筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚(香色山1号経塚)が平成9年夏に確認され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永禄元(1558)年には秀川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その後復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ所のうち五カ所がある善通寺市は善通寺を中心門前町として活気を取り戻す。

明治29(1896)年には陸軍第十一師団が設置され、門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和29(1954)年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

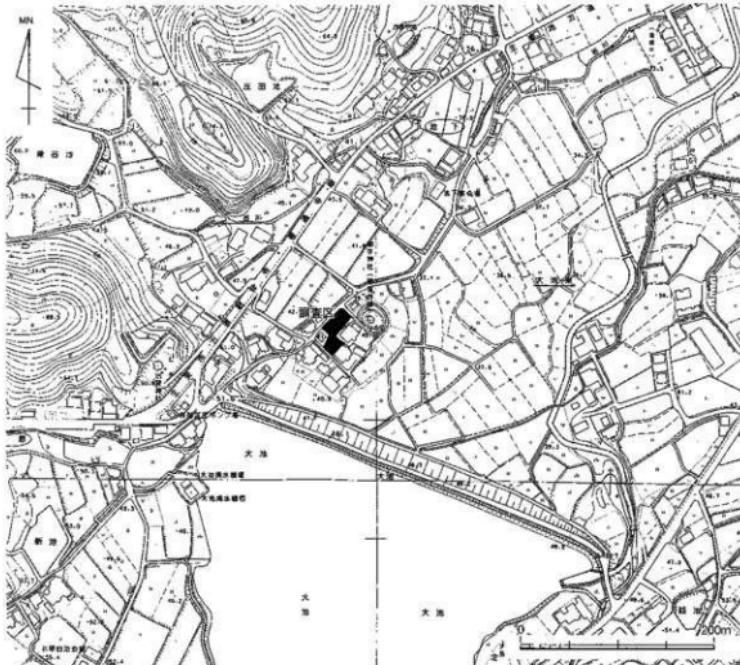
第2章 菊塚古墳

第1節 調査の経緯と経過

菊塚古墳は戦前から丸亀平野屈指の首長墳と認識はされていたものの、発掘調査が行われ詳細が判明したのは、近年のことである。調査以前は后形の周庭帯の存在から中期古墳とする説や後期古墳と考える説が並立していた。

平成12年度調査 菊塚古墳において周辺地の圃場整備の計画に伴う照会が普通寺市教育委員会にあった。古墳周辺の工事は水路や畦畔の改修が中心で、現存する墳丘への影響は無いが、周庭帯の痕跡と推定できる地割りへの影響が想定されたため、墳丘南東側の水田を中心に確認調査を実施した。調査の結果、周庭帯は基盤層を削り出して構築していることを確認したことや、後円部横部を検出することができた。

平成13年度調査 以前より墳丘土の流出が確認されていたが、墳頂部の菊主神社に通じるコンクリート製舗装路の下部の空洞化などが確認され、安全面から改修が急務であった。現状のまま放置すると、墳丘自体が崩壊する懼れがあったため、保存を前提とした墳頂部の造構の確認調査



第3図 調査区位置図 (1:5,000)

を行った。併せて後円部墳丘の測量調査も実施した。その結果、調査前は不明であった主体部が南に開口する横穴式石室であることが判明した。また石室内には、中四国では王墓山古墳に次いで2例目となる石室形を検出した。測量の結果、後円部の直径は39m前後の規模になることが分った。

平成14年度調査 前年度の調査を踏まえ、玄室全面および羨道の一部の調査を行った。その結果、石室は石室形を有する両袖式横穴式石室であることを確認した。盜掘を受けていたものの、玄室を中心に多数の遺物が出土した。

石室は後円部のほぼ中央部に位置する。奥壁が後円部のほぼ中心にあたり、奥壁の位置が墳丘の設計にも大きく影響していたと考えられる。石室形態は羨道が狭く袖部が内側に突出しているなど、九州型横穴式石室の影響を受けた可能性がある。また石室形の存在は、菊塚古墳の性格を考える上で最も顕著な遺構である。石室形の位置が王墓山古墳とは異なり奥壁側に据えられている。この形態は肥後地方にある通有の石室形の形態と言える。

遺物は大部分が玄室内から出土した。出土遺物は、須恵器・土師器などの土器類、耳環・ガラス製小玉・水晶製切子玉・碧玉製勾玉などの装飾品、杏葉・鏡板・辻金具・鍾などの馬具類、鉄鋒・石突・鐵刀・刀子・鉄鎌などの鉄製品と多種多様である。また出土須恵器の年代より菊塚古墳の築造時期が、おおよそ6世紀後半を中心とした時期に該当することが推測できた。

市教育委員会は遺跡の重要性を考慮し、関係諸機関と協議の上、埋蔵文化財調査事業として保存を前提とした遺構の確認調査を行った。現地調査および整理作業については、関西大学文学部考古学研究室（代表 米田文孝教授）に協力を依頼した。

現地調査については市教育委員会担当者を調査員として実施するとともに、関西大学文学部考古学研究室学生および四国学院大学考古学研究部学生が参加した（個別氏名は例言に記した）。

調査は昨年度までの成果を踏まえて、墳丘形態・規模の確認および遺構の残存状況を把握するため、前方部推定部分にトレンチを設定した（第3図）。調査面積は計301.4m²である。調査期間は第1次調査が平成15年8月1日から同年8月29日まで、第2次調査が平成16年2月3日から同年2月27日まで行った。整理期間は調査中から適宜行い、平成16年3月31日に終了した。

第2節 調査の方法

調査は前方部が残存していると考えられる古墳北側および西側にトレンチを設定した。

第1次調査では計6本のトレンチを設定し、遺構の検出に努めた。第1次調査の成果を踏まえて、さらに墳丘規模を確定させるために第2次調査では計4本のトレンチを設定した（付図参照）。調査区は現況において販売用の植木を育成しているため、その制約を受け、長さ、幅とともに全て任意である。作業効率のため適宜、平面および断面の観察・縮尺10分の1での図化・写真撮影を行いながら下層の掘削に努めた。各トレンチの調査を終了した後、平成13年度の後円部に引き続き、前方部および周辺地形の平板測量を行なった。なお、整理段階において第1表の通りトレンチ名を変更したことを付記しておく。

報告書トレンチ名	調査時トレンチ名	備考	報告書トレンチ名	調査時トレンチ名	備考
第1トレンチ	第1トレンチ	第1次調査	第6トレンチ	第10トレンチ	第1次調査(旧) 第5トレンチを 拡張して掘削
第2トレンチ	第7トレンチ	第2次調査	第7トレンチ	第4トレンチ	第1次調査
第3トレンチ	第6トレンチ	第1次調査	第8トレンチ	第3トレンチ	第1次調査
第4トレンチ	第11トレンチ	第2次調査	第9トレンチ	第2トレンチ	第1次調査
第5トレンチ	第9トレンチ	第2次調査	第10トレンチ	第8トレンチ	第2次調査

第1表 菊塚古墳トレンチ名称対照表

調査日誌抄

(第1次調査)

8月1日（金） 天候：晴

調査に必要な道具の準備を行う。

8月3日（日） 天候：晴

現地においてトレンチ設定予定地周辺の草木の伐採を行う。

8月4日（月） 天候：晴

現地においてトレンチ設定予定地の草木の伐採を行う。

8月5日（火） 天候：晴

第1トレンチを前方部主軸に直交する箇所（前方部北側端部）に、長さ8m・幅1mで設定し掘削を開始する。本日は表土から下層約40cmの深さまで掘削する。第9トレンチを前方部西側端部に直交する箇所に長さ8m、幅1mの規模で設定する。

8月6日（水） 天候：晴

第1トレンチの掘削を行う。トレンチの長さを南側に2m拡張する。黒褐色土層を検出する。黒褐色土層上面から人頭大の礫を検出する。水洗したところ石屋形に使用されている石材と同質の凝灰角礫岩であった。

8月7日（木） 天候：晴のち曇

第1トレンチは精査を行い、平面での検討を行う。第1トレンチ東側にサブトレンチを設定し掘削を行う。断面において堆積状況を確

認し、黒褐色土層が墳丘残存部および墳丘裾であると判断した。午後、精査を行い検出状況写真を撮影する。墳丘残存部を精査中に須恵器片が2点出土する。第9トレンチは掘削を開始する。

8月8日（金） 天候：雨

台風のため現場での作業を中止する。

8月10日（日） 天候：晴

第1トレンチでは、降雨のため溜まった水の汲み上げを行う。その後、東壁および南壁の土層断面図を作成する。またトレンチを西方に向長さ1m・幅1m拡張し、表土の除去を行う。第9トレンチは掘削を進めたところ、土層の違いを確認した。トレンチ北側にサブトレンチを設定し断面での観察を行う。

8月11日（月） 天候：晴のち雨

第1トレンチは拡張区の掘削を行う。墳丘残存部を検出する。トレンチ内を精査し、完掘状況写真を撮影する。拡張区墳丘基盤層上面から須恵器片が1点出土する。第9トレンチは西に3m拡張し、長さを11mに設定する。サブトレンチも北側すべてを掘削し、それにより墳丘残存部および周濠外堤の有無を確認する作業を行う。

8月12日（火） 天候：雨のち晴

午前中は第1トレーニング・第9トレーニングとともに水の汲み上げを行う。第9トレーニングはサブトレーニングの断面観察から、墳丘残存部および周濠外堤を確認する。これによって平面で検出した土色の違いは、墳丘と周濠堆積土の違いであることが判明する。第9トレーニング北側に長さ2m・幅2mの規模で第8トレーニングを設定する。第8トレーニングは表土から約20cm掘削したところで、第9トレーニングで検出した周濠堆積土と同じ黒色土が確認されたため、その面で精査を行う。

8月13日（水） 天候：晴のち雨

第1トレーニングは平面図を作成する。第9トレーニングは周濠堆積土の掘削を行う。また周濠堆積土中で焼土面を検出したため精査を行った後、写真撮影および図化作業を行う。第8トレーニングは東側に1m拡張し掘削を開始する。黒褐色土を確認し精査を行ったが、第9トレーニングとは異なり墳丘残存部と周濠堆積土の土色が近似していたため、平面での確認が困難であった。そのため午後から北面にサブトレーニングを設定する。

8月14日（木） 天候：雨

雨のため現地での作業を中止する。

8月15日（金） 天候：雨のち晴

午前中は第8トレーニングと第9トレーニングの水の汲み上げを行う。第9トレーニングは周濠堆積土の掘削を行う。第8トレーニングは精査を行い検出状況写真を撮影する。

8月18日（月） 天候：晴

第9トレーニングは掘削を進め周濠堆積土を完掘する。墳丘裾、周濠外堤裾および周濠底を検出す。トレーニング内の精査を行い完掘状況の写真撮影を行う。その後、東壁および北壁の土層断面図を作成する。第8トレーニングは基盤層に沿って掘削し、墳丘裾および周濠底を検出す。精査を行い完掘状況写真を撮影する。その後、北壁土層断面図を作成する。

8月19日（火） 天候：晴

第9トレーニングは土層断面図を作成した後、平面図作成を行う。旧第5トレーニングを設定し掘削を開始する。上層から約20cm掘削したところで上層の違いを確認する。墳丘残存部の検出状況として写真を撮影する。第3トレーニングを長さ2.2m・幅1.2mの規模で設定し掘削を開始する。約20cm掘削したところで墳丘残存部を検出する。トレーニング内の精査を行い、検出状況写真を撮影する。

8月20日（水） 天候：晴

第1トレーニングは埋め戻しを行う。第9トレーニングは平面図を作成する。第8トレーニングと旧第5トレーニングの中間地点に長さ1.9m・幅0.9mの小規模なトレーニングを設定する（第7トレーニング）。旧第5トレーニングは引き続き掘削を行う。搅乱なのか周濠埋土なのか判断しない部分にあたる。土層中から陶磁器が出土する。第3トレーニングは、東壁および南壁の土層断面図および平面図を作成する。調査地の平板測量を行い、各トレーニングの配置および調査地周辺の現況図を作成する。

8月21日（木） 天候：晴

第1・8・9トレーニングの埋め戻しを行う。第7トレーニングでは黒褐色土を確認する。墳丘残存部である可能性を考慮し、検出状況写真を撮影する。旧第5トレーニングは搅乱もしくは周濠と考えられる部分の掘削・精査を行い、完堀状況写真を撮影する。その後、トレーニング南壁際にサブトレーニングを設定し、土層の堆積状況を確認する。引き続き平板測量を行い、各トレーニングの配置および調査地周辺の現況図を作成する。

8月22日（金） 天候：晴

第8トレーニングの埋め戻しを行う。第7トレーニングは掘削を終え、完掘状況写真を撮影する。その後、平面図を作成する。旧第5トレーニングは東壁および南壁の土層断面図、トレーニング平面図を作成する。夕方、埋め戻しを行う。

8月23日（土） 天候：晴

第7トレンチは東壁および南壁の土層断面図を作成し、その後埋め戻しを行う。調査地および周辺を掃除し現地での調査を終了する。

8月25日(月) 天候: 晴のち曇

調査に使用した用具の整理を行う。遺構図面・写真の整理を行う。

8月26日(火) 天候: 雨

遺構図面・写真の整理を行う。

8月27日(水) 天候: 曇

遺構図面・写真の整理を行う。出土遺物の整理・水洗を行う。

8月28日(木) 天候: 曇一時雨

遺構図面の整理を行う。出土遺物の整理・水洗を行う。

8月29日(金) 天候: 曇

出土遺物の整理・水洗を行う。

(第2次調査)

2月3日(火) 天候: 晴

第1次調査の結果をもとに、前方部と推定される箇所にトレンチを長さ10m・幅1.3mで設定した(第2トレンチ)。午前から掘削を行い、表土および2層目の土まで掘削を行う。併行して古墳周辺の地形を測量するために杭の設定を行う。

2月4日(水) 天候: 晴時々雪

第2トレンチは引き続き掘削を行う。第2トレンチは畦を挟んで東半と西半で土色が異なる。北側断面を確認すると東半には茶色の層が確認されたが、西半は灰色粘質土層であった。この灰色土層は1次調査において第9トレンチで確認した基盤層の土とほぼ同質であった。平板測量用の杭を設定する。午後より古墳前方部北側の地形測量を行う。

2月5日(木) 天候: 晴時々雨

第2トレンチの掘削を行う。東半を精査したところ、第1トレンチで確認した黒色土層を確認する。基盤層と考えられる灰褐色粘質土層の上に被覆している状況であった。第9トレンチの延長線上に長さ3m・幅1.2mで第10トレンチを設定し掘削を開始する。

2月6日(金) 天候: 晴時々雨

第2トレンチはサブトレンチを設定し、掘削を行い断面での確認作業を行う。その後全面を精査し、午後、写真撮影を行う。夕方、土層断面図作成のための設定を行う。併行して第2トレンチの北側に新たに第5トレンチを

設定し掘削を開始する。第10トレンチは北壁に沿ってサブトレンチを設定し断面を観察したところ、西側において第9トレンチで確認された灰褐色土層の立ち上がり(落ち込み)が確認されたため、それに沿って平面で検出する。また立ち上がりの土層状況を確認するため、東側に1m拡張して掘削を行う。

2月9日(月) 天候: 晴

第2トレンチは東壁、西壁、北壁の土層断面図を作成する。第10トレンチは西側も1m拡張し掘削を行う。第5トレンチは基盤層面まで掘り下げる。その後、北側に拡張することとなり、草木の伐採を行う。第1次調査で掘削した第7トレンチと旧第5トレンチを再掘削する。

2月10日(火) 天候: 晴

第10トレンチは掘削を進め、周濠の堆積土を除去する。北壁際にサブトレンチを設定し、断面観察を行ったが、下層に周濠堆積土は確認できなかった。第10トレンチは精査を行い光掘状況の写真撮影を行う。その後、北壁および東壁の土層断面図を作成する。第5トレンチは北側に約4m拡張し、さらに東側にも3m拡張し掘削を進めたところ、第4トレンチ延長線上に黒褐色土の堆積が検出された。しかし西側へ統いてはいかず、墳丘残存部であるかの確定できなかった。1次調査で設定した第7トレンチと旧第5トレンチの再掘削を行う。さらに旧第5トレンチをさらに拡張

し掘削を行う(第6トレンチ)。

2月12日(木) 天候:晴

第10トレンチは平面作成を行う。第5トレンチは昨日検出した黒褐色土層の平面的な広がりを検討するため、掘削・精査を繰り返すが、明確には確認できなかった。第6トレンチは旧第5トレンチで確認した基盤層面と考えられる灰褐色粘質土層が検出された高さに備えるように掘削を行う。掘削を進めたところ、搅乱土壌が重複しているなど基盤層との関係が判明したため、その時点で検出状況写真を撮影する。

2月13日(金) 天候:晴

第5トレンチは西面の一部および黒褐色土層が確認された箇所にサブトレンチを設定し、その後写真撮影を行う。また土層断面図作成のための設定を行う。第4トレンチは土層断面の写真を撮影し、土層断面図作成のための設定を行う。午後から第4トレンチおよび第5トレンチの土層断面図を作成する。第6トレンチは搅乱部分の掘削を行う。

2月16日(月) 天候:晴

第5トレンチは平面図を作成する。第4トレンチは平面図を作成する。第6トレンチは搅乱部分の掘削を行う。その後、完掘状況の写真撮影を行う。平板で古墳前方部北側から西側の地形測量を行う。

2月17日(火) 天候:曇

第2トレンチでは黒褐色土層を確認した部分にサブトレンチを基盤層面まで掘削する。第6トレンチは土層断面図および平面図を作成する。平板で各トレンチの位置を記入する。

また平板で古墳前方部西側の地形測量を行う。

追加の杭の設定を行う。

2月18日(水) 天候:晴

後円部裾周辺の測量用杭の設定を行う。第2トレンチは昨日掘り下げた部分の土層断面図の補足を行う。各トレンチの埋め戻しを行う。第2トレンチの一部および第10トレンチの一部を残して他は埋め戻しを完了する。

2月19日(木) 天候:晴

平板で古墳前方部南側の地形測量を行う。

2月20日(金) 天候:晴

善通寺町境内の調査(H15ZKK-3)が入ったため、現地での作業を行なわず。

2月22日(日) 天候:晴

平板で前方部南側から後円部南側の地形測量を行う。第2・10トレンチの埋め戻しを完了する。

2月23日(月) 天候:晴

平板で後円部南側から東側の地形測量を行う。夕方より調査地および周辺を掃除し、機材の撤収準備を行う。

2月24日(火) 天候:晴

平板で後円部東側から北側の地形測量を行う。

2月25日(水) 天候:晴

調査道具の後片付けを行い、午後現場から撤収する。遺物の整理作業を行う。

2月26日(木) 天候:晴

遺物・遺構図面・遺構写真などの整理作業を行う。

2月27日(金) 天候:晴

遺物・遺構図面・遺構写真などの整理作業を行う。

第3節 古墳の立地

菊塚古墳は善通寺市街地から南西側に広がる瓦谷地区に位置する。この地区は有岡地区とも呼ばれしており、低丘陵地帯が広がっている。この地区は有岡大池を水源とする弘田川上流域に該当し、多くの首長墳級の前方後円墳が集中する地域として著名である。この地は古代から聖域視さ

れていたようで、集落遺跡があまり検出されない反面、青銅器埋納遺跡や祭祀遺跡、墳墓などが多く見つかっている(第2・3図)。

この地域は北側から西側にかけて、五岳山の一角である香色山(標高153.2m)、筆ノ山(標高296.0m)、我拝師山(標高481.0m)が連なっており、南側は丸亀平野の独立峰では最も高い大麻山(標高616.3m)の裾野が広がっており、西側の平野方向のみが開ける地形となっている。これらの山々の尾根上には前期古墳が点在し、標高50~80mの山裾部には後期から終末期の群集墳が密集している。また平野部にも舌状に伸びる小丘陵が点在しており、その地形を利用して多数の古墳が築造されている。

菊塚古墳はこれらの平野部に広がる古墳のうち最も西側の平地に独立して築造されている。古墳は開墾や住宅建設に伴い前方部の大部分が消滅しており、菊理姫命を祀る菊主神社がある後円部のみが半うじて残存しているに過ぎない。その後円部さえも周囲は大きく崖状に削平されるなど地形の改変が著しい。一方圃場整備前の航空写真を観察すると、古墳の周囲には周庭帯の痕跡と推定される平面盾状の地割りが認められる。この部分は墳丘南側では西から東にかけて階段状に低くなっている、その比高差は0.7mを測る。墳丘の主軸は南西-北東方向を向いている(付図)。

墳丘の全長は推定で約59m、後円部直径約39m、周庭帯の全長は約90m、最大幅約70mを測り、丸亀平野でも屈指の規模を誇る。

第4節 調査の概要

菊塚古墳は地籍図から前方後円墳と推定されているが、現在では住宅の建設および田畠の造成のため前方部の状況は明らかではない。そのため今回は前方部推定箇所にトレントを設定し、前方部の有無、墳丘の範囲確認を目的とした調査を行った。

調査にあたり地籍図および後円部の測量図を参考に、前方部長辺ラインに直交すると考えられる地点に第1トレント、前方部短辺ラインに直交すると考えられる地点に第9トレントを設定した。墳丘残存部および周濠と考えられる溝状の遺構を確認したため、調査の進行にともないトレントの拡張や新たに設定した結果、計10箇所のトレント調査を実施することになった(付図)。

第1次調査において第1・3・6・7・8・9トレントの調査を行い、第2次調査においてその他のトレントの調査および第6トレントの拡張を行った。トレント番号は整理段階で新たに変更しているが、第2次調査は第1次調査で得た情報をもとに実施しているため、検討順にトレントの説明を進める。

第5節 調査の成果

①遺構

第1トレント 第1トレントは前方部長辺ラインの検出を目的としたトレントである(第4図、図版2)。地籍図や現在の地形から検出が期待できる箇所にトレントを設定した。

表土から約45cm掘削した地点において、黒褐色土層(⑦層)を確認した。黒褐色土層より上層

は、黄灰色および暗灰黄色の土が水平堆積し、最上層には現耕作面の土が堆積していたため、幾重にもわたる耕作、整地が行われてきた様子が窺えた。トレント西側にサブトレントを設定し断面観察を行ったところ、黒褐色土層開始地点(第4回矢印)は墳丘が存在していたと推定されている方向(南方向・住宅側)に向かって立ち上がっていることを確認し、最も残りの良い部分においては厚さ19cmの堆積を確認した。黒褐色土層の下には基盤層と考えられる灰色礫層(⑧層)が堆積しており、水が染み出でてくるものであった。平面検査面においても黒褐色土層は後円部から斜めの方向に広がっていく様相を呈していたため、断面の状況も踏まえ、これを前方部長辺ライン残存部(裾部)と推定した。しかし、黒褐色土層断面検査面において盛土の単位等を示す明確なラインは確認できなかったため、墳丘基盤層となった盛土および旧表土の両方の可能性を想定したい。断面検査面における黒褐色土層の開始点の高さは標高39.47mで、上面の高さが標高39.50m～39.53mの範囲で水平堆積している。

また、直接古墳と関係するものであるかは不明であるが、黒褐色土層直上からは須恵器喪体部の破片が出土し、周辺と推定される地点では石屋形に使用されている石材と同質の角礫凝灰岩片が出土した。

第3トレント 第1トレントで確認した黒褐色土層(前方部長辺推定ライン)の続きを確認するために設定した(第5図、図版4)。

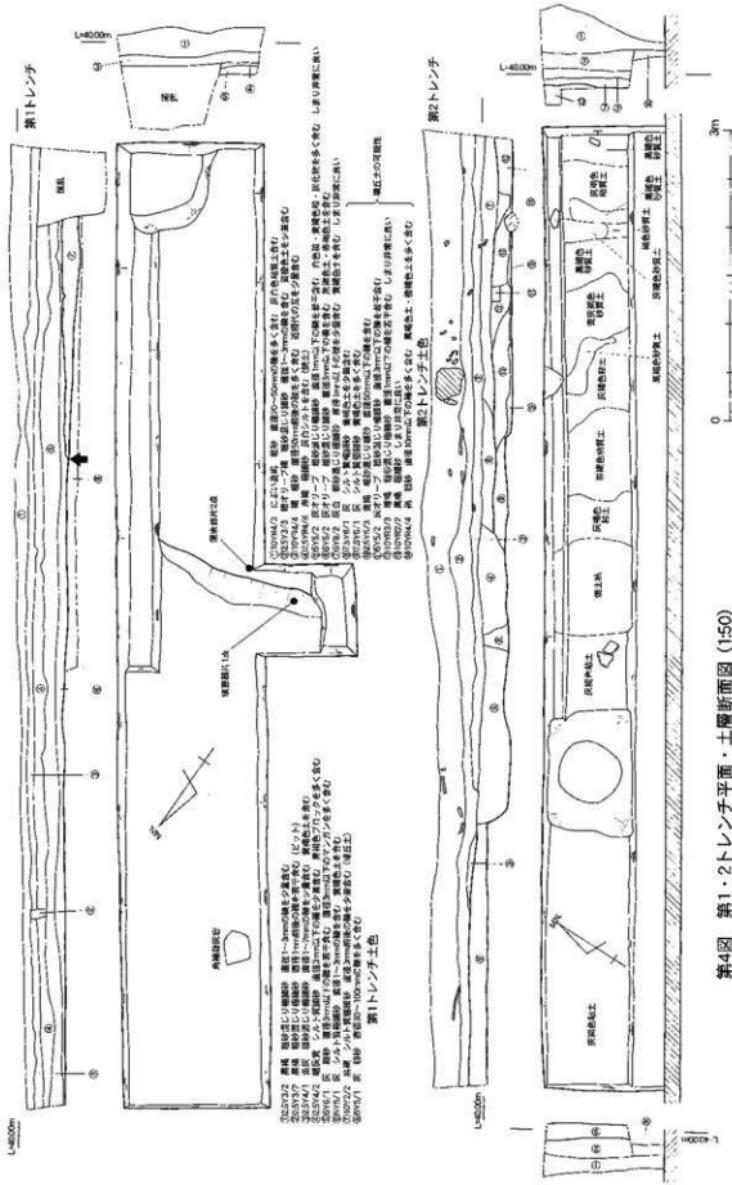
表土から約30cm掘削した地点において、黒褐色土層(⑧層)を確認した。断面観察を行ったところ、黒褐色土層開始地点(図矢印)は第1トレントと同じく墳丘が存在していたと推定されている方向(南方向・住宅側)に向かって緩い弧を描くように立ち上がっていることを確認した。また、平面検査面においても第1トレントと同じく、黒褐色土層は後円部から斜めに広がっていく状況であった。よって第3トレントで確認した黒褐色土層は第1トレントで確認した黒褐色土層から続くものであり、墳丘残存部であると推定することができる。しかし、第1トレントと第3トレントの間ににおいて、黒褐色土層が途切れている可能性も否定できない。第1トレントと同様、黒褐色土層の断面には盛土の単位を示すような明確なラインは確認できなかったため、盛土および旧表土の両方の可能性を想定したい。

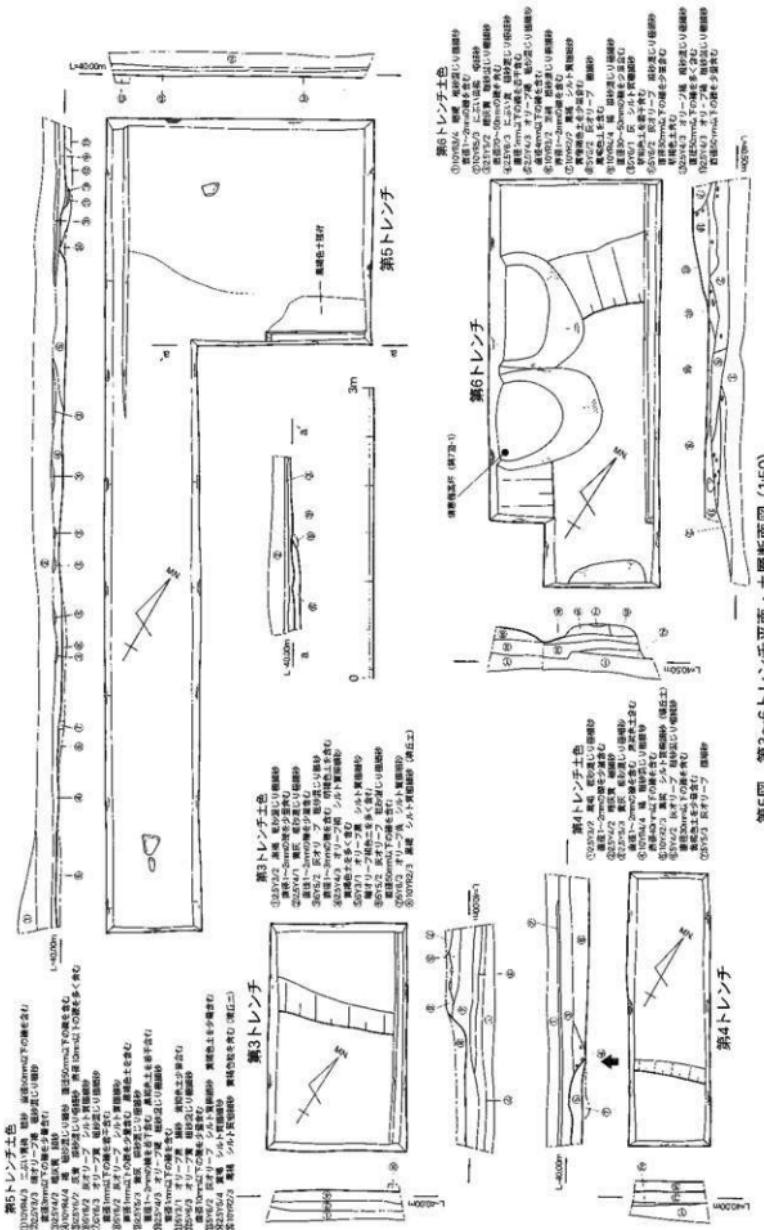
トレント北側では、黒褐色土層よりも下の地点において5cm大の礫が混入している土層(⑥層)を確認した。土色の違いなどから堆積土と考えられる。基盤層を検出するに至るまで掘削が及んでいないため、黒褐色土層よりも下層の状況は不明であるが、断面検査面においては10cm以上の堆積を確認することができた。黒褐色土はさらに下へ続いたため、黑色土層開始点の高さは不明であるが、断面検査面においては標高39.79mを測る。また、上面の高さは標高39.95m～39.96mの範囲で水平堆積している。

第4トレント 第1・3トレントで確認した黒褐色土層の続きを確認するために設定した(第5図、図版4・5)。

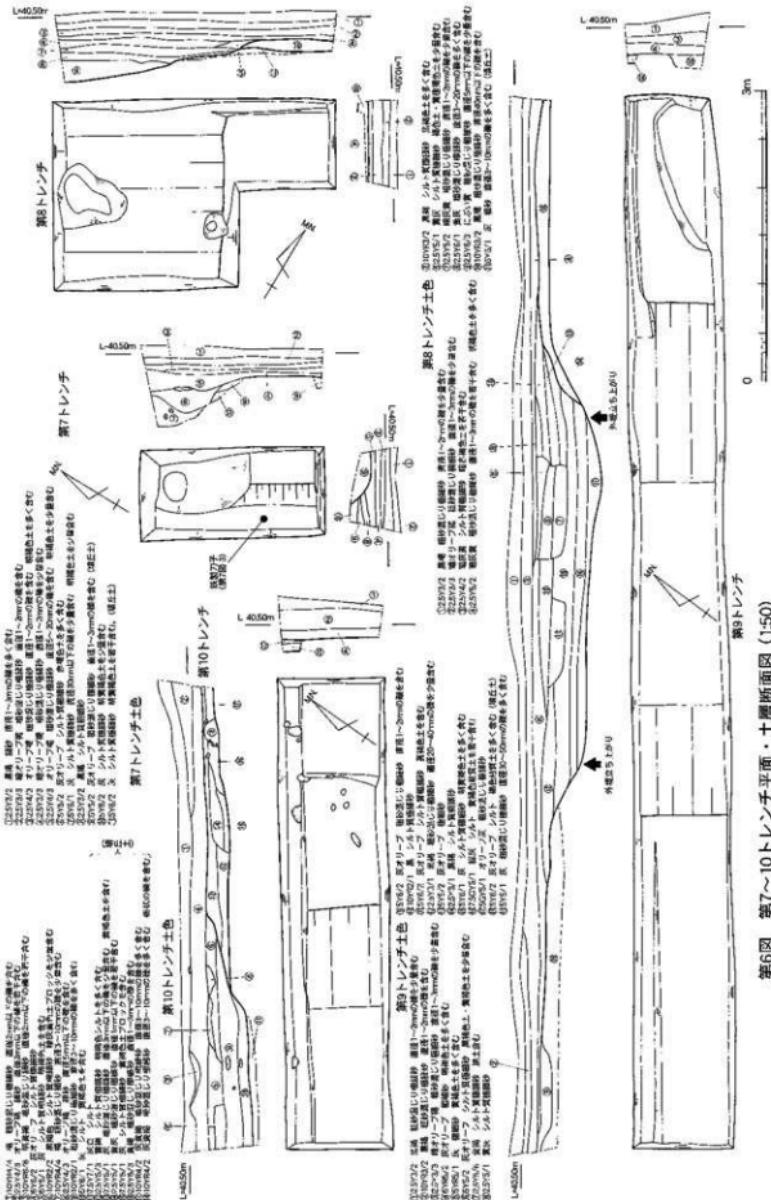
表土から約20cm掘削した地点において、黒褐色土層(5層)を確認した。西側断面の観察を行ったところ、黒褐色土層開始地点(図矢印)において第1・3トレントで確認した状況と同じく、墳丘が存在していたと推定されている方向(南方向・住宅側)に向かって緩い弧を描くように立ち上がっていることを確認した。黒褐色土層開始点の高さは標高39.80mで、上面の高さが標高39.94m～39.98mの範囲で水平堆積している。これは第3トレントにおける黒褐色土層検出地点の高さとほぼ同じである。よって第4トレントで確認した黒褐色土層は第1・3トレントで確認した黒

第4図 第1・2トレーンチ平面・土壌断面図 (1:50)





第5図 第3~6レンチ平面・土層断面図(1:50)



褐色土層から続くものであり、墳丘残存部であると推定することができる。断面検出面において、黒褐色土層は最も浅りの良い部分で厚さ15cmの堆積を確認した。黒褐色土層の観察を行ったが、第1・3トレンチと同じく盛土の単位を示すような明確なラインは確認できなかったため、盛土および旧表土の両方の可能性を想定したい。

黒褐色土層の下においては基盤層と考えられる灰オリーブ色土層(⑦層)を確認した。しかし、灰オリーブ色土層は第1トレンチで確認したものとは異なり、礫を含まない土層であった。灰オリーブ色土層より下層は掘削していないため、堆積状況は不明である。また、第1トレンチの断面検出面における状況から、第3トレンチの黒褐色土層の厚さもほぼ同じであることが推測できる。

第9トレンチ 前方部短辺ラインの検出を目的としたトレンチである。地籍図や現在の地形から検出が期待できる箇所にトレンチを設定した(第6図、図版10・11)。

トレンチ東側において、表土から約25cm掘削した地点で灰オリーブ色粘土層(⑩層)を確認した。鉄分が酸化して生じた筋状の堆積が認められたものの、掘削などは行われていない状況であったため、これを基盤層と判断した。その粘土層の上部に堆積している土層を掘削していくと、トレンチ中央部分(西方向)に向かって落ち込んでいく様子が窺えた。トレンチ北面に沿ってサブトレンチを設定し慎重に掘削を進めた結果、基盤層と推定していた粘土層はやはり基盤層であり、その上部に土(⑩・⑪層など)が堆積していることを確認した。落ち込みの底面を検出するために掘削を進めた結果、溝状に削り出された造構を検出し、断面観察においても滑埋土が堆積している状況を確認した。最深部の標高は39.65mである。

結果として、トレンチ東側で確認した灰オリーブ色粘土層(基盤層)は墳丘残存部である可能性が高く、またトレンチ両側においては周濠外堤部の立ち上がりと考えられる部分を確認したため(図矢印)、この溝状の造構は周濠の可能性が高いと判断した。灰オリーブ色粘土層(基盤層)の高さは、断面検出面において標高40.20m~40.30mの範囲で水平堆積している。溝の堆積土中には焼土などが見られ、一部搅乱が及んでいるようである。また、焼土の上に水平堆積している状況が確認できるため、耕作以前に旧地表面を掘り込んで何らかの焼成行為が行われたと思われる。
第10トレンチ 第9トレンチと同じく、前方部短辺ラインの検出を目的としたトレンチである(第6図、図版11)。

表土から約30cm掘削した地点において、トレンチ西半と東半で土色の違いを確認した。第9トレンチの状況からして、墳丘残存部と溝状造構の堆積上である可能性が考えられたためサブトレンチを設定し慎重に掘削を進めた。その結果、トレンチ中央において上層の堆積状況を確認し、第9トレンチと同じく溝状の造構を検出するに至った。植樹の関係もあり、全体を検出していないので最深部の高さは不明であるが、検出面においては標高39.84mである。墳丘残存部と溝状造構の土色の違いを確認した地点より上層の土は他のトレンチと同じく水平堆積していた。墳丘残存部と判断したなかで、盛土として検出した⑫層は黄褐色土であり、他の質の土が多く混ざっていた。⑫層の高さは標高40.30m~40.36mの範囲で水平堆積している。第10トレンチで検出した未掘削土は盛土と考えられる黄褐色土であり、近接しているにも関わらず第9トレンチで検出した灰オリーブ色土層との差異が認められるが、ともに検出した高さは標高40.30m付近であるため、自然地形の堆積状況を一定程度反映していると考えられる。

第8トレンチ 第9トレンチと同じく、前方部短辺ラインの検出を目的としたトレンチである

(第6図、図版9)。第9トレンチで得られた結果をもとに、検出が期待できる箇所に設定した。

表土から約30cm掘削した地点において、トレンチ東側と西側で土色の違いを確認した。東半において黒褐色土を検出し、第1・3・4トレンチで確認した墳丘残存部と考えられる黒褐色土と近似していたので、それを墳丘残存部と想定し、サブトレンチを設定して土層の観察を行なながら掘削を進めた。断面観察を行った結果、黒褐色土層は第9トレンチで確認した灰オリーブ色粘土層と同じく墳丘が存在していたと推定されている方向(東方向・住宅側)に向かって立ち上がりしており、その直下の土層は礫混じりの基盤層であったため、墳丘残存部であると推測した。しかし、第1・3・4トレンチの状況と同じく、断面において明確な盛上の立ち上がりを確認することはできなかったため、盛土と旧表土の両方の可能性を想定したい。また、黒褐色土と重なりあうように土色が近似する土層(⑤層)が見られたが、墳丘残存部と考えられる⑩層とは異なり礫を含んでいるため、墳丘崩壊土ないしは平坦にならした際に落ち込んだ土と考えられる。断面検出面における黒褐色土層の高さは標高40.25m~40.28mの範囲で水平堆積している。黒褐色土層は残りの良い部分で厚さ13cmの堆積を確認することができた。上層が水平堆積しているので、数回にわたる耕作を受けているようである。周濠と考えられる溝状遺構は、西側にトレンチを拡張していないため最深部の高さは不明であるが、検出面において最も深い地点の標高は39.84mを測る。

第7トレンチ 第8・9トレンチで確認された溝状遺構の続きの検出を目的としたトレンチである(第6図、図版8)。

表土から約30cm掘削した地点において第8トレンチで確認したものとほぼ同質の暗灰黄色土層(⑨層)を確認した。トレンチ西半と東半では土色が異なり、第8・9トレンチと同様の溝状遺構を検出した。植樹の関係上、トレンチを拡張していないため、溝状遺構の幅を確認することはできなかった。⑧層は土色の状況から盛土および旧表土の崩壊土の可能性がある。トレンチ北側においては瓦片や土師器小皿などを含む搅乱があり、溝状遺構が続きを確認することはできなかった。黒色土層は標高40.25mの高さで水平堆積している。南断面における暗灰黄色土層開始点の高さは標高40.03mである。東断面における墳丘残存部と考えられる土層の開始点の高さは、標高40.00mである。

第6トレンチ 第7トレンチで擾乱のため明確に確認できなかった溝状遺構の続きと前方部長辺ラインの確認のために設定した(第5図、図版6・7)。

表土から約20cm掘削した地点において、基盤層と考えられる灰色土を確認した。トレンチ西半は擾乱が激しく、遺構検出は確認できなかった。擾乱からは近現代の甕や瓦片などが出土した。トレンチ南側では溝状の落ち込みを確認したが、先述のように擾乱が激しく、北側に向かってどのように続いているかは不明である。また植樹の関係上、トレンチ南側は鍵状に掘削したため、溝状の落ち込みが第7トレンチに向かってどのように連続するか確認できなかった。このトレンチでは第1・2・3・4・7・8トレンチで確認したような黒色土層は確認できず、また擾乱を受けていない土層も標高40.40m前後となっており、他のトレンチよりもやや高い標高で検出されている。

第2トレンチ 第1トレンチで確認したような黒褐色土層と第9トレンチで確認した灰オリーブ色粘土層(基盤層)の関係を確認するために設定した(第4図、図版3)。

表土から約20cm掘削した地点において灰色粘土層(⑨層)を確認した。確認した地点の高さは

標高40.15mであった。トレンチ西側で検出し、その位置からして第9トレンチ東側で検出した灰オリーブ色粘土層とほぼ同質のものであることを確認した。土質はほぼ同質であったため、第9トレンチで確認した灰オリーブ色粘土層(基盤層)から続くものであると考えられる。トレンチ東側で礫や瓦片が混じる耕作上を掘り下げたところ、標高39.90mの地点において第1トレンチで確認したものと同質と考えられる黒褐色土層(⑩層)を検出した。トレンチ北側にサブトレンチを設定し土層観察を行ったところ、黒褐色土層(⑩層)と灰色粘土層(⑨層)の堆積状況が確認できた。断面観察によると、トレンチ西半で確認した灰色粘土層と同質土層上に黒色土が堆積していた。トレンチ西半の灰色粘土層(未掘削土)のほうが高い地点で検出されているが、それはトレンチ東半が西半よりも耕作を受けているためである。断面における堆積状況から繰り返し耕作が行われていたことがわかる。

ここで注意したいのは第1トレンチでは墳丘残存部と考えられる黒褐色土層の下から灰色で礫が大量に混じる土層を確認したのに対し、第2トレンチでは黒褐色土層(⑩層)の下からは全く礫を含まない基盤層と考えられる灰色粘土層(⑨層)を確認したことである。この土層は礫はおろか水さえ湧いてこない状況であった。このことは第1次調査と第2次調査の発掘時期の違いによる可能性も否定できないが、トレンチ東側は第1トレンチとはさほど距離を隔てていないにも関わらず大きな違いがある。第1トレンチの黒色土層の下から検出された礫層の検出地点の高さは標高39.50m前後であるため、第2トレンチにおいても掘削を進めたならば灰色粘土層の下から灰色礫層が検出される可能性はあるが、今回の調査ではそこまで確認していない。第9トレンチ東側で確認された墳丘残存部と考えられる灰オリーブ色粘土層と、第2トレンチ西側で確認された灰色粘土層の関連性を積極的に評価し、墳丘が存在していたと仮定するならば墳丘内部を掘削していることになる。⑧層から⑩層の状況などは盛土の状況を示していることになるが、その確証を得るまでは至っていない。

第5トレンチ 第1・3・4トレンチで確認された黒褐色土層(前方部長辺推定ライン)の続きを確認するために設定した(第5図、図版5・6)。トレンチを鍵状に掘削したため、屈曲部分から北側を北区画と称して説明を行う。

まず北区画では、表土から約20cm掘削した地点において黒褐色土層(⑥層)を確認した。検出地点の高さは標高40.00m前後である。この数値は隣の第3・4トレンチにおいて黒褐色土を検出した高さとほぼ同じである。しかし、黒褐色上の続きを確認するために精査を行ったが黒褐色土は統一してはいかず、途中で終わることを確認した。また、北区画南側にサブトレンチを設定し土層観察を行ったが状況は同様であった。北区画西側上層断面においても黒褐色土層および墳丘が存在していたと推定されている方向(南方向・住宅側)には、立ち上がるような土層は確認できず途切れた状況であった。トレンチ西側断面においても、墳丘の土と基盤層の明確な差異を看取することはできなかった。またトレンチ南側では、第2トレンチで確認した灰色粘土層(基盤層)を検出した。トレンチ平面において土質の違いが見られたが、人為的な影響を受けた結果である可能性もある。第8・9・10トレンチで確認した溝状遺構の状況を考慮に入れると、墳丘内を掘削していることになるが、そういういた確証を得ることはできなかった。

②遺物

各トレンチから少量の遺物が出上した。18ℓ入コンテナで1箱で、中世以前の遺物は数点の

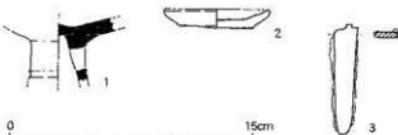
みである(第7図)。その他は、近世以降の瓦・土器類である。

(1)は須恵器高杯である。第6トレンチ擾乱土中より出土した(第5図)。脚部上半から杯部下半までが残存している。

一段透かし孔の上段部が部分的に残存する。(2)は土器小皿である。第7トレンチ南壁③層中より出土した。中臣後半のものと考えられ、落ち込みの埋没年代を表していると

考える。(3)は鉄製刀子である。第7トレンチ⑧層中より出土した(第5図)。茎部のみが残存している。残存長6.8cmを測る。片面には木質の付着が若干認められる。遺物の時期は判断できず、古墳に伴うか否かについても不明と言わざるを得ない。

他に図化はしていないが、第1トレンチ基盤層直上より須恵器妻体部の破片が出土した(第4図)。古墳に伴うものと考える。



第7図 出土遺物実測図 (1:3)

第6節 まとめ

①各トレンチの検討

第1トレンチを設定した地点は、調査区のなかでも一段低く田畠が造成されており、そのため他のトレンチに比べて深く掘削が行われていた。遺構検出地点の標高が他のトレンチよりも低かったが、幸い墳丘残存部と考えられる黒褐色土層を確認することができた。調査区東側と調査区西側において基盤層検出面の高さが異なるため、旧地形は西側がやや標高が高かったと推測する。また周辺地形も有岡大池側に向かって高くなっている、調査区北側にある畑も東から西に向かって高く造りだされているため、そのことからも旧地形は西側が高かったものと考えられる。

第1トレンチおよび3・4トレンチにおいて黒褐色土層を検出し、墳丘が存在したと推定されている方向(住宅側)に立ち上がりをしていることを確認した。この立ち上がりは後世の掘削などによって生じた可能性も考えられるが、弧を描くようにして立ち上がりしており、耕作時に生じた鋤先などの痕跡によって抉られている様相を呈していなかったため、墳丘の痕跡を示すものと判断した。しかし、黒褐色土層は第5トレンチ途中で途切れてしまい、明確な状況は見えない。そのため第6トレンチを設定し、1・3・4トレンチで確認した黒褐色土層の端を繋いだ延長線上と第7・8・9・10トレンチで確認した墳丘裾と考えられるラインの交点を確認することに努めたが、擾乱が激しく、また隣接している第7トレンチよりも高い標高で擾乱を受けていない土層を確認し、なおかつ土色が異なっていたためいくつかの解釈を想定せざるを得ない状況であった。このことは先述した旧地形にある程度左右されているためと考えられる。

第7・8・9・10トレンチでは周濠と推定する溝状遺構を確認することができた。特に第9トレンチでは外堤と考えられる立ち上がりを確認し、溝状遺構の幅が4.5m前後であることを確認できた。第5・6トレンチにおいては墳丘の残存を肯定する要素は見出しある。第1・3・4トレンチおよび第7・8・9・10トレンチで確認した立ち上がりを積極的に評価するならば、後円部から西側に向かって造り出された前方部が存在していた可能性を想定できる。また、第7・

8・9・10トレンチの状況と地図との照合により、菊塚古墳は60m前後の前方後円墳であったことが推測できる。

また葺石については、第3・8・10トレンチの周縁と考えられる地点において5~10cm大の礫を数点確認したにすぎず、掘削時においてほとんど認められなかった。また第1・9トレンチなどにおいて拳大の礫が混入している堆積土は確認できなかった。そのため、今回のトレンチ調査においては葺石の存在を肯定する要素は認められず、葺石は存在していなかった可能性が高いといえる。

②墳丘復元案

はじめに 本年度の調査では、前節の通り前方部北側の形状に関する重要な知見を得ることが出来た。菊塚古墳については、第1節に記述しているようにこれまで発掘調査や墳丘測量を継続してきており、部分的ではあるが調査前に比して明らかになった点が多い。ここでは現段階までに把握できた基礎データを基にして菊塚古墳の墳丘復元案を提示する。すなわち個別データを総合して全体を位置付ける作業を試みてみたい。

墳丘 まず、後円部について検討を行う。後円部については比較的良好に残存しており、現在の裾部より2m前後外側のラインが墳丘基底部と考えられる。このことは墳丘南側で確認されたトレンチでの成果とも符合する(平成12年度第3トレンチ)。墳丘測量図(付図)や字限図、航空写真などで確認できる円弧を基準にするならば、直径39mに復元することができる。

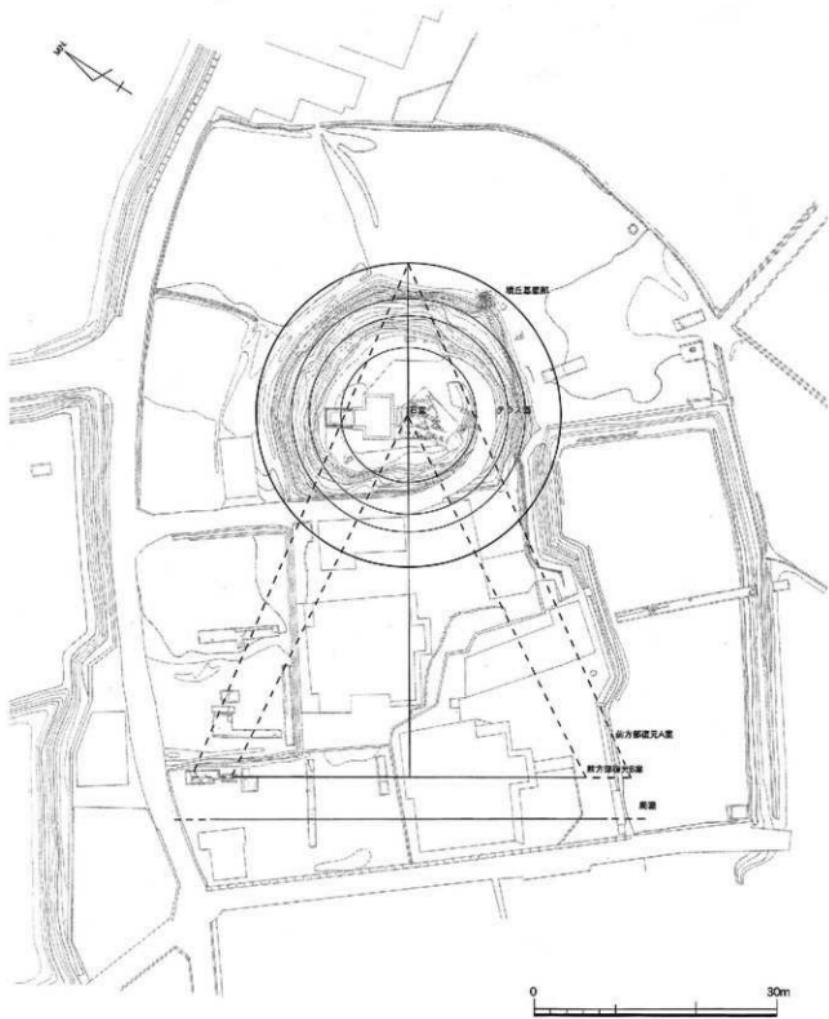
段築は墳丘測量図より後円部が2段築成となることが分かる。テラスの幅は、最も良好に残存している墳丘北東側で約2mを測る。

前方部前端の位置は、今年度の調査成果により明らかになった(平成15年度第6~10トレンチ)。前方部長25mを測り、後円部も合わせた墳丘長は64mを測る。この数値は王墓山古墳の後円部直径および前方部長の比率と比較して前方部が長い。

なお、調査前には現在前方部に建っている住宅の敷地北側の区画が主軸線に平行していると予想したが、結果として約3度西北西へずれていることがわかった。古者の話によると、前方部の住宅部分は戦前に建築する以前には北側の畠地と同じ高さであったそうである。事実だとすれば、かなり以前から前方部が削平されていたことになる。

形状については、今年度調査で前方部隅部と予想される周辺においてトレンチを設定し検出に努めたが(平成15年度第6~8トレンチ)、予想以上に変更・搅乱が著しく、確定するには至らなかった。同様に前方部北側側端の延長線上を押えることによって前方部隅部を確定することも試みたが(平成15年度第1・3~5トレンチ)、墳丘残存部と想定される黒褐色土の残存状況が不良であったため、確定させるには至らなかった。ただし、平成15年度第2トレンチで平面的に検出された上は、その上質から墳丘上である可能性が高い。少なくとも第2トレンチよりも外側(北側)に、墳丘側端部があったと推測される。これらのことを踏まえると、2通りの復元が想定できる(第8図)。

まず調査で確認した北側側端部(平成15年度第1・3~5トレンチ)を基準に復元したのが、前方部復元A案である。この案では北側側端部を直線的に後円部にまで延長すると、後円部端の主軸線上につながる。この復元案では各トレンチで検出した黒褐色土層を盛土と判断し、調査成果を最大限尊重したものである。この復元案によると前方部北側隅部は第6トレンチ付近となる。



第8図 填丘復元案 (1:600)

ただし、この復元案ではくびれ部がかなり太くなり、また前方部幅も後円部直径を超える。

次に墳形を重視して復元したのが、前方部復元B案である。調査成果による根拠は薄いが、前方部幅を後円部直径とほぼ同じと推定して復元した。後円部直径と前方部長の比率を重視して作成した。この復元によると、墳丘中であると推測した第2トレンチも内側に収まり矛盾しない。この復元では、北側側端部を直線的に後円部にまで延長すると後円部中心につながる。

周濠 昨年度までの調査では周濠は有さず、周堤帶のみが巡ると推測されていた。ところが、今年度の調査において幅5.5mの周濠を検出し(平成15年度第9トレンチ)、復元案を変更することになった。周濠は基盤層を削り出して作られている。周濠は前方部前端のみで検出されており、側端部では周濠が予想される長さまでトレンチを延長した平成15年度第1トレンチにおいても、周濠の立ち上がりを確認できなかった。

周堤 周堤については予想される位置にトレンチを掘削したが(平成12年度第6トレンチ)、明確に検出されなかった。しかし、字限図や過去の航空写真では盾状の周堤が確認され、本来は存在していたと考えられる。なお、古墳北側の高まりは現在、盾状にはなっていないが、開場整備前には盾状になっていたようである。旧地形の残存ラインは、平成15年度第6トレンチ北側にある納屋北側角付近の上手状の高まり付近である(付図矢印参照)。現地形でも古墳北側が高く南側が低くなっているが、おそらく北側周堤は基盤層削り出し、南側周堤(現在は削平されている)は盛土によって構築されていたと推測する。

墳丘復元案 以上のことと踏まえて墳丘復元案を提示する(第8図)。このように復元した菊塚古墳の主要な部位を復元すると、墳丘長64m、後円部直径39m、前方部長25mを測る。前方部幅は、前述の通り確定することが出来なかつたため両案を併記した。周濠については前方部側端では検出することが出来なかつたが、トレンチのさらに外側に広がる可能性もある。同様に後円部でも検出される可能性が高い。今後の調査に期待したい。なお、周堤については発掘調査で確認されなかつたため、図示は行わなかつた。

以上のような復元を試みたが、随所で今後の調査に依らなければ判断できない箇所もあり、提示した数値も将来変更される可能性は高い。特にくびれ部の位置は現状では確認することが困難であるし、周濠や周堤も今後の調査による確認・再検討が必須である。併せて同時期古墳の類例とも比較検討し、再度復元案を提示することを今後の課題として挙げておきたい。

付章 平成14年度出土遺物

第1節 鉄製品

前年度の調査によって出土した鉄製品のうち、整理および簡易保存処理が完了したものを紙面を借りて報告する(第9図、図版12)。鉄製品は出土した個体の大半を報告することになるが、尖根系鉄錐に関してはX線写真を撮影していない個体もあり、図化できなかったものがあるため、今回の報告では確認できた点数のみを明記している。そのため、鉄錐に関しては今後の整理の進行により出土点数が増加することになることを断っておく。

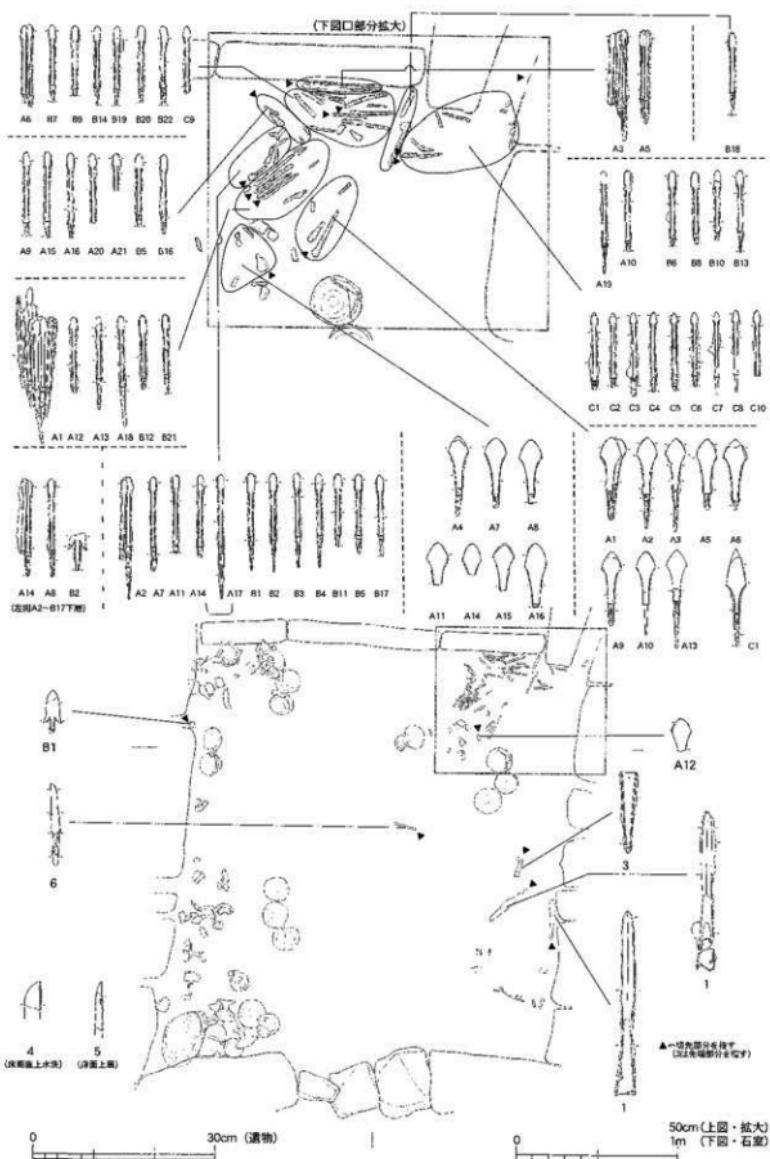
鉄錐

鉄錐(第10図1～3、図版13)は床面直上で検出され、鉢身2点、石突1点が出土した。鉢身、石突とも出土地点が近接しており、柄挿入口の方向も対をなしてはいないため、どの鉢身と石突が対応関係にあるのかは不明である。また、仮に鉢身1が壁に沿うように配設されていたならば原位置を保っていることになるが、出土状況からは副葬時の状況を推定することは難しい。

鉢身1 鉢身1(第10図1)は土圧でやや歪みが生じており、また、袋部が欠損しているため全長は明らかではない。身部の断面形態は菱形で、明瞭な鋸を有している。闊は存在せず、断面が円形を呈する袋部が続いている。袋部下端の破片は接合することはできない。目釘孔が確認できるが、反面を欠損しているため1箇所のみの確認にとどまり、目釘も残存していない。また、さほど深くない山形の抉りが確認できる。身部および袋部を通して表面には木質の付着は確認できず、抜き身で副葬された可能性がある。袋部内面には鉢身上軸と平行して入る木目を持つ木質が付着しているため、柄に装着された状態で副葬されたことが確認できる。

鉢身2 鉢身2(第10図2)は土圧のためか身部および袋部にやや歪みが生じているが、現状では全長30.1cmを測る。袋部上端の断面形態は円形で、袋部下端の断面形態も円形を呈している。闊は鈍角を呈し袋部に至る。身部の断面形態は菱形で、明瞭な鋸を有している。袋部には被さるように木質が付着しているため、柄に収められた状態で副葬されたことが推測できる。目釘孔は身部に対して斜めに交わるように2箇所確認でき、断面形態が円形を呈する鉄製の目釘が良好に残存している。また、袋部内面には鉢身上軸と平行して入る木目を持つ木質の付着が確認できるため、柄に装着された状態で副葬されたことが確認できる。袋部の合わせ目や抉りなどは確認できず、下端は直線的に造り出している。

石突 石突(第10図3)は残存状態が良好で、全長13.2cmを測る。断面形態は柄挿入口から先端付近に至るまで円形で、先端において先細り、石突の形態としては円錐形を呈するものとなっている。柄挿入口付近に目釘孔が二箇所確認でき、断面形態が円形を呈する鉄製の目釘が良好に残存している。X線写真的観察による限りでは、挿入空間が先端近くまで及んでいる。内面には木質が付着しているため、柄に装着された状態で副葬されたことがわかるが、どの程度の深さまで柄が及んでいたかは確認できない。現状では挿入口から3.0cmのところまで木質の付着が確認できる。表面には木質などの付着は確認できない。



第9図 鉄製品出土状況図

鉄刀

鉄刀(第10図4、図版13)は櫻乱土より出土した。切先のみが残存している。切先は緩やかに落ちるフクラを持つ。残存部の長さは4.75cmで幅は2.5cm、厚さは7mmである。背側には木質が確認でき、鉄刀に巻きつくように付着していることから、鞘に収められた状態で副葬されていたことが推測できる。

刀子

刀子(第10図5・6、図版13)は2点出土した。刀子1は床面上層からの出土の上、欠損も激しいため原位置は保っていないと考える。刀子2は床面直上で検出されたため、原位置を保っている可能性がある。しかし、床面においても片付け行為がなされたと考えられる須恵器の集積、および他の遺物の散乱が確認できるため断定することはできない。

刀子1(第10図5) 切先および基部が欠損しており、刀身部のみが残存している。残存長は6.2cm、最大幅は1.15cmである。刀身部は中ほどからふくらみを持ちはじめ、間に向かって広がる様相を呈している。刀身部の両面および背側には木質の付着が見られるため、鞘に収められた状態で副葬されたことが推測できる。

刀子2(第10図6) 先端がわずかに欠損しているが、ほぼ完存している。残存長は13.4cmで復原長もこれとほぼ変らない。切先はやや張りのあるフクラを持つ。棟は直線的な形態を呈し間に至る。関は刃側と背側に造り出され、直角に落ちる様相を呈す。関の幅は1.4cmである。茎には柄が残存している。茎の断面形態は関付近では緩やかな三角形を呈し、茎尻に向かうにつれ平坦になっていく。茎尻は丸く造り出されている。刀身部の一部には鞘と考えられるものが残存しており、鞘に収められた状態で副葬されたことが確認できる。肉眼観察による限り、目釘・目釘孔などは確認できない。

鉄鎌

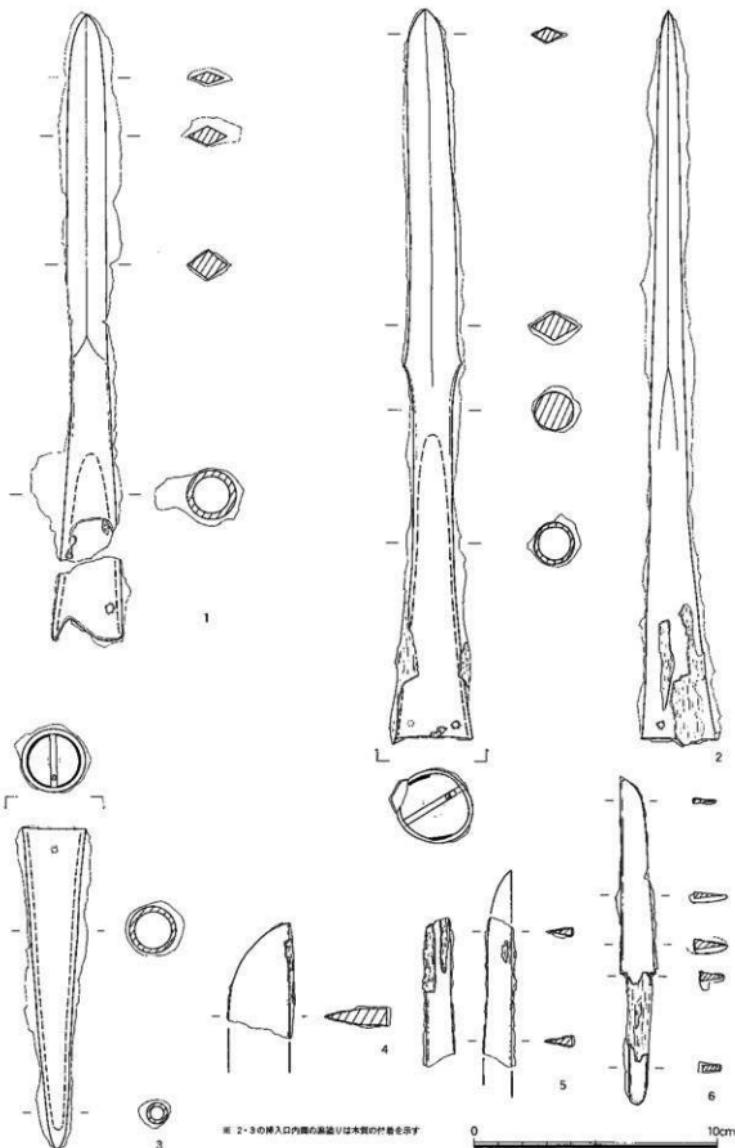
鉄鎌(第11図～18図、図版14～17)はすべて棺外から出土した。鉄鎌は平根系と尖根系のもので、ここでは形態の違いからそれぞれをA～Cの3類に分類して記述する。なお、実測図において茎の断面図が外形のみの図化に留まる箇所は、その箇所に欠損が生じていなかったため図化できなかつたことを断つておく。

平根系鉄鎌

平根系鉄鎌(第11図A1～第12図C1、図版14)は広身の鎌身部を持つもので、逆刺の有無・頸部形態の違いなどから3類に分類することができる。

A類(第11・12図) A類は鎌身部の形態が広身の三角形状を呈し、やや幅のある頸部を経て茎に至るものである。鎌身部から頸部の大半を欠損しているA13は、頸部の断面形態が近似するA10およびA12との接合を試みたが接合関係にはないため、これを1個体とすると17点が確認できる。

全長は最も残存状態の良いA3において15.35cmを測る。鎌身部は幅のある三角形状のもので、両丸造りをなしている。刃部は緩やかなフクラを持つものが大半を占めるが、A7のようにやや張ったフクラを持つものも確認できる。



第10図 鉄鉢・鉄刀・鉄製刀子実測図 (1:2)

頸部の断面形態は2種類あり、レンズ状の断面の両端をやや丸く造り出した梢円形を呈するもの(A1~14)と、長方形を呈するもの(A15・16)が確認できる。A16の頸部断面形態は短辺がやや丸みを持った長方形を呈しており、鎌身部も他のA類と比べやや長めに造り出されているため、厳密にはA類のなかでも別型式に位置付けられるものである。また、A15は刃部および関以下が欠損しているため原形は不明であるが、頸部の断面形態が長方形を呈していることを勘案すると、A16と同様の形状であった可能性がある。頸部の断面形態の違いから、A類のなかでも大別することが可能である。

関は明確に造り出されており、弱いながらも外に向かって広がる様相を呈するものが大半である。関における撥状に聞くとまでは言い切れないほどの弱い広がりは、後述する尖根系鉄鎌における関とは異なり、機能的なものあるいは視覚的に認識されることを意図したものではないと考えられる。そのためこの弱い広がりは意図的に造り出したものではなく、茎部を造り出す工程において生じた結果であると考えたい。

茎は断面形態が方形を呈し、先細るようにして茎尻に至っている。現状での茎に残存する矢柄の構造は、鉄鎌と平行する木目を持つ木質を茎に被せ、その上から樹皮で横方向に口巻きが施されている。口巻きの重ねの状況は左上がりのものが大半を占める。

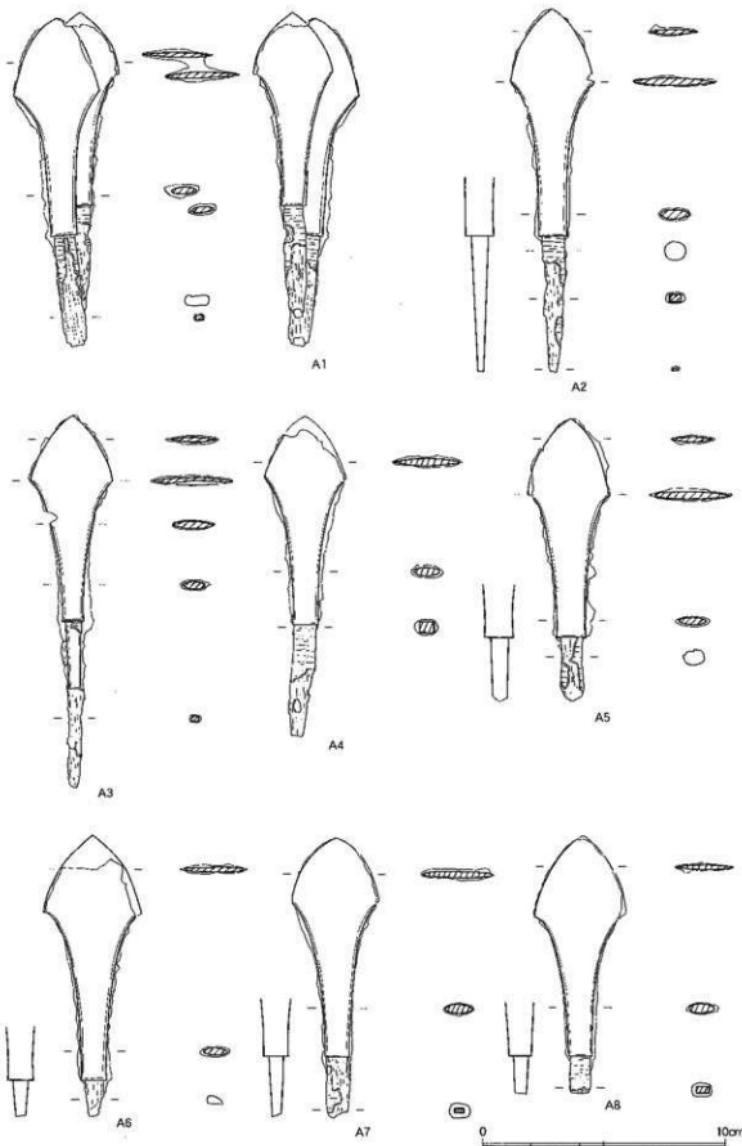
B類(第12図) B類は逆刺を有し、鎌身部の形態が広身の三角形状を呈するもので、点数は2点確認できる。

B1は鎌身部および茎に欠損が生じているため全長は不明であるが、残存長は5.9cmを測る。また、鎌身部は欠損しているが、残存部分からおおよその形態復元が可能である。鎌身部は両丸造りをなしている。頸部の断面形態は方形を呈し、関の形状は茎に向かって撥状に聞くものとなっている。この個体はX線写真を撮影していないため、関が茎に対してどのように造り出されているかは不明であるが、残存している矢柄の厚みを勘案すると明確な関を有していることは明らかである。また、茎の断面形態は欠損部分の観察による限りではやや円形を指向したものとなっているが、錆び膨れによる形態変化が生じている可能性がある。

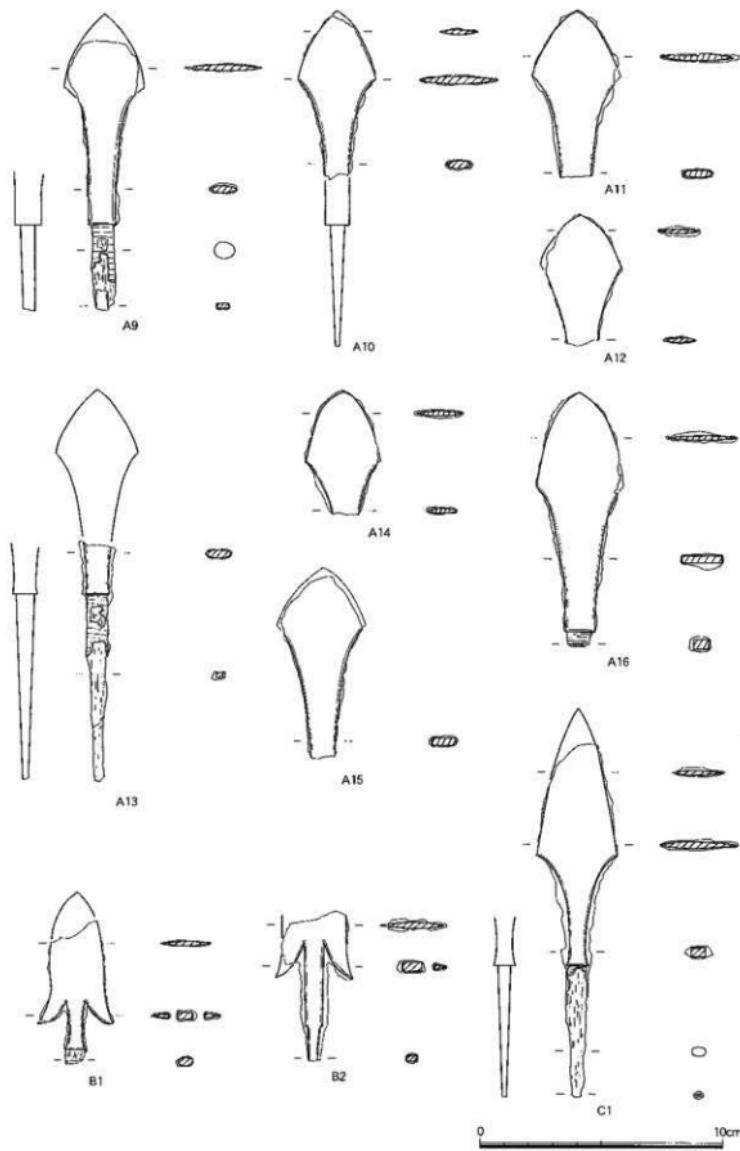
B2は鎌身部および茎の先端が欠損しているため全長は不明であるが、残存長は6.2cmを測る。また、鎌身部の大半が欠損しているため形態の復元は難しい。鎌身部は両丸造りをなしている。頸部は上端から下端に至るまで直線的な形態を呈し関を造り出しており、頸部および茎の断面形態は方形を呈している。矢柄は残存していない。

C類(第12図) C類はA類に比べて鎌身部が長く、頸部の形状が強く内湾しているもので、点数は1点のみである。

鎌身部先端を欠損しているため全長は不明であるが、残存長は14.6cmを測る。また、鎌身部の形態は残存部分からおおよその復元が可能である。茎は茎尻に至るまで完存している。鎌身部はA類に比べて長く、直線的な形態の刃部を造り出しており、両丸造りをなしている。頸部は強く内湾し、関は撥状に聞く様相を呈している。また、頸部の断面形態は方形を呈しており、この点もA類と異なる要素となっている。現状での茎に残存する矢柄の構造は、鉄鎌と平行する木目を持つ木質を茎に被せ、その上から樹皮で横方向に口巻きが施されている。口巻きの重ねの状況はやや左上がりとなっている。



第11図 平根系鉄鑿実測図① (1:2)



第12図 平根系鉄鎌実測図② (1:2)

尖根系鉄鎌

尖根系鉄鎌(第13図A1～第18図F7、図版15～17)はすべて長頸鎌で、鎌身部の形態の違いから3類に分類することができる。

A類(第13～15図) A類の鎌身部の形態は鉄鎌の主軸と平行する刃部を左右に持ち、先端において三角形状を呈するもので、点数は40点確認できる。

全長は最も残存状態の良いA17で、20.3cmを測る。鎌身部は片丸造りをなすものが大半を占めているが、両丸造りをなすもの(A13・A14)も存在する。頸部の断面形態は方形を呈し、関は搬状に開くものとなっている。関の大半は端部が突出するものとなっているが、丸みを持って造り出されているもの(A19)も存在する。茎の断面形態は方形を呈し、先細るようにならぶ。現状での茎に残存する矢柄の構造は、鉄鎌の主軸と平行する木目を持つ木質を茎に被せ、その上から樹皮で横方向に口巻きが施されている。口巻きの重ねの状況はやや左上がりのものと平行のものがある。

A1は鋲着が激しかったため状態を考慮し、束のまま取り上げた。その表面の一部には獸毛および木質と考えられる有機質が付着しており、束の状態での出力ということから、胡籠などの矢入れ具に収納されていた可能性が想定できる。

B類(第15～17図) B類はA類に比べ頸部が若干短く、鎌身部に逆刺を有するもので、点数は2点確認できる。

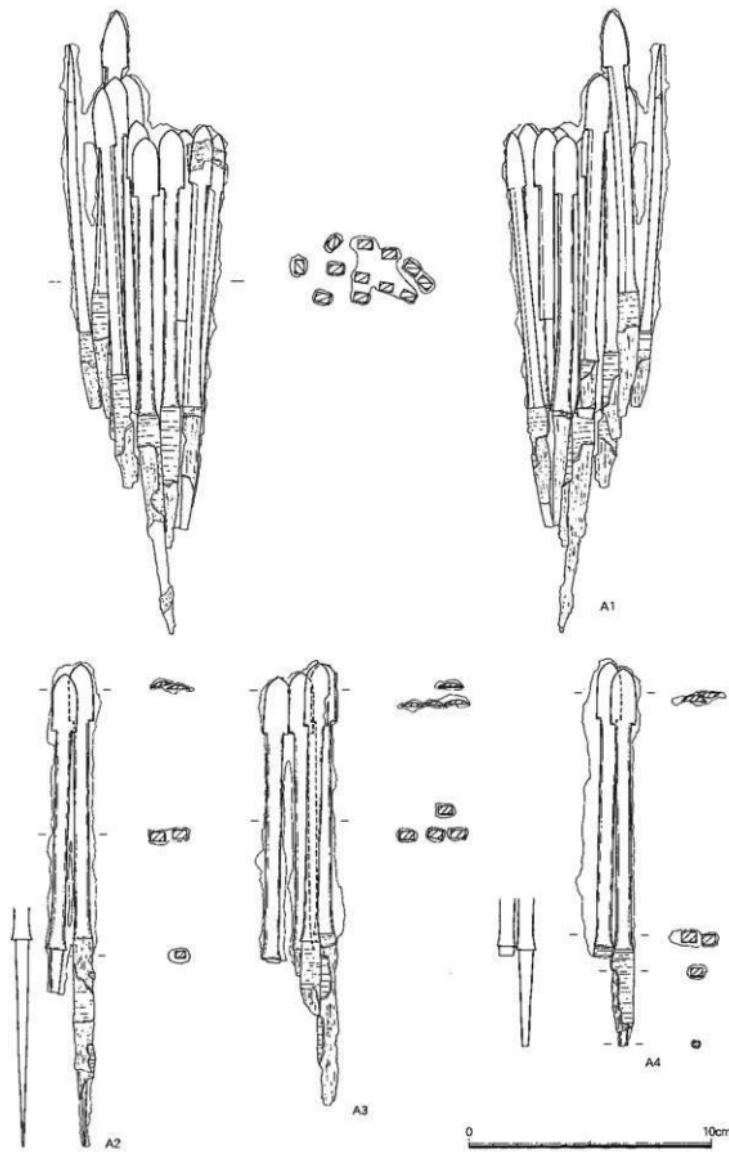
全長は最も残存状態の良いB1で、全長16cmを測る。鎌身部は片丸造りをなすものが大半を占めているが、両丸造りをなすもの(B4・B10)も存在する。

頸部の断面形態は方形を呈し、関は搬状に開くものとなっている。関の大半は端部が突出するものとなっているが、丸みを持って造り出されているもの(B5)も存在する。茎の断面形態は方形を呈するものが大半を占めているが、円形を指向したもの(B8・B17)も存在する。現状での茎に残存する矢柄の構造は、鉄鎌の主軸と平行する木目を持つ木質を茎に被せ、その上から樹皮で横方向に口巻きが施されていることが確認できる。また、B4は茎に繊維状有機質を螺旋状に巻きつけていることが確認できるため、少なくともこの個体に関しては3段階の工程を経ていることがわかるが、他のものに採用されていたかは確認することはできない。口巻きの重ねの状況はやや左上がりのものと平行のものがある。

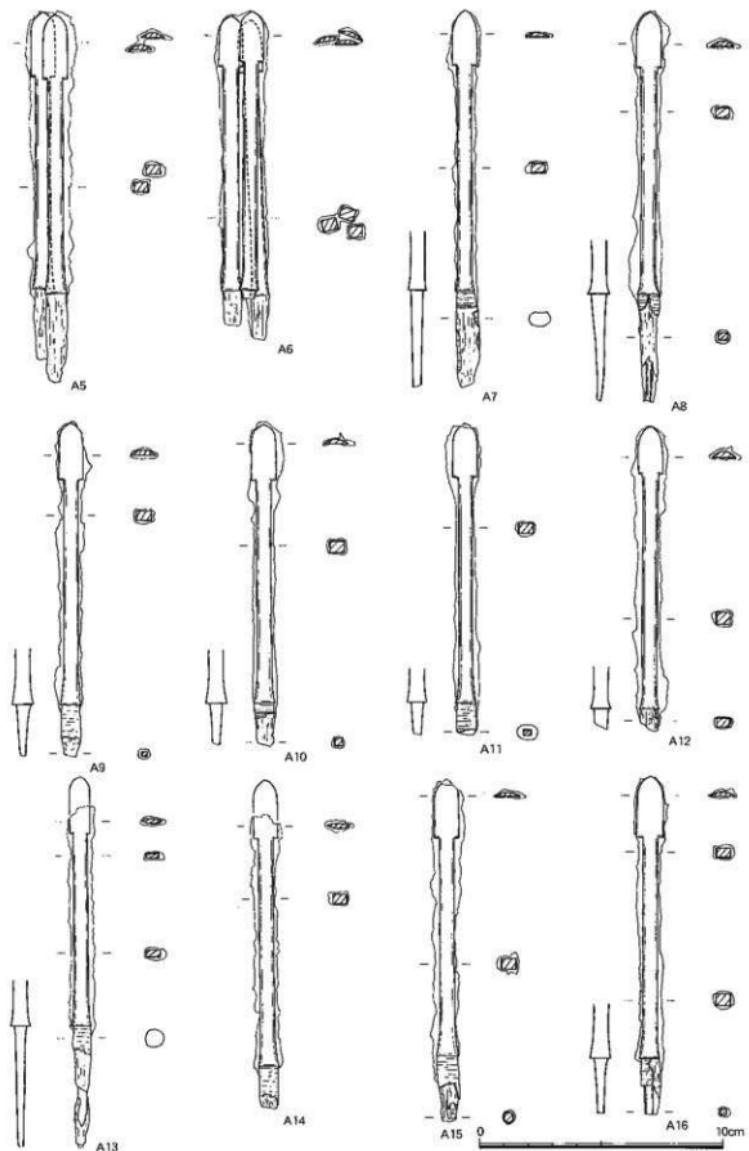
B22の頸部には木質と考えられる有機質が付着しており、矢入れ具などの存在が示唆されるが、現状では他のB類において確認できないため即断はできない。また、その鎌身部は慣れが生じておらず、多少伸びた状態になっている。特に中心において局部的なへこみが生じているため、鋲化がさほど進行していない段階で転落石などによる強い衝撃を受けたと考えられる。B21は頸部の中心で折れが生じており、その状態で鋲着している。また、B17やB20の鎌身部先端は他のものとは異なり、必ずしも鉄鎌の主軸に沿うものではない。そのためこの2点においては、刃部の研ぎ直しが行われた可能性があることを想定しておきたい。

C類(第17・18図) C類はA・B類とは異なり、鎌身部の形態が三角形状を呈するものとなっており、点数は10点確認できる。

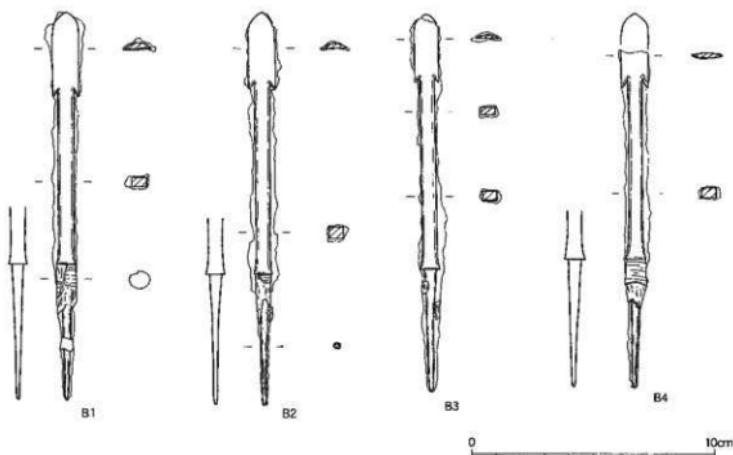
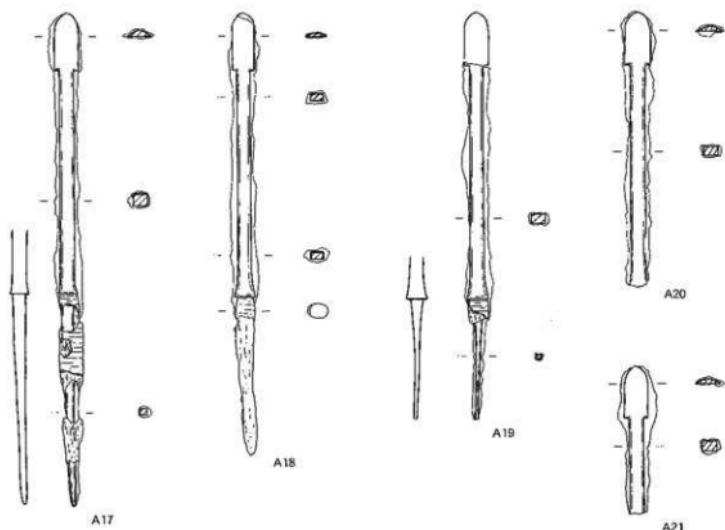
すべて茎に欠損が生じているため全長を知り得るものはないが、最も残存状態の良いC3で、残存長13.75cmを測る。鎌身部は片丸造りをなすものが大半を占めるが、両丸造りをなすもの(C2)も存在する。頸部の断面形態は方形を呈し、関は搬状に開くものとなっている。C5の関は



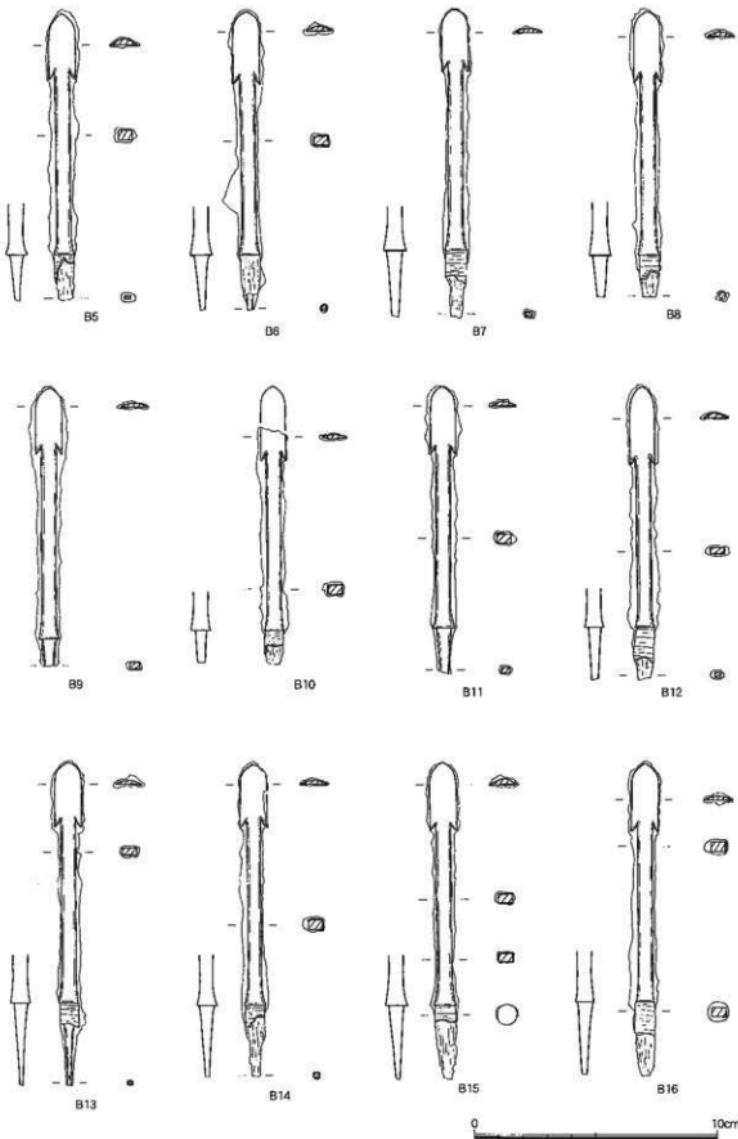
第13図 尖根系鉄鎌実測図① (1:2)



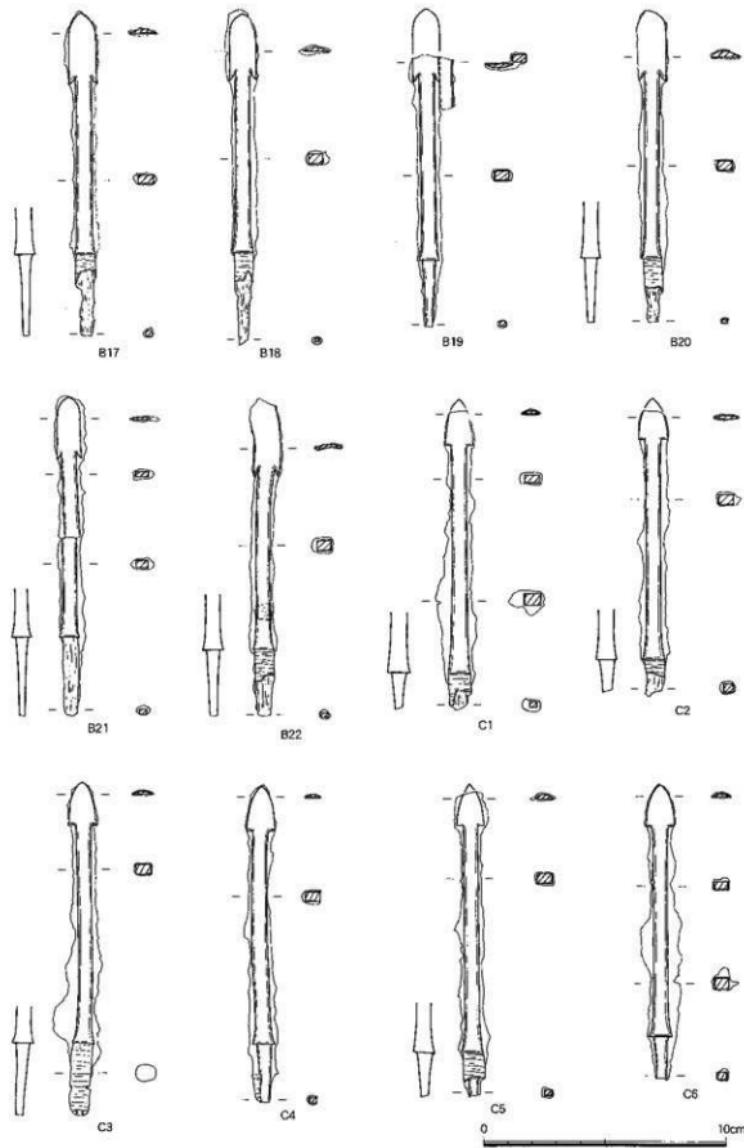
第14図 尖根系鉄錆実測図② (1:2)



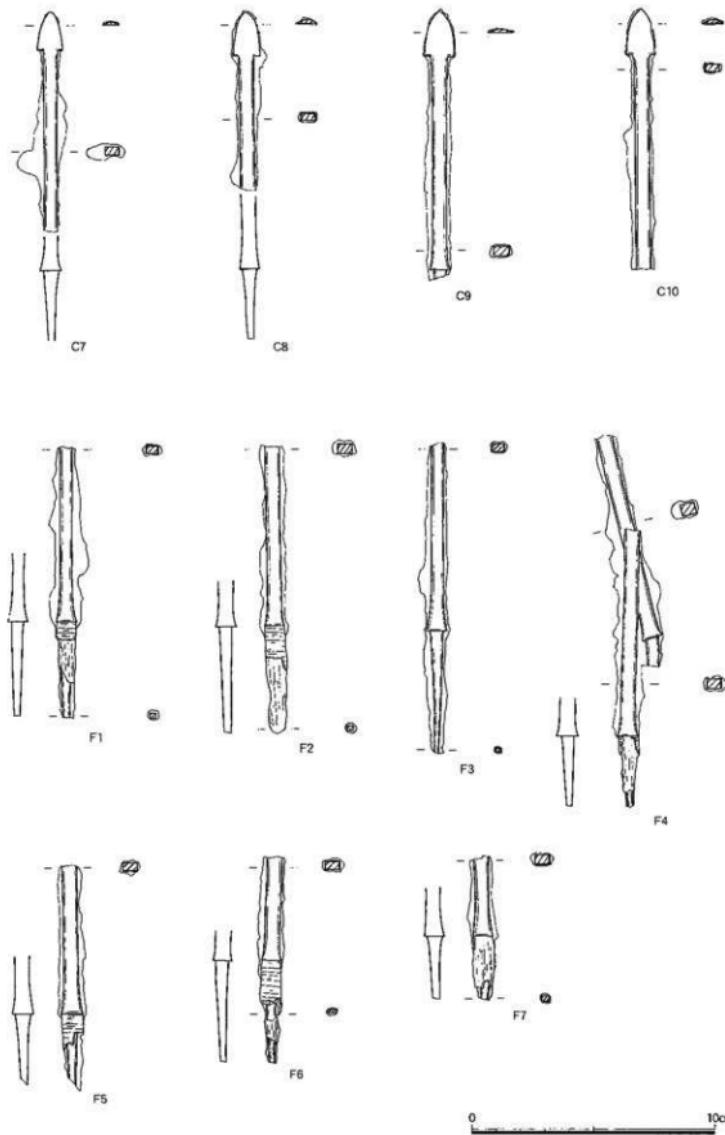
第15図 尖根系鉄鍼実測図③ (1:2)



第16図 尖根系鉄錆実測図④ (1:2)



第17図 尖根系鉄鑑実測図⑤ (1:2)



第18図 尖根系鉄鍊実測図⑥ (1:2)

他のとは異なり、やや斜めに造り出されている。茎の断面形態は方形を呈し、先細るように茎尻に向かっている。現状での茎に残存する矢柄の構造は、鉄鎌の主軸と平行する木目を持つ木質を茎に被せ、その上から樹皮で横方向に口巻きが施されている。いずれのものも口巻きには土が強く付着しているため、重ねの状況は明瞭ではない。また、C6の頸部中心付近にわずかな木質の付着が確認できるが、光沢を有する樹皮であるので、他の鉄鎌の口巻きが付着したものと判断したい。

類型不明品(第18図 記号F) いずれも鎌身部を欠損しており、A～C類のいずれに該当するかは不明である。しかし、良好に残存している頸部の長さを参考にすると、A類平均長(A1は除く)9.13cm、B類平均長7.55cm、C類平均長9.03cmとなっており、F4の2点は頸部残存長が8.6cmを超えるためA類かC類のいずれかに該当する可能性が高い。頸部の断面形態はいずれのものも方形を呈し、関は撥状に開くものとなっている。茎の断面形態は方形を呈している。残存する矢柄の構造も先述した鉄鎌と同じである。F6では茎に繊維状有機質を螺旋状に巻きつけているのが確認できる。

第2節　まとめ

今回、菊塚古墳から出土した鉄製品の大半を報告することができた。ここでは後期古墳において、あまりまとまった出土が確認されていない平根系鉄鎌A類の形態に対する若干の検討と、鉄製品からみた初葬の時期について述べることにする。

平根系鉄鎌A類の形態について 菊塚古墳から出土した鉄鎌は種類・点数とともに多種多様といえ、古墳時代後期の鉄鎌組成を考えるうえで示唆に富む資料となっている。中でも平根系鉄鎌A類とした鎌身部が広身の三角形状を呈する鉄鎌の大半は、頸部の断面形態がレンズ状を呈する点が特徴で、数発からしても偶発的にその形態に至ったわけではないことがわかる。形態の印象としては、時期の隔たりはあるものの、古墳時代中期における広身三角式鉄鎌に近いものがある。類例を挙げるならば大阪府アリ山古墳や静岡県堂山古墳などから出土したものがあるが、これらのものは頸部の断面形態が方形を呈するものである。そのため、レンズ状を呈する頸部の断面形態を重視するならば、静岡県五ヶ山B2号墳から出土した広身三角式鉄鎌が要素的に共通する数少ない類例といえる。この断面形態を重視し、仮に平根系鉄鎌A類が中期における広身三角式鉄鎌の系譜に連なる資料であるという前提に立つならば、中期段階に頸部と茎の間に存在していた山形の突起が省略、あるいは変化し、明確な関を造り出すことに移行していったことを物語る資料と考えることができる。

初葬の時期について 鉄製品を含め他の副葬品も追葬に伴う片付け行為や攪乱を受けていると考えられるため、副葬時の原位置を留めているものを特定することは難しい。また、石屋形内では8点、玄室では2点の耳鏡が出土しており、追葬に伴い石屋形の再利用および玄室が活用されていたことが推測でき、複数の型式が確認されている須恵器もそのことを裏付けている。そのため、今回報告した鉄製品が特定の被葬者に伴う同一時期の一括資料であるとするることは難しく、追葬が行われた結果としての点数である可能性を考慮しなければならない。しかし、鉄鎌に関してはその大半が石屋形に沿うように、あるいは近くにまとめて置いてあるため、追葬を含め石屋形内

に葬られた被葬者に伴って副葬された可能性が高い。

石屋形付近で検出した鉄鎌は、鎌身部の側から矢柄を復原していくと20~40cmほどで石屋形あるいは側壁に到達するため、矢の全長としては短くなってしまい、むしろ片付け行為を示唆する状況となっている。また、尖根系鉄鎌C類は石屋形と側壁の間の約15cmという間隔に差し込まれたような状態で検出されたため、追葬時の片付け行為の結果である可能性が高い。鉄鎌が石屋形に立てかけられた状態で副葬され、やがて倒れて検出時の状況に至ったとも考えられる。しかし、一部のものを除いて検出地点からはそういった状況を推定することは難しく、やはり片付け行為後の状況を示していると考えられる。このことから鉄鎌は追葬以前の副葬品と想定することができ、少なくとも最終段階で葬られた被葬者に伴うものではないと考えられる。また、手順として初葬においては玄室ではなく石屋形を使用することが妥当であるため、そのことからも鉄鎌は相対的に早い段階において副葬されたと推測できる。

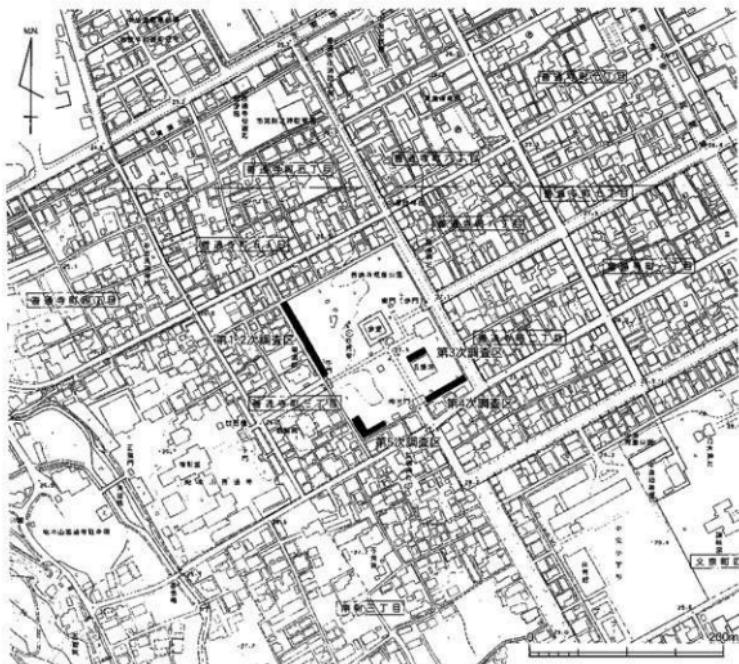
いずれの段階で埋葬された被葬者に属するものであるかという問題が残るが、鉄製品の諸要素をみてみると、鉄鉢は2点とも刃部の断面形態が菱形で、袋部の断面形態は円形を呈しており、闇を有するものとそうでないものとが並存している。また、鉄鎌の形態は中期的要素が強い平根系のものを含み、尖根系鉄鎌は3種類とも撥状に聞く闇を有する段階の長頭鎌で占められている。刀子は刃側と背側に闇が造り出される後期に通有の形態であるため時期の判別は難しいが、鉄鉢および鉄鎌の要素や組成から判断して、古墳時代後期前半(6世紀前半)段階の時期のものとして捉えることができるため、鉄製品のみからみた場合の初葬の時期は、古くてもその時期を遡らないものと考えておきたい。

(補記)脱稿後、土および鏽の除去が不完全であった個体の再接合を試みたところ、平根系鉄鎌のA11とA13は接合することができ、一個体であることが判明した。本文中においては、「~17点の出土が確認できる。」と記述したが、現時点において確認した正式な点数は16点ということになる。今回は紙幅の都合上、接合後の実測図を掲載することはできないが、A11を反転させた状態のものが正しい接合関係を示している。

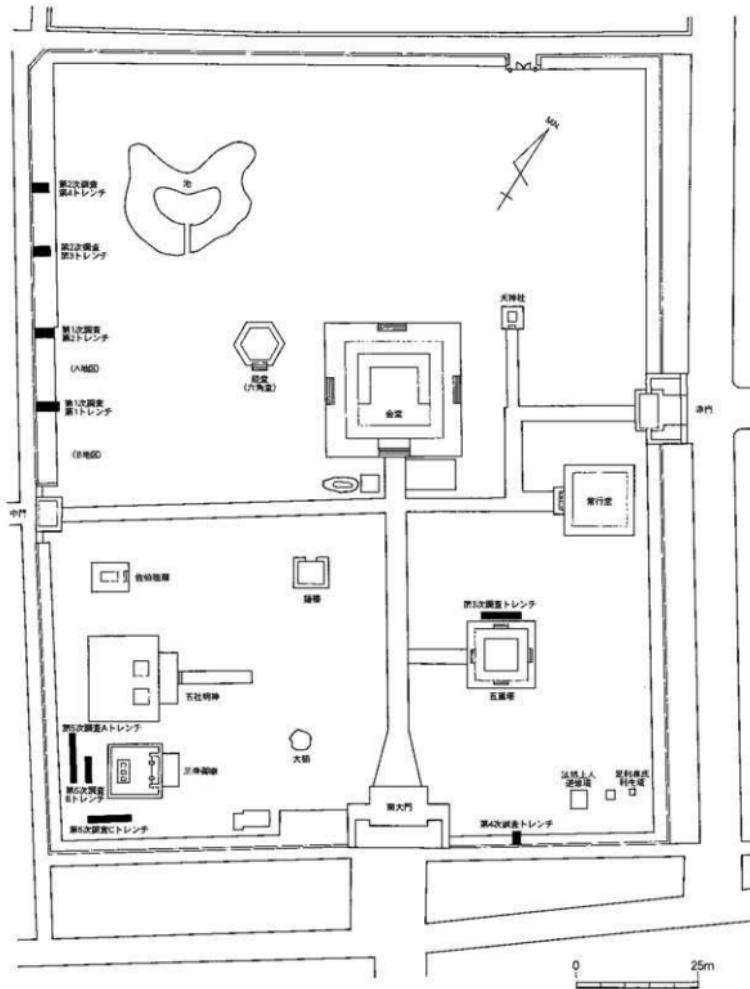
第3章 善通寺旧境内

第1節 調査の経緯と経過

總本山普通寺は平成18年に創建1200年を迎える。それに伴い今年度より境内整備が予定されているが、約30年前の部分的な調査以外に確認調査は実施されておらず、造構の状況などが不明確であった。そこで、本年度は構造物建設予定地において、確認調査を実施した。調査は他遺跡の調査の関係から断続的に行ったため、計5次に及んだ。調査方法は該当地に任意でトレーンチを設定し重機および人力にて掘削を行った。そして土層断面の観察、写真撮影、縮尺10分の1での図化を行った。なお、遺跡が県指定史跡に指定されているという重要性を勘案し、調査面積および下層の掘削は最小限に留めた。



第19図 調査区位置図 (1:5,000)



第20図 トレンチ配置図 (1:1000)

調査日誌抄

(第1次調査)

7月17日(木) 天候: 晴

重機にて調査区(A地区)の表土を除去する。すでに除去されていた表土中からも遺物が出土していたため回収を行う。

7月18日（金） 天候：雨のち曇

重機および人力にて調査区（A地区）の表土を除去する。A地区で検出された土手状遺構の平面図を作成する。

7月23日（水） 天候：曇時々雨

重機にて調査区（B地区）の表土を除去する。表土中からも遺物が出土していたため回収を行う。A地区から一連の遺構（土手状遺構）を検出する。A地区の既に検出していた土手状遺構とも併せて精査し、写真撮影を行う。撮影後、平面図を作成する。

7月24日（木） 天候：曇

A地区北側およびB地区北側にトレーニチを設定し、掘削を行う（第1・2トレーニチ）。精査後、写真撮影を行う。午後から尚トレーニチの土層断面図を作成する。夕方、埋め戻しを行い調査を終了する。

（第2次調査）

9月22日（月） 天候：曇一時雨

表土の除去を重機にて行う。表土掘削後、第3・4トレーニチを設定する。第3トレーニチを掘削・精査し写真撮影を行う。撮影後、トレーニチ北壁土層断面図を作成する。

9月23日（火） 天候：晴

第4トレーニチを掘削・精査し写真撮影を行う。撮影後、トレーニチ北壁土層断面図を作成する。午後、第3・4トレーニチを埋め戻し調査を終了する。

（第3次調査）

2月20日（金） 天候：晴

機械掘削後、壁面精査し写真撮影を行う。撮影後、北壁・東壁の土層断面図を作成し、夕方埋め戻しを行う。

（第4次調査）

3月15日（月） 天候：晴

普通寺旧境内南大門北側にて機械掘削後、壁面精査し写真撮影を行う。撮影後、西壁の土層断面図を作成する。

3月16日（火） 天候：晴

昨日作成した土層断面図の注記を行い、埋め戻しを行う。

（第5次調査）

3月22日（月） 天候：曇のち雨

調査区の位置を設定する（A～Cトレーニチ）。各トレーニチの位置図を作成する。機械掘削を開始するが、降雨のためAトレーニチ表土掘削のみで作業を中止する。

3月25日（木） 天候：曇

Aトレーニチの機械掘削・精査の後、写真撮影を行う。その後、土層断面図を作成する。Bトレーニチの掘削を行い、精査の後、写真撮影を行う。Cトレーニチの機械掘削を行う。

3月26日（金） 天候：曇のち晴

Bトレーニチの土層断面図を作成する。Cトレーニチの機械掘削を行い、精査後、写真撮影を行う。その後、土層断面図を作成する。

第2節 調査の成果

①遺構

【第1・2次調査】

調査地は善通寺旧境内の北西端に該当する。第1次調査・第2次調査とも、堀に直交するよう^にそれぞれ2本ずつトレンチを設定した。各トレンチの土層は表土および擾乱を除くと、第1層～4層に大別できる(第21図)。第1層は、土手状遺構上部に該当し水平に堆積している。締まりはやや悪い。第1トレンチ①～⑧層、第2・3トレンチ①層、第4トレンチ①②層が該当する。第2層は土手状遺構下部に該当する。第1層の下層に位置し水平に堆積している。精良な土質で締まりは良い。第1トレンチ⑩⑪層、第3トレンチ②層、第4トレンチ①②層が該当する。第3層は第4層を穿つ形で堆積している。第3トレンチ③層、第4トレンチ④層が該当する。第4層は、黒褐色土で最下層に位置する。弥生時代の遺物包含層である。第1トレンチ⑩層、第2トレンチ③層、第3トレンチ④～⑥層、第4トレンチ⑤⑥層が該当する。

遺構は第1・2層からなる土手状遺構と、さらに下層の第3層の遺構が挙げられる。土手状遺構は上層と下層において出土遺物に時期差が認められる。第3層のうち第1トレンチの遺構は、土坑状に広がる。第3・4トレンチの遺構は溝状に落ち込んでいる。平面的にも現在の堀と平行に伸びており、両トレンチの遺構は同一のものと考えられる。ただし、この遺構の西側肩は調査区外になるため確認できなかった。この遺構は、今回確認できた土手状遺構を築造する以前にあつた何らかの遺構端部の残存(例えは削平された土手状遺構)とも考えられる。

【第3次調査】

調査地は善通寺旧境内南東部の五重塔北側に該当する。現地形では更地となっている。土層は表土を除くと、第①層～③層に大別できる(第22図)。いずれの土層も水平堆積である。第①層も、近現代の客土で上層はかなりの改変を受けていたことが窺える。下層東側より瓦片が出土した。第②層は、近世の包含層である。灰褐色砂質土で少量の近世瓦を含む。第③層は、中世の遺物包含層である。中世後半の瓦・土器を少量含む。にぶい黄橙色の砂質土でしまりは良い。

遺構は遺物包含層のみで、平面・断面ともに明確な遺構は確認できなかった。

【第4次調査】

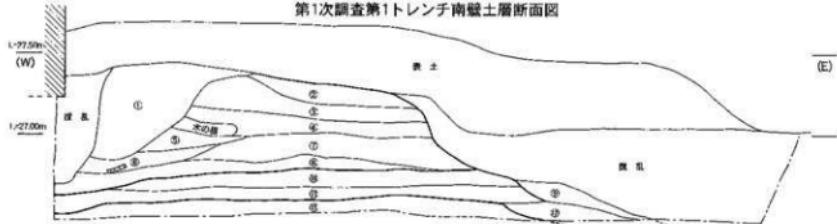
調査地は善通寺旧境内の南東端に該当する。現状では法面を石垣で補強した土手となっており、上部に耕が建てられている。土層は表土を除くと、第1層～3層に大別できる。第1層①②は、土手状遺構上部に該当し、上面を大きく改変されているものの、基本的には水平堆積をしている。第2層③は、土手状遺構下部に該当する。第1層の下層に位置し、やや南側へ下るような堆積をしている。精良な土質で締まりは良い。第3層④⑤は最下層にある。調査面積が狭い上、他の調査区とも離れており断定はできないが、現段階では基礎層と考えたい。

遺構は第1・2層からなる土手状遺構が挙げられる。土手状遺構は上層と下層において時期差が認められる。堀や石垣による改変のため、両側に立ち上りは確認できず、正確な幅は不明である。なお、第2次調査で確認した弥生時代の包含層は確認できなかった。

【第5次調査】

調査地は善通寺旧境内の南西端に該当する。現状では更地となっている。土層は表土を除いて第1層～4層に大別できる。いずれのトレンチも基本層序はほぼ同じである。第1層は、近現代

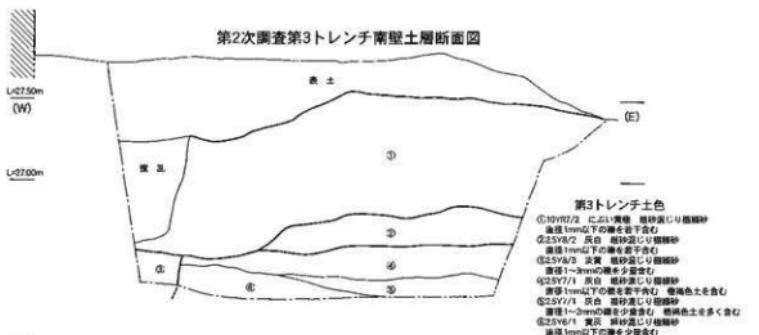
第1次調査第1トレーンチ南壁土層断面図



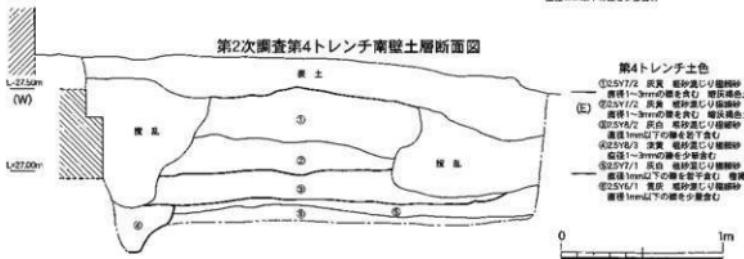
第1次調査第2トレーンチ南壁土層断面図



第2次調査第3トレーンチ南壁土層断面図



第2次調査第4トレーンチ南壁土層断面図



第21図 第1・2次調査 各トレーンチ土層断面図 (1:30)

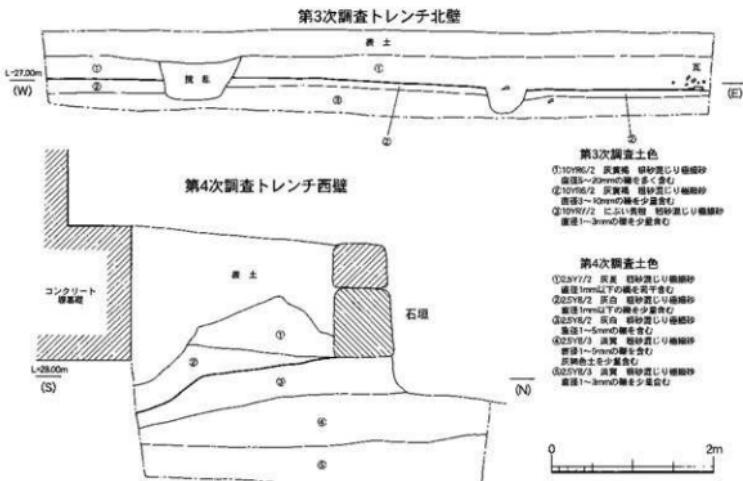
の客土層である。①⑤層が該当する。第2層は、近世の包含層である。褐灰色砂質土で近世瓦を含む。②層が該当する。第3層は、近世以前の砂礫、砂層である。遺物の混入は少なく、土層の堆積から一時的な流水による堆積層と推測できる。③⑦層が該当する。第4層は中世以前の包含層である。瓦を多く含むが、出土遺物にいぶし瓦は殆ど認められない。灰白褐色砂質土でしまりは非常に良い。④⑧層が該当する。

造構はAトレンチ北側およびCトレンチ東側を部分的に深掘りを行い、下層の状況も確認したが、いずれも遺物包含層のみで平面・断面ともに明確な造構は確認できなかった。

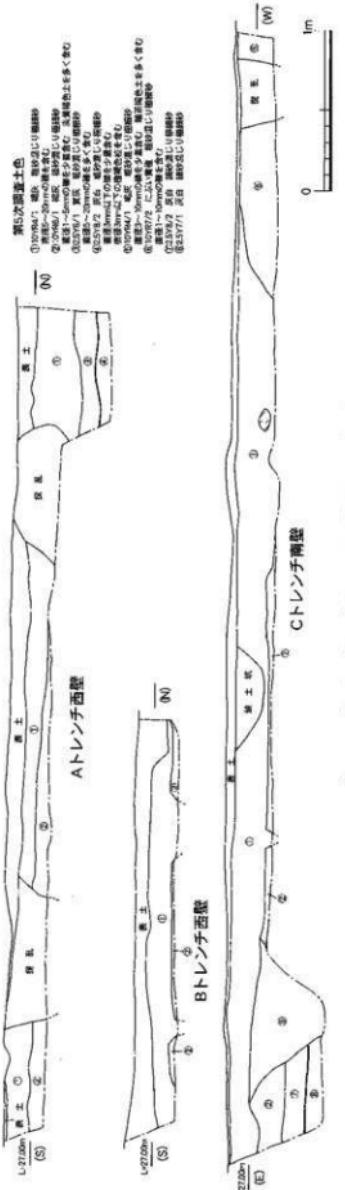
②遺物

【第1次調査】 各層から多数の遺物が出土した(第24図～33図)。18ℓ入コンテナ数で9箱を数える。これらの中、大部分が第1層から出土した瓦類である。第1層からは中世後半(室町期)の軒丸・軒平・丸・平瓦、櫛鉢・須恵器片などが出土した。一部、普通寺創建期の所産と思われる軒丸瓦や丸・平瓦が混じる。第2層からは若干の平瓦・須恵器片が出土した。時期は平瓦が格子状のタタキを施すことから中世前半以前と推定する。第3層からはほとんど遺物が出土していないが、第4トレンチから須恵器が1点出土した。第4層からは弥生土器の細片が出土した。いずれも細片で器種は鑑が1点確認できた以外は不明である。

(1)は十六葉細索弁蓮華文軒丸瓦である。調査区北側(A地区)土手状造構第1層より出土した。川畠氏分類のZN101型式に属する。復元径16.8cmを測る。瓦当部は花弁と外区の一部のみが残存する。内面には丸瓦部接合に伴う横方向の指ナデが明瞭に認められる。同形資料は仲村庵寺でも出土している。年代は白鳳末期のもので創建時に伴うものであろう。(2)は文字文軒丸瓦である。調査区北側(A地区)土手状造構第1層より出土した。内区と外区の一部が残存する。連珠文

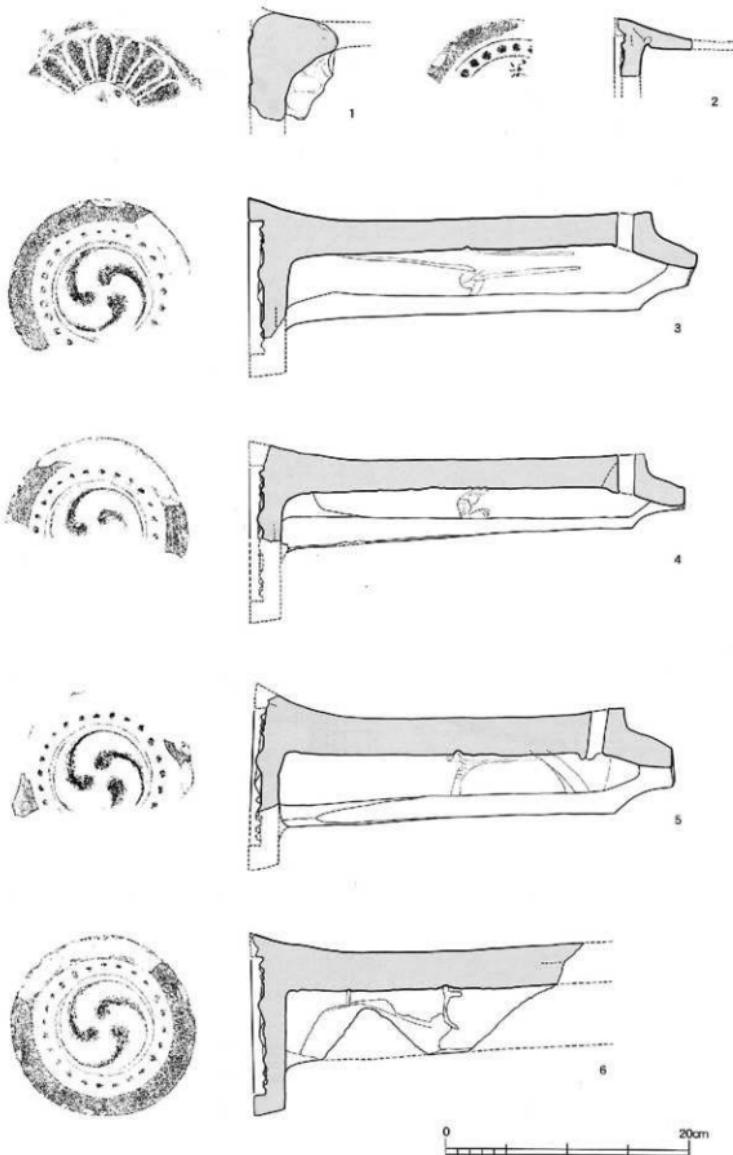


第22図 第3・4次調査 各トレンチ土層断面図 (1:60)

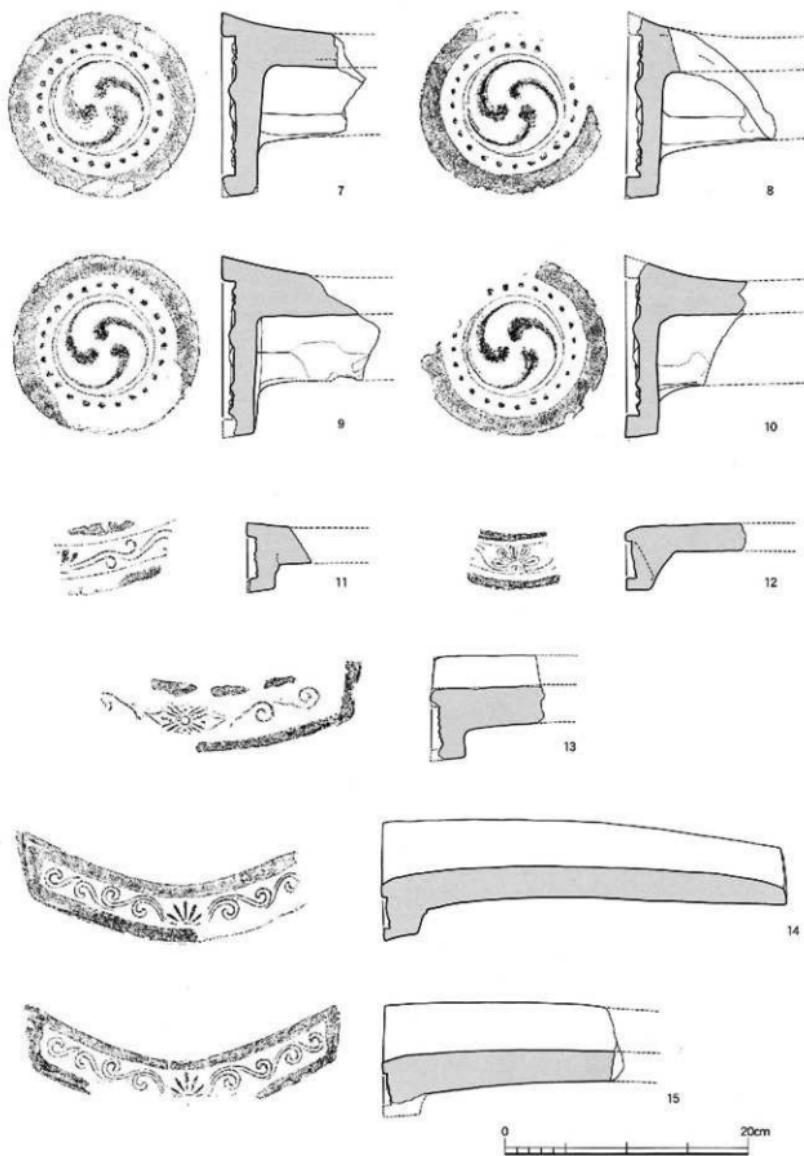


第23図 第5次調査区第5次調査区名トレンチ土層断面図(160)

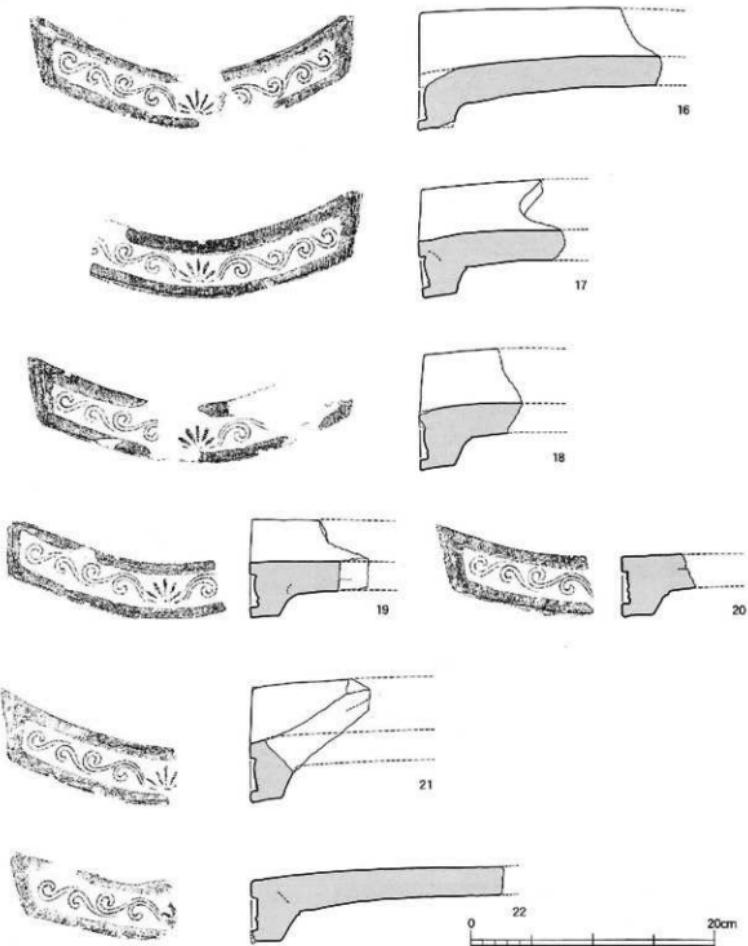
が計6個確認できる。本来は27個前後であったと推測できる。復元径15.2cmを測る。丸瓦部は薄く作られている。破片であるため明確ではないが、瓦当部内区上部に「善」らしい文字が確認できる。出土地点より「善通寺」と記されていた可能性が高いが、管見による限り類例はない。(3)～(10)は同形の右三巴文軒丸瓦である。(1)～(9)は調査区北側(A地区)土手状造構第1層より、(10)は調査区南側(B地区)表土中より出土した。直径はいずれも14.8cmを測る。巴頭部は大振りで明確である。巴尾部は長く伸び、隣接する巴文の半ばで圓線状に巡る。珠文はやや小振りで計24個ある。丸瓦部内面にはいずれも吊り紐痕が確認できる。(3)～(5)は丸瓦部まで光存しており、長さ34.4～36.8cmを測り、若干の差異がある。いずれも目釘穴が穿たれている。これらのうち范傷より(5)と(6)は同范と考えられる。時期は他遺跡の類例からおむね室町期のものとしておきたい。(11)は均整唐草文軒平瓦である。調査区北側(A地区)土手状造構第1層より出土した。素文の外縁と内区を圓線で区画する。小破片であるので全体の文様は判然としないが、瓦当中央に中心飾りを配し、そこから2回反転の唐草文を配する。唐草文各単位は2葉構成を取る。(12)は均整唐草文軒平瓦である。調査区北側(A地区)土手状造構第1層より出土した。素文の外縁と内区を圓線で区画する。小破片であるので全体の文様は判然としないが、素文縁の瓦当中央に中心飾りを配し、そこから唐草文を配する。唐草文各単位は2葉構成を取る。(13)は均整唐草文軒平瓦である。調査区北側(A地区)土手状造構第1層より出土した。瓦当中央に中心飾りを配し、そこから2回反転の退化した唐草文を配する。唐草文各単位は1葉構成を取る。(14)～(22)は均整唐草文軒平瓦である。(14)(16)～(18)は調査区北側(A地区)土手状造構第1層より、(15)(19)(20)は



第24図 第1次調査 出土遺物実測図① (1:4)

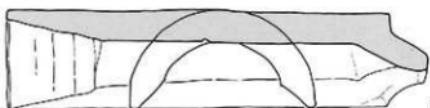
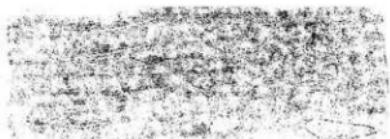


第25図 第1次調査 出土遺物実測図② (1:4)

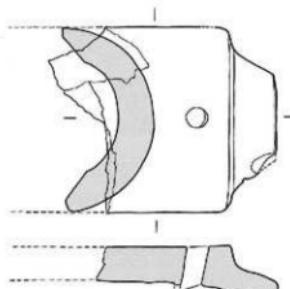


第26図 第1次調査 出土遺物実測図③ (1:4)

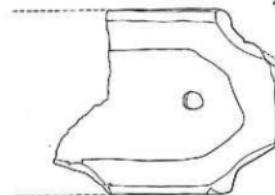
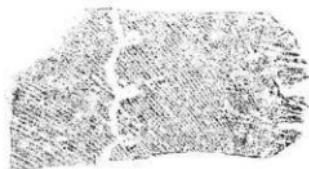
調査区南側(B地区)土手状造構第1層より、(21)(22)は調査区南側(B地区)土手状造構第2層より出土した。素文縁の瓦當中央に中心飾りを配し、そこから4回転の唐草文を配する。唐草文各単位は2葉構成を取る。これらのうち范傷の痕跡により(17)と(18)が同范と考えられる。時期は他遺跡の類例からおおむね室町期のものと考えられ、前述の軒丸瓦(3)～(10)とセット関係になると思われる。今回の調査では4種類の軒平瓦が出土した。(14)～(22)以外は善通寺での出土例は知られておらず、先後関係や軒丸瓦とのセット関係の検討は今後の課題としたい。



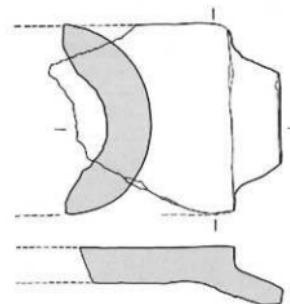
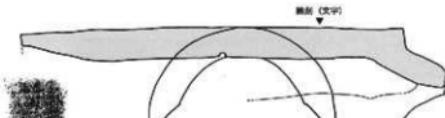
23



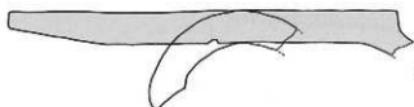
26



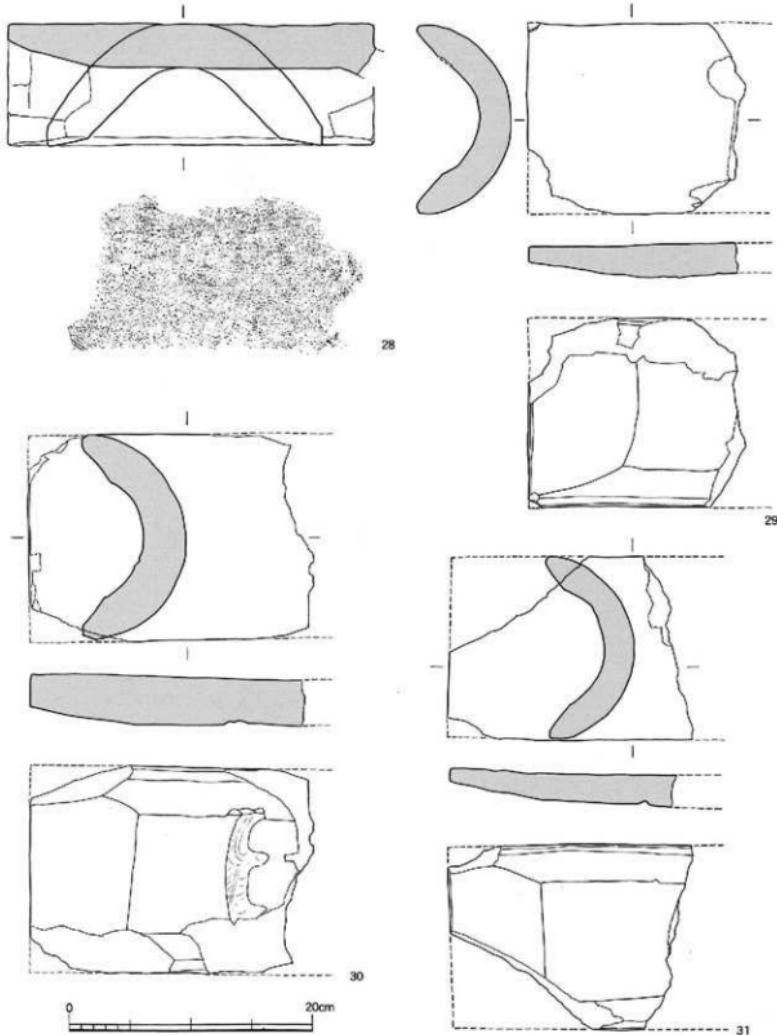
24



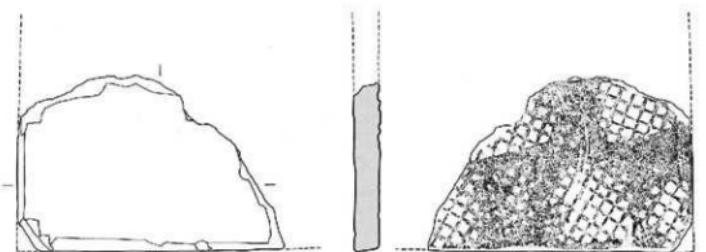
27



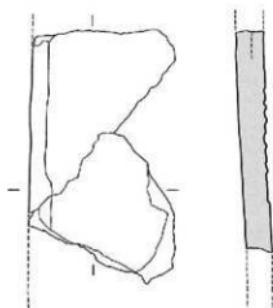
第27図 第1次調査 出土遺物実測図④ (1:4)



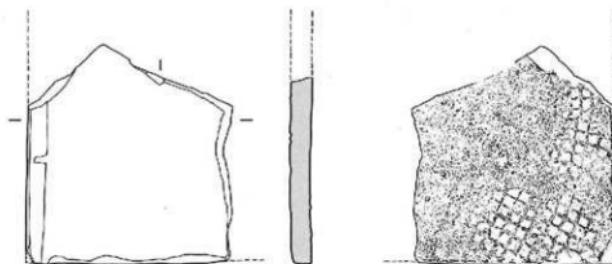
第28図 第1次調査 出土遺物実測図⑤ (1:4)



32



33

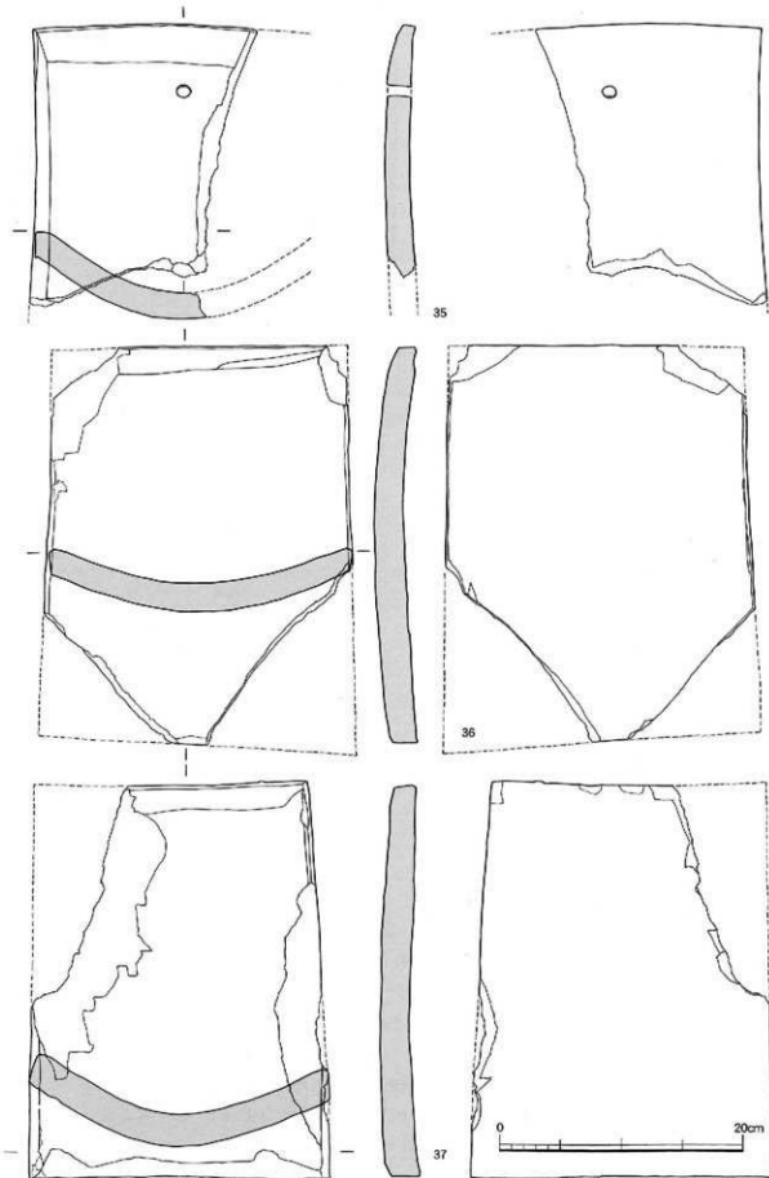


34

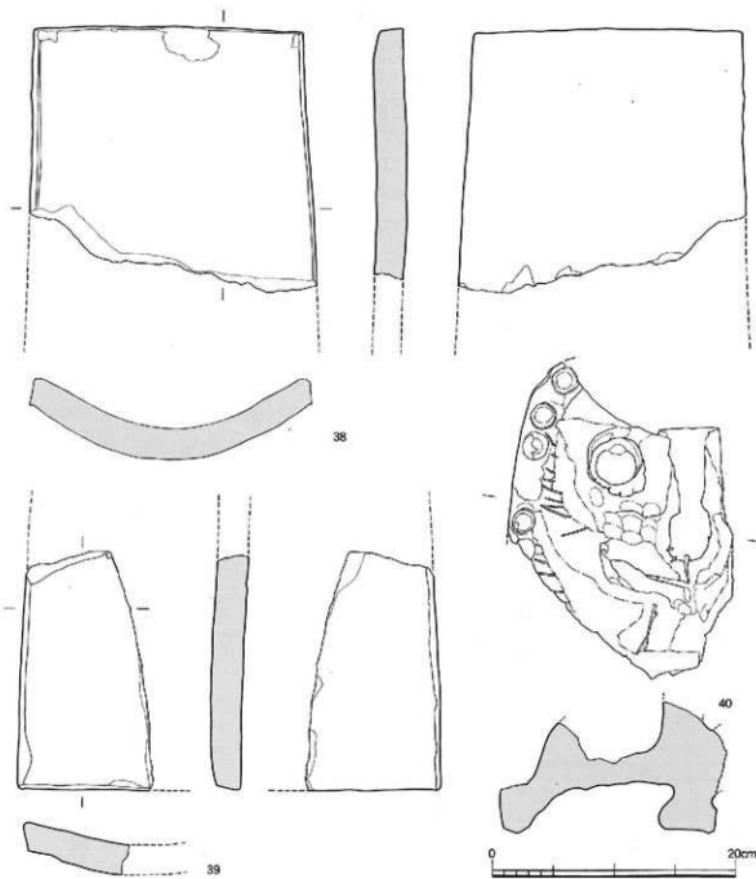


0 20cm

第29図 第1次調査 出土遺物実測図⑥ (1:4)

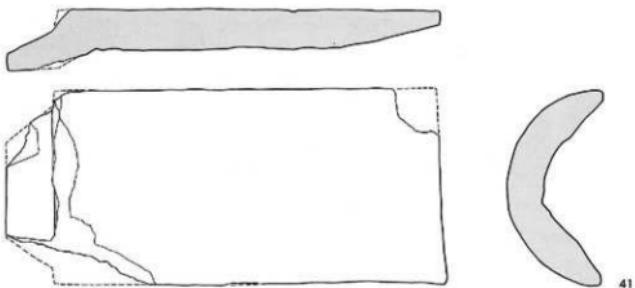


第30図 第1次調査 出土遺物実測図⑦ (1:4)

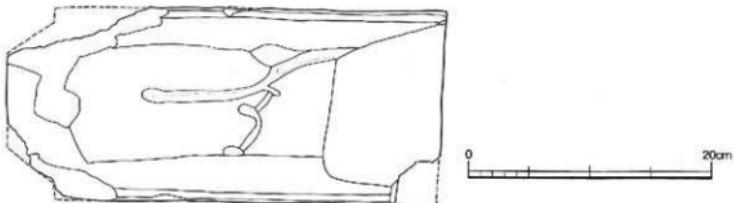


第31図 第1次調査 出土遺物実測図⑧ (1:4)

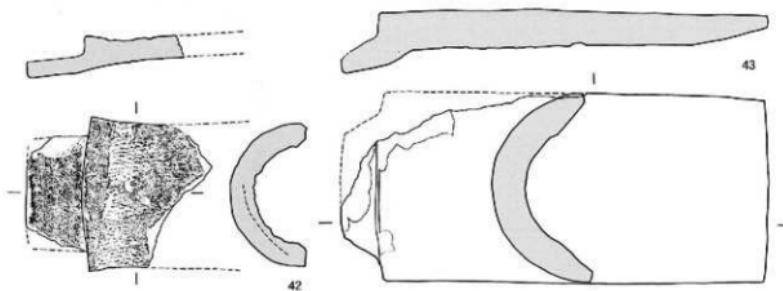
(23)～(27)、(29)～(31)は丸瓦である。いずれも調査区北側(A地区)土手状遺構第1層より出土した。すべて玉縁を有する。凸面は長軸方向にナデ調整を行なう。凹面は糸切り痕・布目痕が残存する。胸部凹面側縁は面取りを施す。(24)は凸面に「有十三」の線刻がある。人名であろうか。(26)は胸部玉縁側に目釘穴が穿孔されている。(23)～(25)・(30)は胸部凹面中程にループ状の吊り紐痕が確認できる。(28)は雁振瓦である。調査区北側(A地区)土手状遺構第1層より出土した。山形の断面を呈する。(32)～(34)は凸面に格子目叩きを施す平瓦である。調査区北側(A地区)土手状遺構第1層より出土した。凹面は布目痕が残存する。凹面側縁は面取りを施す。胎土は、砂粒を多く含み粗く、焼成は一部不良のものがみられる。(35)～(39)は平瓦で、凸面凹面ともにナデ調整を施す。調査区北側(A地区)土手状遺構第1層より出土した。凹面は、側縁・広狭端面を



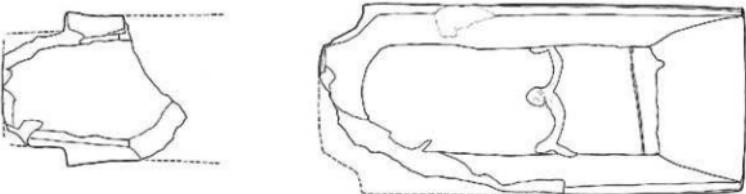
41



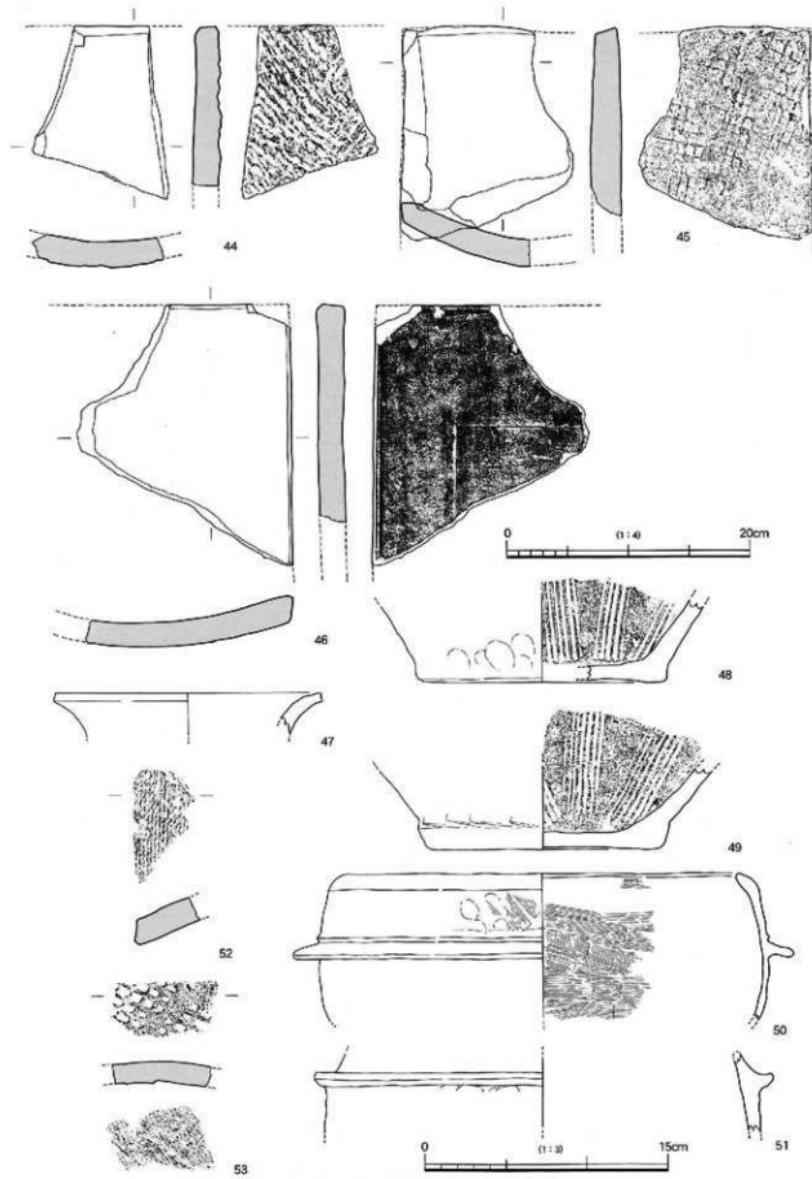
20cm



1cm



第32図 第1次調査 出土遺物実測図⑨ (1:4)

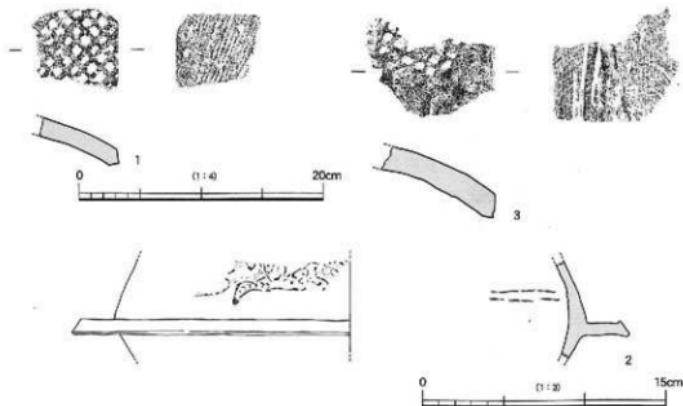


第33図 第1次調査 出土遺物実測図⑩（瓦は1:4、土器は1:3）

面取りする。(35)は、狭端面側に目釘穴が穿孔されている。(40)は須恵質の鬼瓦である。調査区北側(A地区)土手状遺構第2層より出土した。アーチ形の地板を平瓦上に曲げ、凸面に鬼面文を飾る。裏面には固定用の断面隅丸長方形の把手が付く。鬼面は団栗眼に直線的に伸びた鼻が表現されている。口は一部分しか残存していないが、牙が深い線刻で表現されている。頬にも斜め方向に線刻で鰐が表現されている。外区には幅2.5cmの珠文帯をおく。珠文は剥離した痕跡も含めて計5個残存している。形態から平安期の遺物と思われる。(41)～(43)は、丸瓦である。調査区南側(B地区)土手状遺構第1層より出土した。(41)(43)は玉縁を有する。凸面は長軸方向にナデ調整を行なう。凹面は糸切り痕・布目痕が残存する。胴部凹面側縁は面取りを施す。胴部凹面中程にループ状の吊り紐痕が確認できる。(42)は、凸面胴部に綱叩きを行なう。凹面は布目痕が残存する。焼成は不良である。(44)(45)は、平瓦である。調査区南側(B地区)土手状遺構第2層より出土した。(44)は、凸面に綱叩き、(45)は格子叩きを施す。凹面は布目痕が残存する。胎土は、砂粒を多く含み粗い。(46)は平瓦である。調査区南側(B地区)表土中より出土した。瓦質で凹面に「五重大塔尾」の刻印がある。おそらく天明8(1788)年の五重塔再建時に葺かれた瓦であろう。(47)は須恵器妻口縁である。調査区南側(B地区)土手状遺構第2層より出土した。復元口径16.5cmを測る。(48)(49)は土師質擂鉢である。(48)は調査区南側(B地区)土手状遺構第2層より出土した。底部から体部下半のみ残存する。(49)は調査区北側(A地区)表土中より出土した。(48)の底部は若干中心が入り込む平底である。体部は底部部分が垂直方向に、上部は外方へ直線的に立ち上がる。外面は底部付近はユビオサエ、体部は横方向のナデが確認できる。内面のスリメは粗い。(49)の底部は平底で、体部との接合部で一旦屈曲し、その後、直線的に立ち上がる。外面は底部との接合部に板ナデ、上方にはナデが残存する。内面のスリメは粗い。いずれも15～16世紀のものと思われる。(50)(51)は土師質羽釜である。(50)は調査区南側(B地区)土手状遺構第2層より、(51)は調査区北側(A地区)表土中より出土した。(50)は口縁部から体部下半までが残存する。復元口径24.3cmを測る。口縁部は内寄し、口縁端部は肥厚して丸く收める。羽根部は下方に向いて接合しており、端部は丸く收める。外面には斜め方向のハケメ、ユビオサエが、内面は細かなハケメが残存する。(51)は体部の口縁部付近から下半までが残存する。退化した羽根部が上方に向いて接合しており、端部は緩い面を有する。外面にはナデ調整、ユビオサエが、内面にはナデ調整が残存する。いずれも15～16世紀のものと思われる。(52)(53)は平瓦である。第1トレンチ①層中より出土した。いずれも細片であるが、確実に出土層位が把握できた遺物であるので掲載した。(52)は凸面に綱叩き、(53)は格子叩きを施す。凹面は布目痕が残存する。

【第2次調査】 各層から遺物が出土した(第34図)。18ℓコンテナで3箱を数える。これらの内、大部分が第1層から出土した瓦類である。第1層からは中世後半(室町期)の軒丸・軒平・丸・平瓦・擂鉢・須恵器片などが出土した。一部、善通寺創建期の所産と思われる軒丸瓦や丸・平瓦が混じる。第2層からは若干の平瓦・須恵器片が出土した。時期は平瓦が格子状のタタキを施すことから中世前半以前と推定する。第3層からは若干の遺物しか出土していない。第4トレンチからは須恵器の細片が出土した。第4層からは弥生土器が出土した。いずれも細片で器種は不明である。

(1)(2)は平瓦である。(1)は第3トレンチ第②層より、(2)は第4トレンチ①層上面より出土した。凸面は格子目叩き、凹面は布目痕が明瞭に残存する。端部は明確な面取りを施す。いずれも須恵質に焼成されている。(3)は瓦質の型作りの羽釜である。第3トレンチ撹乱土中より出土した。



第34図 第2次調査 出土遺物実測図(瓦は1:4、土器は1:3)

焼成は軟質である。端部および底部が欠損している。羽根部端部は明確な面を有する。内面には粘土を充填した際の痕跡が残存している。外面には型による龍文状の文様がレリーフされている。19世紀後半～末頃のものであろう。

【第3次調査】 各層から少量の遺物が出土した。18ℓ入コンテナで1箱を数える。これらの内、多くが第2層から出土した瓦類である。第3層からは近世の瓦片が出土した。第4層からは中世後半(室町期)の軒平・丸・平瓦、土師質煮沸具などが出土した。一部、善通寺創建期の所産と思われる丸・平瓦の細片が混じる。いずれも細片であったため、図化は行っていない。

【第4次調査】 各層から少量の遺物が出土した。18ℓ入コンテナで1箱を数える。これらの内、大部分が第1層から出土した瓦類である。第1層からは中世後半(室町期)の丸・平瓦、擂鉢・須恵器片などが出土した。第2層からは若干の平瓦・須恵器片が出土した。いずれも細片であつたため、図化は行っていない。

【第5次調査】 各層から少量の遺物が出土した。その大部分が瓦類である。18ℓ入コンテナで2箱を数える。第2層からは近世の瓦片が出土した。Cトレンチ第4層からは中世以前の瓦などが少量出土した。これらには、善通寺創建期の所産と思われる丸・平瓦が若干混じる。いずれも細片であったため、図化は行っていない。

第3節まとめ

【第1・2次調査】 現地形において境内を周囲するように土手状に高まっているが、いずれも同一の構造と考えられる。第1層は室町期の遺構と考えられる。第2層は第1層とは土質が異なり同時期とは考えにくい。出土遺物から推察すれば、中世前半と考えたい。第3層は須恵器片が出土したのみで明確な時期は不明である。土層の重複関係より古墳時代から古代の遺構としておきたい。第4層からは弥生式土器が少量出土した。どのトレンチからも平面的に検出されること

から、遺構の埋土ではなく弥生時代の遺物包含層と推測する。

土手状遺構は慈治2(1307)年の善通寺伽藍並寺領絵図には描かれておらず、出土遺物の年代と併せて考えると、それ以後のものと考えられる。ただし、第1層のような高さはないものの、第2層や第3層のあり方からそれ以前にも低い土手状遺構が存在していた可能性も否定できない。すなわち、中世後半のある段階には土壘状の土手で境内が区画されていたと考える。また、第1次調査では土手状遺構上面に直径10cm程度のピットを複数個確認しており、土手上には築地塀があった可能性も指摘しておきたい。

また下層には弥生時代の包含層が広がっており、善通寺創建以前から継続して集落が形成されていたと推測できる。

【第3次調査】 今回の調査において明確な遺構は検出されなかったが、遺物包含層が存在していることや、古絵図にも建物が描かれている辺りであることから、周辺に何らかの遺構が存在している可能性が高い。各層位は、第1層が現代、第2層が近現代の所産と考えられる。第3層は出土遺物から近世、第4層は中世後半の軒平瓦が出土したことから室町期と推測する。

【第4次調査】 現地形において境内を四周するように土手状に高まっているが、第1・2次調査で確認した土手状遺構と、出土遺物、土層の質・堆積状況に大差がなく、同一遺構と考えられる。各層位は、第1層が室町期の土手状遺構と考えられる。第2層は第1層とは土質が異なり同時期とは考えにくい。出土遺物の年代と併せて考えると、第1・2トレンチ同様、室町期のものと考えられる。ただし第2層の存在からそれ以前にも土手状遺構が存在していた可能性も否定できない。また下層には弥生時代の包含層が広がっておらず、善通寺創建期以前の集落域は旧境内北半までの範囲と考えられる。

【第5次調査】 各層位の時期は、第1層が近現代、第2層が近世の所産と考えられる。第3層は層序から近世以前、第4層は出土遺物の詳細な検討が必要であるが、現段階では中世以前と推測する。今回の調査において明確な遺構は検出されなかったが、遺物包含層が存在していることから周辺に遺構が存在している可能性が高い。

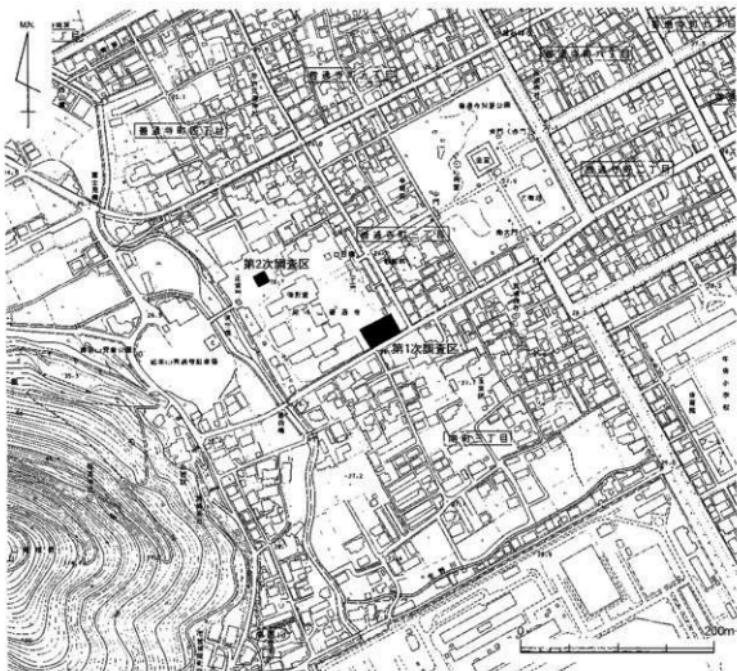
以上のように平成15年度は善通寺が建物や石造物設置を行う計画があったため、それに伴う小規模な確認調査を行った。5次に及ぶ調査は、旧境内を四周する土手状遺構の調査(1・2・4次調査)と、境内地の調査(3・5次調査)に大別できる。土手状遺構の調査では、遺構の時期が中世後半(室町期)の所産であることが判明した。遺構の残存度は良好で、幾層にも丁寧に積み上げていることが断面から把握できる。ただし上面および両端部は削平されており、正確な高さ・幅は確認できなかった。出土遺物より善通寺創建期に伴う遺構ではないと考える。現状では旧境内を全周するように巡らされており、出土遺物の年代より中世後半以降の景観を維持していると考えられる。また第1・2次調査では、土手状遺構の下層に弥生時代の包含層を確認した。善通寺創建以前から永続的に集落が営まれていたことがわかる。第3・5次調査では明確な遺構は確認できなかったが、各時期の遺物包含層を確認した。このことより周辺に何らかの遺構が存在している可能性が高く、今後注意を要する。

第4章 善通寺陣所跡

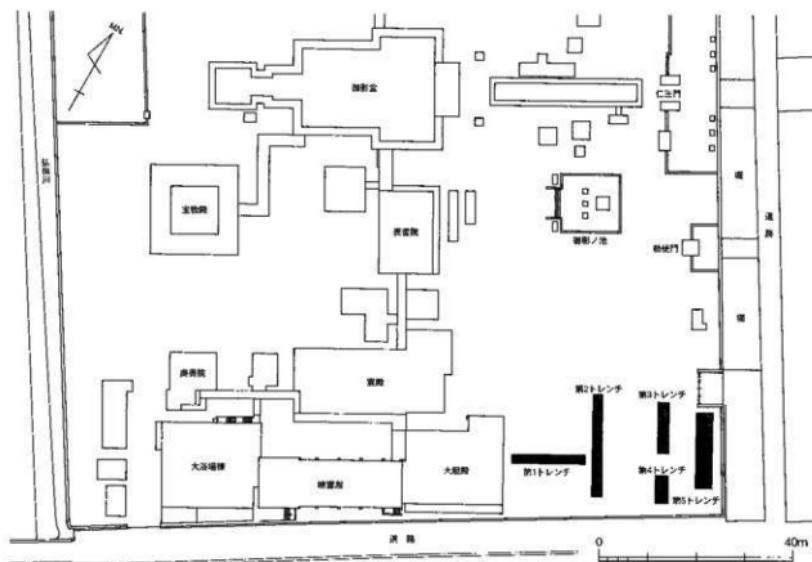
第1節 調査の経緯と経過

總本山善通寺は平成18年に創建1200年を迎える、それに伴い今年度より境内整備が予定されている。善通寺西院(誕生院)でも建物の建設が予定されている。当該地は善通寺陣所跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に認知されているが、今まで発掘調査が実施されたこともなく遺跡の詳細も不明確であったため、確認調査を実施した。調査は建物建設が計画されている西院南東隅(第1次調査)と、北東部(第2次調査)の2箇所である(第35図)。本遺跡は寛文3(1663)年に香西成資によって作成された『南海治乱記』に、阿波国の三好実休が香川氏征討のため、長禄元(1558)年、金蔵寺に本陣を構え(金蔵寺陣所)、さらに軍勢を進めて善通寺へ陣所を移したという記載が見られる。この陣所が現在の善通寺西院と伝えられている。

調査方法は該当地に任意でトレッチを設定し基盤層まで掘削し、土層断面の観察、写真撮影、縮尺10分の1での図化を行った。また、基盤層より下層の堆積状況を確認するため部分的に深



第35図 調査区位置図(1:5,000)



第36図 第1次調査 調査区配置図 (1:1000)

掘りを行い、状況把握に努めた。

なお、第1次調査地と第2次調査地は同一の周知の埋蔵文化財と認知されているが、直線距離にして約150m離れている上、遺構や遺物も同時期の所産ではないので、第2節以降は調査ごとに記述する。

調査日誌抄

(第1次調査)

9月4日(木) 天候: 晴

調査区を設定する。設定後、第1トレンチの機械掘削を開始する。掘削後、壁面精査を行い写真撮影を行う。引き続き第2トレンチの機械掘削を行う。普通寺旧境内金堂北西隅のポイントからレベル移動を行う。

9月5日(金) 天候: 晴のち曇

第1トレンチ北壁土層断面図を作成する。第1トレンチは後世の搅乱を多く受けしており、基盤層がトレンチ西側で僅かに残存するのみである。第2トレンチの機械掘削・精査を行う。

9月8日(月) 天候: 晴

第1トレンチの埋め戻しを行う。第2トレンチの精査を行った後、写真撮影を行う。午後、第2トレンチ東壁土層断面図を作成する。第3・4トレンチの掘削を開始する。第3トレンチは下層の状況を探るため、南端に深掘りトレンチを設定する。深掘りトレンチは崩落の危険があるため、写真撮影・断面図作成を先行して行う。併行して第3トレンチの精査を行う。

9月9日(火) 天候: 晴

第2トレンチのビットの写真撮影後、断面図

を作成し完掘する。第4トレンチの精査を行う。溝・ピットを検出する。検出状況の写真撮影後、東壁土層断面図を作成する。併行して溝・ピット埋土の掘削を行う。

9月10日（水） 天候：雨

第2トレンチの埋め戻しを行う。第4トレンチの遺構掘削を行う。溝の畦、半裁したピットの写真撮影・断面図を作成する。午後より平面図を作成する。

9月11日（木） 天候：曇

昨日の雨天のため、第3トレンチの再精査を行った後、検出状況の写真撮影を行う。午後から第3トレンチ東壁土層断面図を作成する。併行して各遺構の写真撮影・掘削を行う。第4トレンチも再精査を行った後、完掘状況の写真撮影を行う。撮影後、平面図を作成する。

9月12日（金） 天候：雨時々曇

第3トレンチ完掘状況の写真撮影を行う。撮影後、埋め戻しを行う。第5トレンチの機械掘削・精査を行う。検出状況の写真撮影を行う。遺構の掘削を開始する。

9月14日（日） 天候：晴

第5トレンチの遺構掘削を行う。併行して東壁土層断面図を作成する。その後、完掘状況の写真撮影を行う。トレンチ平面図を作成し

た後、埋め戻しを行う。現地での作業は本日で終了する。

9月16日（火） 天候：晴のち曇

現場で使用した道具の整理を行う。遺構図面などの整理を行う。水洗等出土遺物の整理を行う。

9月17日（水） 天候：曇のち晴

遺構図面などの整理を行う。水洗等出土遺物の整理を行う。

9月18日（木） 天候：曇時々晴

遺構図面などの整理を行う。水洗等出土遺物の整理を行う。

9月19日（金） 天候：晴のち曇

遺構図面などの整理を行う。出土遺物の整理を行う。

9月23日（火） 天候：曇一時雨

遺構図面などの整理を行う。出土遺物の整理を行う。

9月24日（水） 天候：雨

出土遺物の整理を行う。

9月25日（木） 天候：雨のち曇

出土遺物の整理を行う。

9月26日（金） 天候：晴

出土遺物の整理を行う。調査用具の後片付け・撤収を行う。調査区および周辺の清掃を行う。

（第2次調査）

11月11日（火） 天候：雨のち曇

調査区の設定を行う。重機にて掘削を開始する。安全確保のため調査区の周囲に柵を設置する。

11月12日（水） 天候：曇…時雨

機械掘削を行う。調査区南側から掘削を行ったが、近現代の炭化物層が厚く堆積している。調査区北西側からはお堂のコンクリート基礎を検出する。

11月13日（木） 天候：晴

機械掘削を行う。調査区南側から掘削を行ったが、近現代の炭化物層が厚く堆積している。

また埋土から上器や石柱などが多数出土する。石柱の記年銘からいざれも幕末～戦前にかけてのものと思われる。午後、調査区中央に深掘りトレンチを設定し、掘削を開始する。大きな溝を検出する。

11月14日（金） 天候：晴

深掘りトレンチの精査を行い、写真撮影を行う。深掘りトレンチ南壁の土層断面図を作成する。併行して調査区西壁の土層断面図を作成する。

11月15日（土） 天候：曇

深掘りトレンチ南壁の土層断面図を作成する。

その後、調査道具の整理・撤収を行う。併行して調査区および周辺の清掃を行う。

11月17日（月） 天候：晴

遺構図面などの整理を行う。出土遺物の整理を行う。

11月18日（火） 天候：晴時々曇

遺構図面などの整理を行う。出土遺物の整理を行う。

11月19日（水） 天候：雨

遺構図面などの整理を行う。出土遺物の整理を行う。

11月20日（木） 天候：曇のち雨

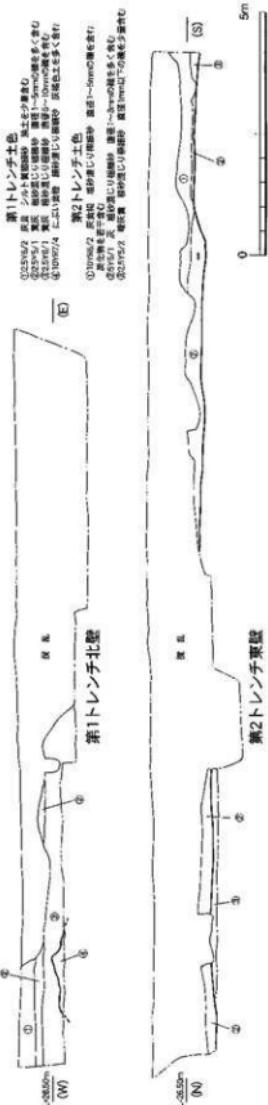
遺構図面などの整理を行う。出土遺物の整理を行う。

第2節 第1次調査の成果

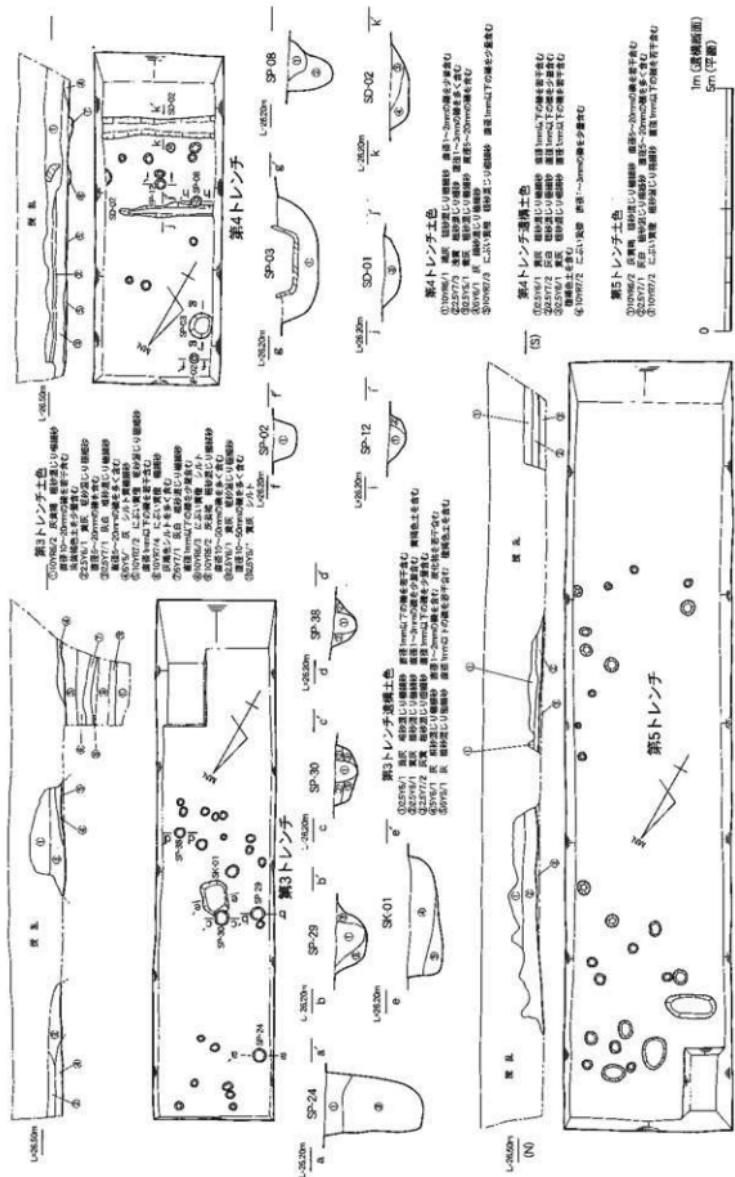
①遺構

調査地は以前は宿坊が建っていたが、現在は取り壊されており更地になっている。トレンチは宿坊基礎で搅乱されている部分を避けて計5本設定した。土層は、いずれのトレンチも表土および搅乱を除くと、第1層～3層に大別できる。第1層は近世・近代の堆積層である。第1トレンチ①②層、第2～5トレンチ①層が該当する。第2層は近世の床土である。少量の陶器が出土した。第1トレンチ③層、第2・5トレンチ②層、第3トレンチ②～④層、第4トレンチ②③層が該当する。第3層は基盤層である。第1トレンチ④層、第2・5トレンチ③層、第3トレンチ⑤～⑩層、第4トレンチ⑤層が該当する。第1トレンチ以外では、この土層上面より遺構を検出した。なお、第3層より下層にも遺構面が存在しているのか確認するために、第3トレンチ南側に深掘り部分をトレンチ南側で設定したが、湧水層や砂利層が確認されたのみで、人為的な痕跡は確認できなかった。黒褐色土で最下層に位置する。

遺構は第2～5トレンチから溝・ピットなどを検出した。遺構の密度は概ね東側の方が高い。第2ト



第37図 第1・2トレンチ土層断面図 (1:100)



レンチにおいて明確な遺構としては、トレンチ北東隅で直径30cmのピットを1基検出したのみである。第3トレンチでは、不整形な土坑1基と直径20～30cmの小規模なピット23基を検出した。ピットの配置には規則性が認められず、建物や柵には復元できなかった。第4トレンチでは、溝2条、ピット14基を検出した。溝は約1.9mの間隔で北東～南西方向に平行して穿たれている。ピットの大きさは大部分が第3トレンチとほぼ同じであるが、北西側の直径60cmのピット(SP-03)には、近世の土師質三足火鉢(第39図-9)が据えられていた。便所甕として利用されていたのであろう。第5トレンチでは、計28基のピットや土坑を検出した。他のトレンチと比べて、大きさが不揃いである。第3トレンチ同様、ピットの配置には規則性が認められない。

②遺物

第2層および第3層上面から遺物が出土したが、いずれも少量である(第39図)。18ℓ入コンテナで2箱を数える。上級器や陶磁器を中心である。

(1)は左三巴文軒丸瓦である。第1トレンチ遺構面直上より出土した。丸瓦部は瓦当より完全に剥離しており残存していない。瓦当直径が10.6cmと小振りである。巴頭部は小振りであるが明確である。巴尾部は長く隣接する巴紋の中ほどまで伸びる。珠文は現段階で9個残存しているが、計18個に復元できる。胎土はやや粗で焼成は良好である。(2)は均整唐草文軒平瓦である。第1トレンチ遺構面直上より出土した。瓦当部は小振りでやや退化した唐草文を施す。胎土はやや粗で焼成は良好である。薄手の段頭になっており、平瓦部に接合する。(1)(2)ともに近世のものと考えられる。(3)は平瓦である。第1トレンチ遺構面直上より出土した。端部はやや弱い面取りを有する。凸面には斜め方向の縄目叩きを施す。(4)は土師質の甕である。第2トレンチ遺構面直上より出土した。(5)は陶製の蓋である。第2トレンチ棍乱土中より出土した。口縁端部に釉を施す。幕末～明治期のものであろう。(6)は土師質の甕である。第3トレンチSP-28埋土中より出土した。口縁部を貼り付け、外下方に肥厚させている。端部は強い指ナデを施す。16世紀の遺物と考えられる。(7)は土師質の鍋もしくは釜の脚部である。第3トレンチ遺構面上層より出土した。強いユビオサエおよび面取りが確認できる。(8)は土師質の小皿である。第3トレンチ遺構面上層より出土した。口縁部は外方へ直線的に伸びる。端部は丸く收める。底部は平底で回転糸切りの痕跡が明瞭に残る。16世紀末頃のものと思われる。(9)は土師質の三足火鉢である。第4トレンチSD-02埋土中より出土した。埋甕として使用されていたのであろう。口縁部は肥厚し内傾する。端部は丸く收める。体部は緩い弧をえがく。脚は三足で接合時のナデの痕跡が認められる。体部外面上半に波状文が2条巡る。18世紀代の遺物と考えられる。(10)は土師質壺である。第4トレンチSD-01埋土中より出土した。近世と考えられる。(11)は須恵器甕である。第4トレンチ遺構面直上より出土した。口縁部は屈曲して下垂し、面を有する。端部は鋭く收める。(12)は平瓦である。第4トレンチ遺構面直上より出土した。端部は面取りを施す。凸面に縄目の痕跡が残る。(13)は土師器壺である。第5トレンチSP-50埋土中より出土した。近世と考えられる。(14)は土師質の羽釜である。第5トレンチ遺構面直上より出土した。口縁部は内傾し端部は丸く收める。羽根部は退化した形態で、断面は不整な三角形状を呈する。内外面ともに横方向のナデを施し、外面羽根部下方には明瞭なユビオサエの痕跡が残存する。15世紀代のものと思われる。



第39図 第1次調査 出土遺物実測図 (瓦および9は1:4, 他は1:3)

第3節 第1次調査のまとめ

第1次調査地は普通寺陣所比定地の南東隅に該当する。遺構は溝やピット、土坑のみで直接陣所跡に結び付けられる遺構・遺物は発見できなかった。普通寺陣所跡は、三好実休が香川氏との合戦のため陣所を構えたとされているが、「南海治乱記」による記述のみで考古学的な調査は全く行われていなかった遺跡である。出土遺物は中世後半から近世にかけてのものが出土しているが、陣所に直接関わる遺物であるか更に検討を要する。遺物は主に近世のものである。柱穴や溝

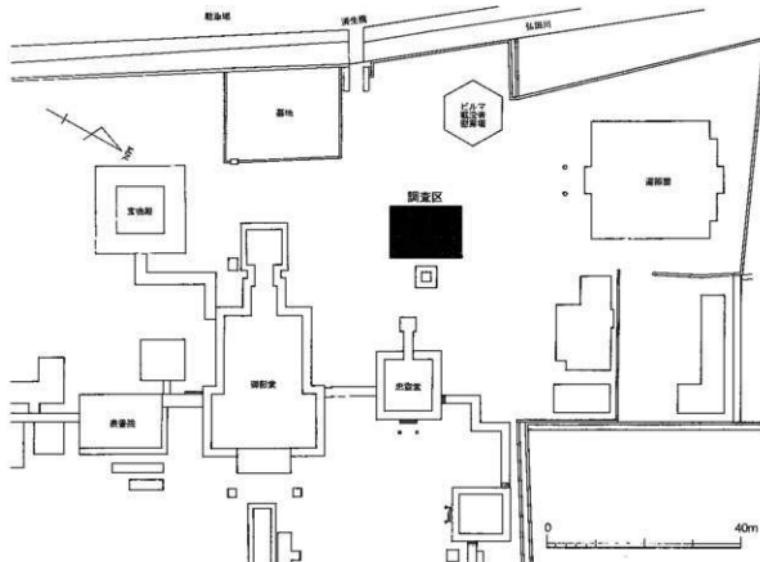
はこれらのかな小規模な建物群であった可能性がある。むしろ陣所との関係よりも、近世普通寺に関わる施設を想定したい。

第4節 第2次調査の成果

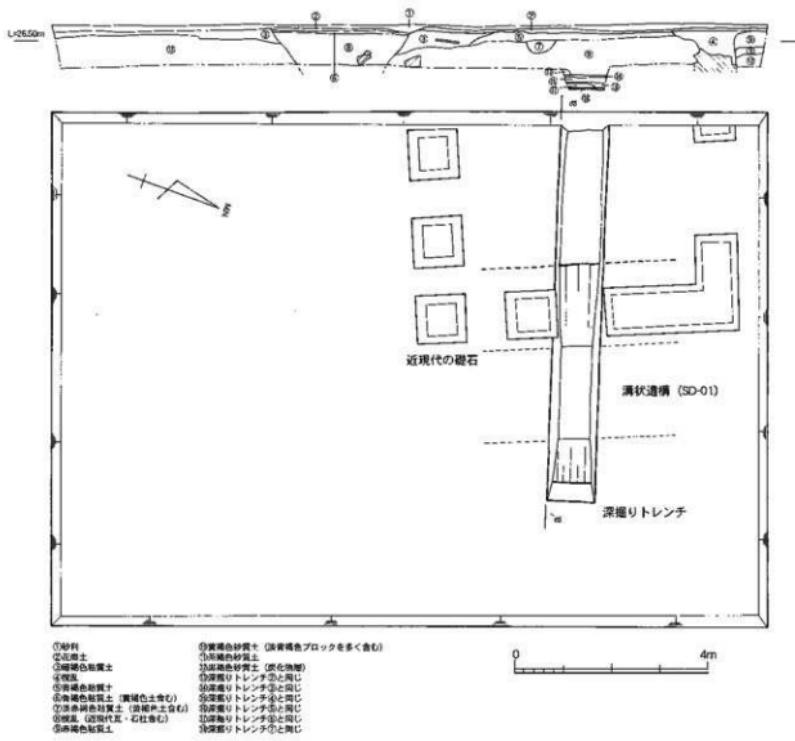
①遺構

調査地は總本山普通寺へ通じる済生橋を渡ってすぐ北側の箇所である(第40図)。以前堂宇が建っていたが、現在は更地である。この場所に聖天堂再建の計画があったため、確認調査を行った。まず掘削予定深度(現地表面より約80cm)まで全体を掘削したが、近現代の土器・陶磁器、石柱などの入った搅乱や、炭化物層、焼土層しか検出できなかった。そこで下層の状況を把握するため、調査区北側の任意の位置において、東西方向に深掘りトレンチを掘削した。その結果、溝状遺構を検出した(後述)。溝状遺構埋土の土層は、第1層～4層に大別できる。第1層は、近世の遺物包含層である。遺物は陶磁器や瓦などが少量出土している。第2層は溝の流入上である。埋土の状況からさらに上下2層に細分できる。遺物は須恵器、土師器などが出土したが、下層の方が出土量が多い。第3層は溝の最下層の流入土でシルト質の砂層である。遺物は出土していない。第4層は基盤層である。

当初予定していた掘削深度まででは、近代以降の炭化物層および花崗土層のみで、遺構は全く



第40図 第2次調査 調査区配置図 (1:1000)



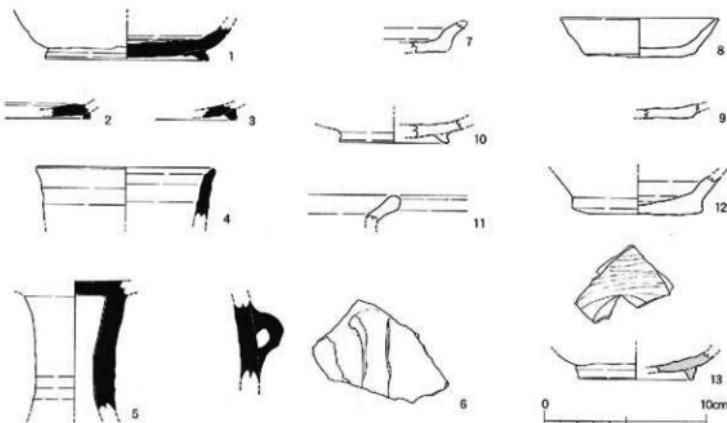
第41図 第2次調査 調査区平面・土層断面図 (1:100) 深掘りトレンチ土層断面図 (1:50)

検出されなかった。調査区中央北側に東西方向に深掘りトレンチを掘削したところ幅4.5m以上、深さ1mを測る溝状遺構を検出した(第41図)。溝状遺構は、トレンチによる部分確認のため正確な方向は不明確であるが、概ね北西—南東方向に流れている。

②遺物

溝状遺構第1層からは近世の陶磁器、瓦などが出土した。第2層から須恵器、土師器などの遺物が出土した。第2層からは須恵器(高坏・坏・把手)、土師器(皿・坏・壺)、黒色土器などが出土した。調査時には、同一土層と認識し一括で取り上げたが、その後の土層観察により上下2層に分けられることが判明した。18ℓ入コンテナで2箱を数える。以下、第2層出土遺物について記述する(第42図)。

(1)～(3)は須恵器坏身である。(1)は、底部径が9.8cm。(2)・(3)は小片である。外面底部の調整は、(1)が回転ヘラ削りで、かなり難に施している。(2)・(3)は、ヘラ切り未調整である。高台は3個体とも貼り付けで、形態は退化している。色調は灰白色を呈し、胎土はやや粗で直径1mm大の長石・酸化腐り礫を含む。焼成はやや軟質である。年代は7世紀末～8世紀に該当すると推定される。(4)は、須恵器壺口縁部である。復元口径、10.8cm。端部はやや外側に開き、面を持つ。色調は灰色を呈し、胎土は密で、焼成はほぼ良好である。(5)は、須恵器高坏である。脚部上部のみ残存する。脚部最小径が4.9cmと大きく、厚みも最大で1.4cmであることから、大型の高坏であると考えられる。色調は、淡灰白色を呈し、胎土は粗で、焼成は軟質である。(6)は、須恵器蓋である。把手部分のみ残存する。破片であるため全体の器形は不明。体部外面は平行叩きを施す。内面は同心円文のち回転ナデを行なう。把手は幅約1.5cmで、扁平な形状である。帯状の粘土板の上端を体部にナデ付け密着させた後、把手部中程以下をそのまま体部に貼り付ける。外面は自然釉をかぶる。色調は、淡灰白色を呈し、胎土はやや粗で、焼成はほぼ良好である。(8)(9)は土師器坏である。(8)は、口径9.8cm、器高2.4cm、底径6.7cmを測る。外面底部は、ヘ



第42図 第2次調査 出土遺物実測図 (1:3)

ラ切り後、多方向のナデを施す。体部から口縁部にかけては、横ナデを施す。内面見込み部は、多方向のナデを、体部から口縁部にかけては、横ナデを施す。色調は、淡橙褐色を呈し、胎土は密で、焼成はほぼ良好である。10世紀末～11世紀初頭に該当する。(9)は底部のみ残存する。外面底部にヘラ切りを施す。内面見込み部は、多方向のナデを施す。色調は、橙褐色を呈し、胎土は密で、焼成はほぼ良好である。(7)(12)は土師器円盤状高台杯である。底部から体部下半にかけて残存する。(7)は体部下方を強くナデ、外反させる。外面底部はヘラ切りを行う。内面はナデを施す。色調は淡灰褐色を呈し、胎土は密である。焼成は不良である。(12)は底部径8.0cmを測る。外面底部はヘラ切りを施す。内面底部はナデを施す。色調は淡灰白色を呈し、胎土は粗である。焼成は不良で、外面は熱効率不良のため黒色化している。2個体とも10世紀後半に該当する。(10)は、土師器碗である。底部のみ残存する。底部復元径は、6.6cmを測る。外面底部は、高台を貼付け後、横ナデを施す。色調は淡褐色を呈し、胎土は密で、焼成はほぼ良好である。11世紀代に該当すると考えられる。(11)は、土師器壺である。口縁部のみ残存する。端部は、やや外反し面を持つ。色調は、淡灰白色を呈し、胎土は粗で、焼成は不良である。(13)は、黒色土器碗である。底部のみ残存する。内面のみ炭素を吸着させた黒色上器A類である。底部復元径は、6.8cmを測る。外面底部はヘラ切りを施し、逆三角形の形状の高台を貼付ける。内面は3～4mmの幅のヘラ磨きを施す。外面の色調は、橙褐色を呈し、胎土は密で、焼成はほぼ良好である。10世紀末～11世紀初頭に該当する。

第5節 第2次調査のまとめ

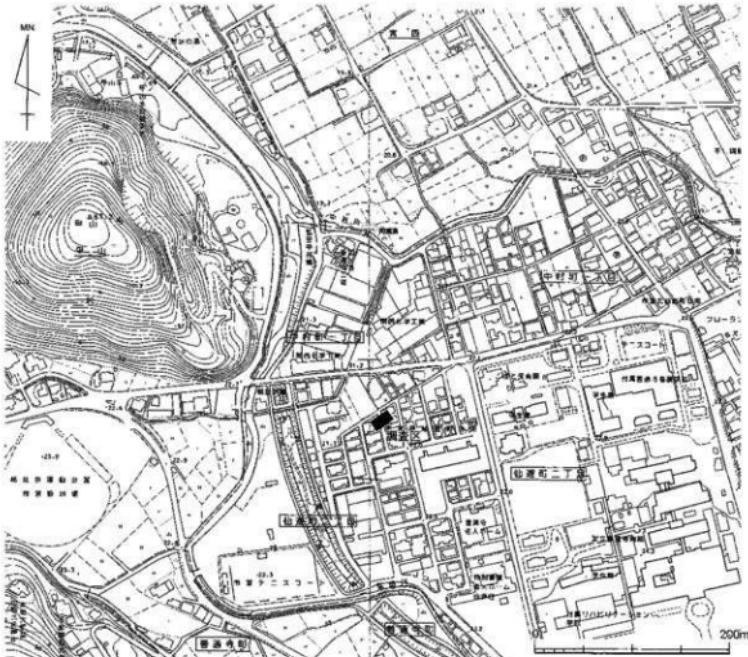
調査地は善通寺跡所跡の北西部に該当する。当初想定していた中世後半の陣所跡に関する遺構・遺物は発見できなかったが、古代に遡る大規模な溝状造構を検出した。時期は溝状造構第1層が近世の遺物包含層である。溝状造構第2層は出土遺物より、(1)～(6)の7世紀末～8世紀の遺物と、(7)～(13)の10世紀後半～11世紀の人々く2時期に分かれる。溝状造構は、トレンチ掘りによる部分調査であり重機掘削しているため、出土遺物の正確な層位は確定できなかったが、上層も2層に分層される。以上の事項から、第2層下層は7世紀末～8世紀、第2層上層は10世紀後半～11世紀の年代を付与しておきたい。溝状造構はその位置から多度郡三条と四条の境溝の可能性が高い。溝の方向は現状では磁北から23°西偏し、条里方向(N30°W)とは必ずしも一致しないが、調査面積の狭小さによる誤差とも考えられよう。今後、遺物の詳細な検討によって、善通寺寺域に編入される以前の土地環境や条里方向との関係から造構の性格が明らかになる可能性がある。

第5章 旧練兵場遺跡

第1節 調査の経緯と経過

調査地は旧練兵場遺跡の北西側に位置する(第43図)。調査地南側隣接地では平成12・13年度に善通寺市教育委員会・元興寺文化財研究所が発掘調査を実施し、掘立柱建物、堅穴住居、溝、柱穴、ピットなどを検出した。また、東側の国立善通寺病院敷地内では香川県埋蔵文化財調査センターによって調査が行われ、夥しい数の遺構・遺物が発見されている。また近年、銅鐸の破片が出土し、旧練兵場遺跡の重要性が増してきている。このような状況の中で、調査地に地域の集会場建設が計画されており、遺跡の状況を把握するため、確認調査を行った。

調査方法は建設予定地において、遺物包含層直上まで重機にて掘削し、それより下層は人力にて掘削した。その後、遺構観察、写真撮影、縮尺10分の1での図化を行った。なお、遺構は調査期間、予定建物の基礎構造などを勘案して遺構の全面掘削を行わず、一部遺構にサブトレーンチを掘削したのみで終了した。調査終了後、調査区全面に厚さ約30cmにわたって花崗土およびバラスを敷き詰め、保護措置を施した。



第43図 調査区位置図 (1:5,000)

調査日誌抄

12月17日（水） 天候：曇一時雨

調査区を設定し重機により掘削を行う。現地表面から約70~80cm下層より基盤層および遺構面を検出する。遺構は重複しており密度が高い。午後より壁面の清掃を行う。

12月18日（木） 天候：曇

重機によりさらには5cm程度掘削する。不明確であった遺構の輪郭が鮮明になる。壁面の清掃を行う。午後より調査区南壁・東壁の写真撮影を行う。撮影後、土層断面図を縮尺1/20で作成する。併行して遺構面精査を行う。

12月19日（金） 天候：晴時々曇

調査区全面の遺構面精査を行う。調査区東側より十数個のピットを新たに検出する。

12月22日（月） 天候：晴時々曇

調査区全面の遺構面精査を行う。午後、調査区全面の検出状況の写真撮影を行う。その後、調査区南壁沿いに深堀トレンチを設定し掘削する。併行してSH-01に深堀トレンチを設定し掘削する。床面および壁溝を検出する。調査区に3mメッシュを設定し割り付けを行う。

12月24日（水） 天候：晴

引き続き調査区南壁沿いの深堀トレンチを掘削する。トレンチ底面よりピットを検出し、上面の黒褐色層が溝ではなく、包含層であることを確認する。調査区の平面図を縮尺1/20で作成する。完成後、標高を落す。SH-01深堀トレンチを掘削・精査し、写真撮影を行う。SH-02深堀トレンチを設定し、掘削を行う。

12月25日（木） 天候：晴時々曇

遺構のうち主要なものを半裁し、写真撮影を行い土層断面図を作成する。小さなピットは完掘する。調査区南壁深堀トレンチを清掃し、写真撮影を行う。トレンチ底面のピットを完掘する。土層断面図の補足実測を行う。

12月26日（金） 天候：晴のち曇

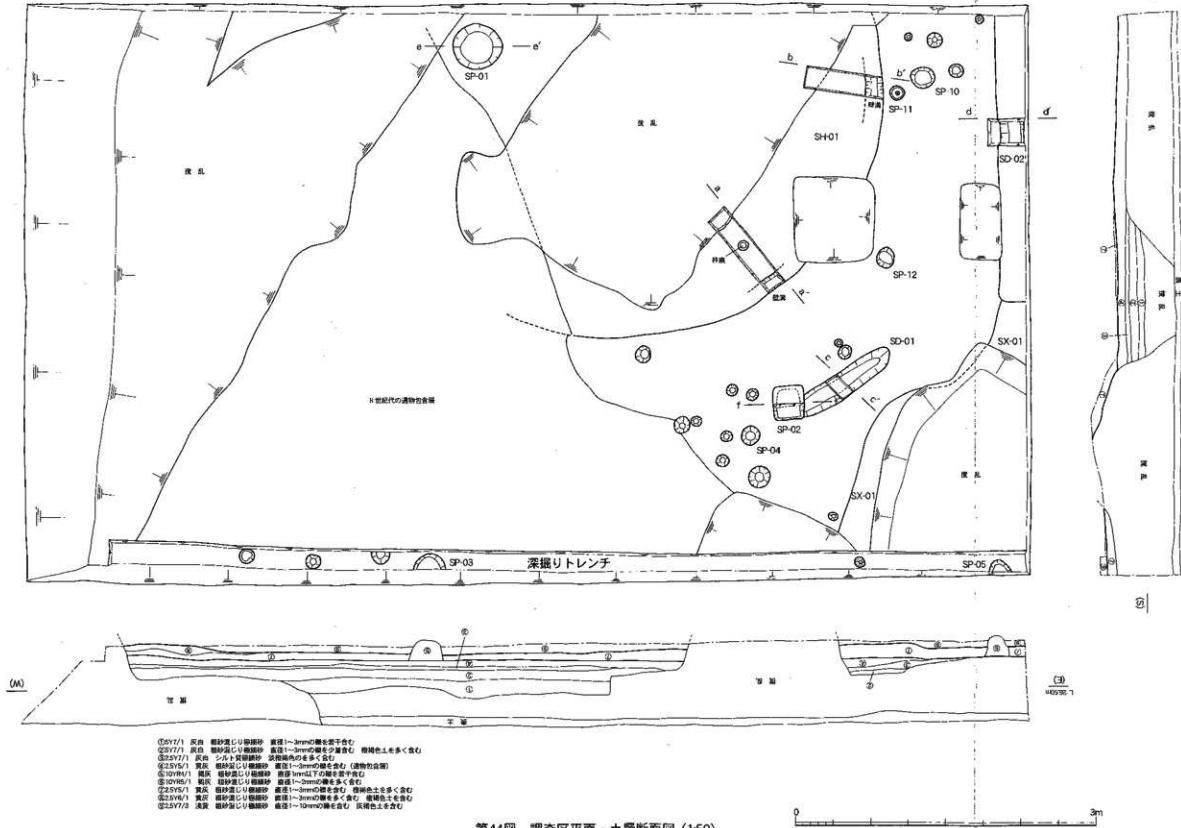
遺構のうち主要なものを半裁し、写真撮影を行い土層断面図を作成する。その後、完掘する。小さなピットも完掘する。調査区南壁中に露出している遺物を取り上げる。深堀トレンチおよび掘削した遺構を人力にて埋め戻す。午後より花崗土およびバラスを厚さ30cm敷いた後、埋め戻しを行う。本日にて現地における調査を終了する。

第2節 調査の成果

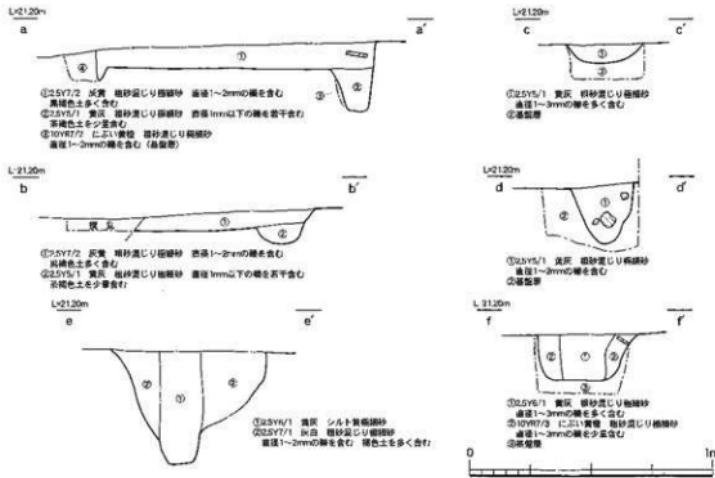
① 遺構

土層は表土および搅乱を除くと、第1層～4層に大別できる。第1層は、灰白褐色シルト質極細砂土で近世の床上である。第2層は8世紀代の遺物包含層である。弥生時代の遺構面上に調査区西側を中心に広い範囲で広がっているが、遺構は伴わない。第3層は弥生時代を中心に一部古墳時代の遺構を含む上層である。上面より多数の遺構が検出された。第4層は基盤層である。調査期間の制約上、南壁・東壁際の深掘りトレンチのみしか検出できなかったが、この面からも弥生時代の遺構を検出した。

遺構は第3層上面より多数の遺構を検出した。主な遺構としては、竪穴住居、溝、柱穴、ピットなどがあげられる。以下、主な遺構の概要を記述する。竪穴住居は1棟検出した。SH-01は、調査区中央北側で検出した弥生時代の円形住居である。中心部の大部分に搅乱を受けていたものの、2箇所のトレンチによって床面および壁溝が確認できた。直径7.7mに復元できる。溝は2条検出した。SD-01は調査区南東側で検出した。断面はU字状を呈する。長さが約2mと短いが、



第44図 調査区平面・土層断面図 (1:50)



第45図 各造構土層断面図 (1:20)

両側の立ち上がりや埋土の堆積状況から本来的にこの長さであったと考えられ、竪穴住居など別の造構の一部であったとも考えられる。SD-02は調査区東端で検出した。調査区の肩に沿うように直線的にのびる。断面は不整なV字状を呈する。南側は不明造構(SX-01)および荒乱のため、本来の長さは不明である。柱穴・ピットは計27基検出した。このうち21基は第3層上面より、6基は深掘りトレーナーで確認できた第4層上面から掘削されている。掘立柱建物などの復元は出来なかった。大部分が直径30cm前後の規模であるが、最も大きなSP-01は、直径65cmを測り明確な柱根が確認できた。

②遺物

各層から遺物が出土した。18ℓ入コンテナで2箱を数える。第2層からは、8世紀代の須恵器を中心に磨滅した弥生土器や石包丁などが出土した。第3層からは弥生式土器を中心に須恵器などが出土した。

SD02 (1)は壺底部である。底部のみ残存する。底部の器壁は厚く安定している。色調は、橙褐色を呈し、胎土は粗で直径1~2mmの大の長石・石英を多量に含む。焼成はほぼ良好である。弥生時代後期に該当する。(2)は破片のため器種は不明である。ここでは壺として図化したが、別の器種になり得る可能性もある。口縁部から体部上半まで残存する。復元口径12.8cm。口縁端部は面をもつ。外面体部上半は刷毛を施す。内面は、摩滅が著しく調整不明。色調は、橙褐色を呈し、胎土は粗で直径1~2mmの大の長石・石英を多量に含む。焼成はほぼ良好である。

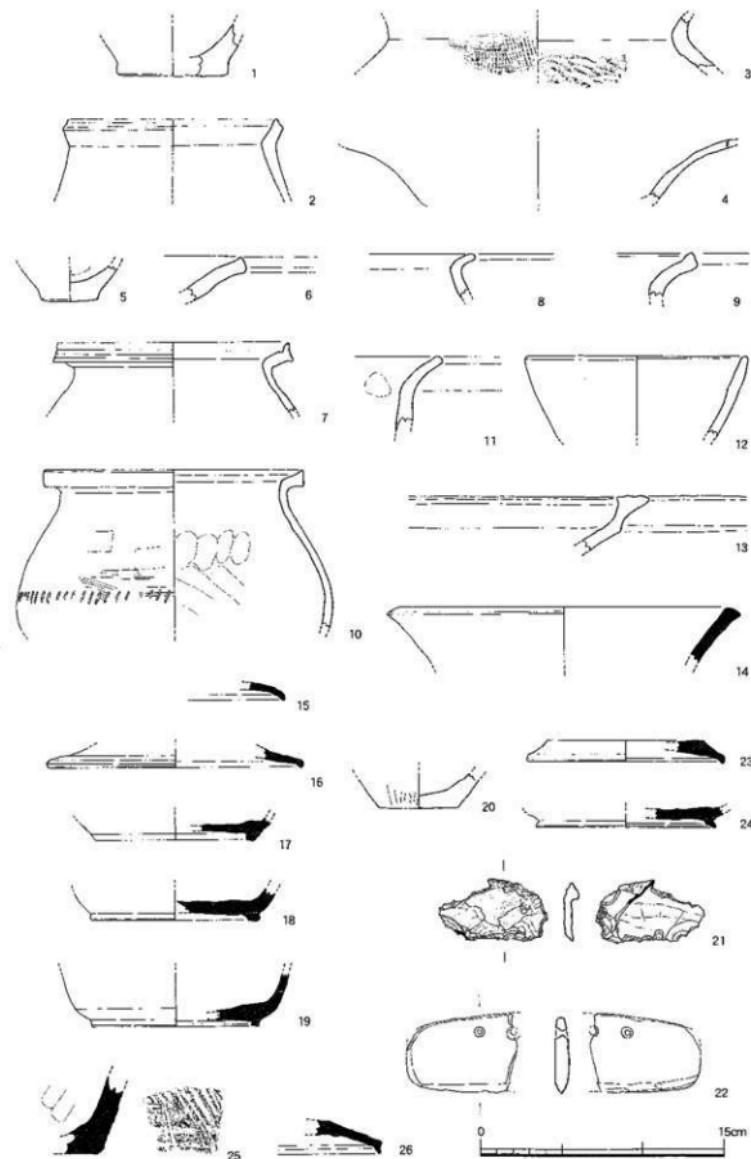
SP02 (3)は須恵器壺である。頭部のみ残存する。調整は、体部外面に平行叩き、内面に同心円文を施す。色調は、淡灰白色を呈し、胎土は粗で、焼成は軟質である。

SP03 (4)は弥生土器高壺である。内側気味の壺部に口縁部が外反して開くもので、外反部のみ残存する。色調は明橙色を呈し、胎土は粗で直径1~2mmの大の長石・石英、チャートを含む。焼

成はほぼ良好である。

深掘りトレンチ (5)は弥生土器壺である。底部のみ残存する。底部は平底で、径3.4cmを測る。底部内外面とも板ナデを施す。胎土は粗で直径1~2mm大の長石・石英を多く含む。焼成はほぼ良好である。弥生時代後期後半~終末期に該当する。(6)は弥生土器壺である。口縁部のみ残存する。大きく外反し、端部は面をもつ。色調は橙褐色を呈し、胎土は粗で直径1~2mm大の長石・石英を含む。焼成は不良である。弥生時代後期に該当する。(7)は弥生土器壺である。口縁部から体部上半にかけて残存する。復元口径は、14.2cmを測る。口縁は短く端部は断面三角形を呈し、凹線を施す。色調は暗橙褐色を呈し、胎土はやや粗で直径1~2mm大の長石・石英を含む。焼成はほぼ良好である。弥生時代後期前半に該当する。

遺構面精査 (8)~(10)は、弥生土器壺である。(8)は口縁部のみ残存する。端部は大きく外反し、丸く收める。胎土は密で直径1mm大の長石・石英および雲母を含む。焼成はほぼ良好である。弥生時代後期に該当する。(9)は口縁部のみ残存する。端部は面を持つ。色調は橙褐色を呈し、胎土は粗で直径1~2mm大の長石・石英を大量に含む。焼成はほぼ良好である。(10)は口縁部から体部上半にかけて残存する。復元口径は、15.8cmを測る。口縁は短く端部は面を持ち、頸部はやや内傾する。外面体部は刷毛を行なう。外面体部中程に刺突文を施す。内面体部は削りを施す。色調は橙褐色を呈し、胎土は粗で直径1~2mm大の長石・石英を大量に含む。焼成は不良である。弥生時代後期前半に該当する。(11)(12)は、弥生土器鉢である。(11)は復元口径13.4cm。頸部が緩やかに屈曲し外反する口縁をもつ。端部は丸く收める。色調は橙褐色を呈し、胎土は粗で直径1~2mm大の長石・石英を大量に含む。焼成は不良である。弥生時代後期に該当する。(12)はやや内脇する外形で、端部は丸く收める。調整は器壁が摩滅しており不明。色調は橙褐色を呈し、胎土は粗で直径1~2mm大の長石・石英を大量に含む。焼成はほぼ良好である。弥生時代後期に該当する。(13)は弥生土器高壺である。口縁部のみ残存する。直線的に開く壺部から口縁部が強く屈曲して斜め上方に立ち上がる。口縁端部を拡張し、凹線を2条施文している。外面口縁部は刷毛を施す。色調は橙褐色を呈し、胎土は粗で直径1~2mm大の長石・石英を大量に含む。焼成はほぼ良好である。弥生時代後期前半に該当する。(14)は須恵器壺である。口縁部のみ残存する。復元口径20.0cm。口縁端部は平坦な面を持ち、やや外反する。色調は、灰白色を呈し、胎土はやや粗で、焼成はやや軟質である。(15)(16)は、須恵器壺蓋である。2個体とも端部はかえりのない形態である。(15)は器壁が薄い。色調は、淡灰白色を呈し、胎土はやや粗で、焼成は軟質である。(16)は外面天頂部に粗いヘラ削りを施す。端部付近は回転ナデを行なう。ヘラ削りと回転ナデの付近は下方にへこんでいる。内面は、回転ナデを施す。色調は淡灰白色を呈し、胎土は密で、焼成はほぼ良好である。外面端部付近のみ自然釉をかぶる。(17)~(19)は、須恵器壺身である。3個体とも高台を貼付ける形態で底部から体部下半にかけて残存する。(17)は底部の復元径9.8cm。底部外面は、ヘラ切り後ナデを施す。高台は、底部内側に端部を内側に向け貼付ける。内面は、回転ナデを施す。色調は淡褐灰色を呈し、胎土は粗、焼成は軟質である。(18)は底部の復元径10.1cm。底部外面は、ヘラ切り後ナデを施す。高台は、底部内側に端部を外側に向け貼付ける。内面は、回転ナデを施す。器壁は厚い。色調は灰白色を呈し、胎土は粗で1mm大の長石を含む。焼成はやや軟質である。(19)は底部の復元径10.1cm。底部外面は、ヘラ切り後ナデを施す。高台は、底部内側に端部を外側に向け貼付ける。内面は、回転ナデを施す。器壁は厚い。色調は灰白色を呈し、胎土は粗で1mm大の長石を含む。焼成はやや軟質である。



第46図 出土遺物実測図 (1:4)

(17)～(19)はいずれも8世紀代に該当する。

遺構面直上 (20)は弥生土器壺である。底部のみ残存する。底部径4.8cmを測る。底部外面は刷毛、内面は板ナデを施す。色調は淡褐色を呈し、胎土は密で直径1～2mm大の長石・石英を含む。焼成は不良で外面は黒色化している。弥生時代後期に該当する。(21)は打製石包丁である。長さ6.6cm、幅3.6cm、厚さ0.4～0.9cmを測る。サヌカイト製。刃部は、片面調整である。(22)は磨製石包丁である。残存長6.8cm、幅4.8cm、厚さ0.85cmを測る。上端に2ヶ所、内孔径0.3～0.4cm、外孔径0.65～0.85cmの両面穿孔が施されている。(23)は須恵器坏蓋である。復元口径は、11.8cmである。外面天頂部はヘラ切りを施し、平坦な形状を呈す。端部付近は回転ナデを施し、端部はかえりを持たない。内面は、回転ナデを施す。色調は赤灰色を呈し、胎土は密で、焼成は良好である。8世紀代に該当する。(24)は須恵器坏身である。底部のみ残存する。底部の復元口径は10.1cmを測る。底部外面は、ヘラ切りを施す。高台は、底部内側に端部を外側に向け貼付ける。内面は、回転ナデ後多方向のナデを施す。色調は灰白色を呈し、胎土はやや粗で、焼成は軟質である。8世紀代に該当する。

壁面精査 (25)は須恵器鉢である。底部のみ残存する。外面は平行叩きを施す。内面見込み部はナデを施す。色調は灰白色を呈し、胎土は粗で直径1mm大の砂粒を含む。焼成は軟質である。(26)は須恵器坏蓋である。端部はかえりを持たない形態である。外面天頂部は回転ヘラ削りを施す。端部付近は回転ナデを施す。色調は灰白色を呈し、胎土は密で、焼成は軟質である。

出土遺物は、弥生土器・石器と須恵器であるが、弥生土器は後期、須恵器は8世紀のものが中心である。

第3節 まとめ

時期は第1層は近世の床土と考えられる。第2層は8世紀の遺物が大部分を占めていることから、この時期の所産と考えたい。この層からは弥生式土器も出土しているが、いずれも細片で磨滅しており一端削平された弥生時代の包含層が8世紀段階に堆積したと考えられる。第3層は弥生時代後期の包含層である。この層上面で検出された遺構の出土遺物も同時期と考えられる。第4層の遺構からも弥生式土器が出土したが、少量かつ細片であるため、遺物による時期判断は困難である。しかし、層序的に明らかに第3層よりも時期が古いため、現段階では弥生時代後期以前としておきたい。

調査地は旧練兵場遺跡の北西側に該当する。調査地の南東側約50mでは、平成12・13年度に普通寺市・元興寺文化財研究所によって発掘調査が行われ、河道などが存在しており遺構が希薄であることが判明していたが、調査地周辺では、過去の県や市による調査によって遺構の密集した状況が判明している。今回の調査では不完全ではあるが、2面以上の遺構面がある密集した遺構の広がりを捉えることが出来た。今後周辺地での調査を継続することにより、遺跡の全体像が把握できる可能性が高く調査の進展に期待したい。

【主要参考文献】

- 安藤文良編1974『古瓦百選』讃岐の古瓦 美巧社
- 安藤文良1987「歴史時代・古瓦」『香川県史』第13巻 資料編考古 香川県
- 海邊博史・中里伸明2002『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』7
　旧練兵場遺跡・四国学院大学構内遺跡・菊塚古墳 善通寺市教育委員会
- 海邊博史・渡邊淳子2003『善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』8
　菊塚古墳・三井遺跡 善通寺市教育委員会
- 香川県教育委員会2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』
- 片桐孝浩1992『川津元結木遺跡』中小河川人東川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
香川県教育委員会
- 川畑聰1996『讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館
- 木許 守1996『宮山占墳の埴丘とその系譜的位置』『権原考古学研究所紀要 考古学論叢』第
20冊 奈良県立権原考古学研究所
- 國木健司1993『生野本町遺跡発掘調査報告書』 香川県教育委員会
- 国島浩正ほか1993『史跡天霧城跡保存管理計画書』 多度津町教育委員会
- 笹川龍一1983『五条遺跡発掘調査報告書』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1985『彼ノ宗遺跡』弘田川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 善通寺教
育委員会
- 笹川龍一1986『仙遊遺跡発掘調査報告書』 旧練兵場遺跡仙遊I地区 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1988『九頭神遺跡発掘調査報告書』 九頭神遺跡発掘調査団・善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1989a『稻木遺跡』県道西白方善通寺線脇藪踏切除却工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報
告書 稲木遺跡発掘調査団
- 笹川龍一1989b『仲村庵寺』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1991『月信遺跡』県営畑地帯総合整備事業善通寺西部地区碑殿農道建設に伴う埋蔵文
化財発掘調査報告書 月信遺跡発掘調査団
- 笹川龍一1992『史跡有岡占墳群(壬墓山占墳)保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1993a『御館神社古墳発掘調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発
掘調査報告書1 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1993b『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)調査報告書』 史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)保
存整備事業に伴う発掘調査報告書 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1993c『永井遺跡発掘調査報告書』 都市計画道路大通線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告書 善通寺市埋蔵文化財発掘調査団
- 笹川龍一1994『青龍古墳発掘調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘
調査報告書2 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1995『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業 に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一・杉山 洋1996『香色山山頂遺跡群発掘調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一ほか1997『史跡有岡古墳群(宮が尾古墳)保存整備事業報告書』 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一1999『山南遺跡・彼ノ宗遺跡発掘調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋
蔵文化財発掘調査報告書5 善通寺市教育委員会
- 笹川龍一2001『鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳発掘調査報告書』 善通寺市内遺跡発掘調査事業

- に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6 善通寺市教育委員会
新編香川叢書刊行企画委員会1983『新編香川叢書』考古篇 香川県教育委員会
杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鎌について」『権原考古学研究所論集』第八 奈良県立権原考古学研究所
鈴木一有1999『五ヶ山B2号墳』静岡県浅羽町教育委員会
角南聰一郎ほか2001『旧練兵場遺跡』市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
善通寺市・(財)元興寺文化財研究所
角南聰一郎ほか2002『旧練兵場遺跡』特別養護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 善通寺市・(財)元興寺文化財研究所
善通寺市1977『善通寺市史』第一巻
高田賀太1998「古墳副葬鉄鋸の性格」『考古学研究』第45巻第1号 考古学研究会
中世土器研究会編1995『概説中世の土器・陶磁器』 真陽社
西岡達哉編1989『籠木遺跡』四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6冊
香川県教育委員会
西岡達哉編1995『龍川四条遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第15冊
香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
西岡達哉編1997『旧練兵場遺跡』国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
第1冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
西岡達哉編1998『旧練兵場遺跡』国立善通寺病院看護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報
第2冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
原秀三郎編1995『遠江堂山古墳』磐田市教育委員会
廣瀬常雄1994『金蔵寺下所遺跡・西碑殿遺跡』四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第10冊 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
藤井直正1983「讃岐国古代寺院の研究」『藤澤一大先生古希記念論集 古文化論叢』
藤直幹・井上薰・北野耕平1964『河内における古墳の調査』 大阪大学文学部国史研究室
松本豊胤・森本義臣・東原輝明1983『壬墓山古墳調査概報』 善通寺市教育委員会
松本敏三1987『県道西白方善通寺線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和61年度
善通寺市・香川県教育委員会
真鍋昌宏ほか1987『中村遺跡・乾遺跡・上一坊遺跡』四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 香川県教育委員会
真鍋昌宏・渡部明夫1987『矢ノ塚遺跡』四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 香川県教育委員会
真鍋昌宏2003『山南遺跡』県営住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 香川県教育委員会・
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
森格也2003『北原2号墳・北原遺跡』県道観音寺善通寺線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発
掘調査報告 香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
森下英治1996『旧練兵場遺跡』Ⅲ 平成7年度国立善通寺病院内発掘調査報告 香川県教育委
員会
森下英治2001「善通寺市旧練兵場遺跡における弥生土器の編年と地域性の検討(上)」「研究紀要」
IX 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
安田和文・笛川龍一1984『仲村施寺発掘調査報告』旧練兵場遺跡内 善通寺市教育委員会
矢原高幸1973『善通寺市の古代文化』 善通寺市
渡部明夫1990『永井遺跡』四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9冊
香川県教育委員会

写真図版





1. 古墳遠景
(南から)



2. 調査地遠景①
(北から)



3. 調査地遠景②
(北西から)

図版2 菊塚古墳



1. 第1トレンチ完掘状況
(北から)



2. 第1トレンチ平面拡大
(北から)



3. 第1トレンチ東壁拡大
(西から)



1. 第2トレンチ完掘状況
(西から)



2. 第2トレンチ平面拡大
(東から)



3. 第2トレンチ断面拡大
(北から)

図版4 菊塚古墳



1. 第3トレンチ全景
(北から)



2. 第3トレンチ東壁
(西から)



3. 第4トレンチ全景
(東から)

1. 第4トレンチ西壁拡大
(東から)



2. 第5トレンチ全景
(北から)



3. 第5トレンチ南壁
(北から)



図版6 菊塚古墳



1. 第5トレンチ西壁
(東から)



2. 第6トレンチ全景①
(西から)



3. 第6トレンチ全景②
(北から)

1. 第6トレンチ東壁
(北西から)



2. 第6トレンチ東壁拡大
(北西から)



3. 第6トレンチ南壁
(北から)



図版8 菊塚古墳



1. 第7トレンチ検出状況
(北から)



2. 第7トレンチ完掘状況
(北から)



3. 第7トレンチ南壁拡大
(北から)

1. 第8トレンチ検出状況
(西から)



2. 第8トレンチ完掘状況
(西から)



3. 第8トレンチ北壁
(南から)

